

910.8-Ko45ウ



1200500754824

910.8
45
20



始



32.12.24

910.8
K645
(12)



文學博士 尾上八郎著

今和歌集選釋

東京日本文學社



610-200

附
花柳
目錄

古今和歌集選釋

目次

序.....	一
卷第一 梅 春歌上.....	四三
卷第二 櫻 春歌下.....	六一
卷第三 夏 歌.....	七三

14

天ノ川
オノノ川
女郎花

卷第四

秋歌上.....八〇

卷第五

秋歌下.....九九

卷第六

冬.....一五

卷第七

祈.....一二四

卷第八

離別.....一三一

卷第九

卷第十

旅心.....一四二

物名.....一四八

卷第十一

戀.....一五六

卷第十二

戀.....一六一

卷第十六

哀傷.....一六六

卷第十七

雜部上.....一七五

卷第十三

戀 三

一八八

卷第十四

戀 四

一九五

卷第十五

戀 五

二〇五

古今和歌集選釋

本講義は拙著「校註古本古今和歌集」を底本とした。

古今和歌集の序

やまと歌は、人の心を種として、萬の言のほとぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、いひいだせるなり。花に啼く鶯、水にすむ蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれかは歌を詠まざりける。力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をも和らげ、猛きものよふの心をも慰むるは歌なりけり。



【語釋】

○やまと歌 和歌。詩を唐歌と云ふのに對して、歌を和歌と云ふ。○言のは 言葉。○ことわざしげき 事業。しげきは繁き。する事の多い事。○生きとし生けるもの 生きて居る者は凡て生きとしのしは意味を強める辭。○天地を動かし天地を感動させ。○鬼神 元は人の靈魂を云ふ言葉であるが、此處は普通に云ふ鬼神の意。威力の強い神と云ふ程の意。○あはれと思はせ あゝと感心させる。感心させるものは善惡美醜、喜怒哀樂いづれでもいゝ。ともかくあゝと心に感ず

るから發する語があはれである。○猛きものゝふ「ものゝふ」は武士。平安朝では武士は、戰爭をする事を知つて居るのみで、「ものゝあはれ」等は解し得ぬものとして輕蔑せられてゐた。「猛き」は武力に秀でゝ居る事であるが、その裏には人情も風流も解らないと云ふ意が含まれてゐる。

【大意】和歌は、人の心が種になつて、その種がいろ／＼の言葉となつて表はれて出來たものである。世の中の人には、爲する事が多いものであるから、いろ／＼な見るものや聞くものにつけて、心に思ふ事がある。それを云ひ出したのが歌である。(物に感じて歌を歌ふのは人間に限つた事ではなく)花の枝に来て鳴く鶯、水の中で鳴く蛙の聲を聞けば、(彼等も歌を歌つて居るのである事がわかる。否鶯や蛙のみならず)凡そ生きて居る者で、何が歌をうたはない者があらう。皆それ／＼に歌をうたふのである。

さて天地を動かすと云ふ様な事は、如何に強力な者でも出來ないが、和歌の力を用ひれば、別に手や足の力を用ひずに、天地を動かすことも出来る。又目には見えぬ鬼神をも感心させる事も出來、男女の仲をも睦まじくし、ものゝあはれも知らぬ武士の心を慰める事が出来る。かやうな事をするものは皆歌である。

この歌、天地開け初まりける時よりいで來にけり。(天の浮橋の下にて、めがみ、をとこがみとなりたまへることをいへる歌なり。)しかれども、世に傳はる事は、ひさかたの天にしては、下照姫に初まり、(下照姫は天稚みこの妻なり。せうとの神の形を、かたにうつりて、輝耀を詠めるえびすの歌なるべし。これらは、文字の數も定まらず、歌のやうにもあらぬ事どもなり。)あらがねの土にしては、素盞鳴尊よりぞおこりける。

「ちはやぶる神代には、歌の文字も定まらず。素直にして、ことの心分き難かりけらし。人の代となりて(よりぞ、素盞鳴尊のみよとなりて)ぞ三十字あまり一文字には詠みける。(素盞鳴尊は天照おほむ神のこのかみなり。女とすみたまはんとて出雲の國に、宮作したまふ時に、その處にやいろの雲の立つを見て、詠みたまへるなり。)

「やくもたつ出雲八重垣つまごめに八重垣つくるその八重垣を)」

【語釋】○この歌 この歌と云ふものは。○天地の開け初まりける時より云々 歌は天地開闢の時から生じた。○天の浮橋の下にて云々。天地開闢以來歌があつたと云ふ事の評釋である。この後にも澤山出て來るが、註は、何時何人が書いたか明でないが、古今集が撰集された延喜五年(四月十八日)から二百十七年後、即ち文永三年七月廿日の奥付のある古寫本(三井男爵家藏)にも、この註が本文の中に書き込まれてゐるから、餘程古い時代に出來たものである事は明である。處で此處の天の浮橋の下に云々の語の意は、伊邪那岐命と伊邪那美命が、高天原の天の浮橋の上で、その橋の下に淡能基呂島を造られ、その島に下りて、男女の交をせられる時に、女神が「阿那邇夜志愛少男裳(まあ本當に善い男よの裳)」と云はれ、次に男神が「阿那邇夜志愛少女裳(まあ本當に善い女よ)」と云はれ、それから男女の交をせられた。(以上古事記による。書紀には「姁哉可愛少男敷」と女神が云はれ、次に「姁哉可愛少女敷」と男神が云はれたとある。意は同じい。この「あなにやし」云々を歌の初めとし、天地開闢の時から歌があると云ふ事の證據として註したのである。「めがみ、をとこがみ(普通本にはとこの二字がない) ○しかはあれども世に傳はる事は 歌は天地開闢の時からあるので然し(確實に)その歌が世に傳つてゐるのは。 ○ひさかたの天

にしては「ひさかたの」は天の枕詞。(轉じて雨。雲。日。月。星。等の枕詞となる)天は天上。(高天原)天では下照姫の歌が最初である。下照姫の歌とは、「阿米那流夜、淤登多那婆多能、宇那賀世流、多麻能美須麻流、美須麻流、阿那陀麻波夜、美多邇、布多和多良須、阿治志貴多邇比古泥能、加微曾也。(天に居る機織姫の首にかけてゐる首飾の玉、その玉は二つの谷を越えて照りかゞやく。その玉の様に輝かしい神は阿治志貴多邇比古泥の神であるよ) (古事記。上巻)である。日本書紀卷二にも出てゐる意味は同じであるが、詞は少し違ふ。因に書紀には下照姫とあるが、古事記には高比賣命とある。古事記にはこの歌だけであるが、書紀には、これに續いて「阿磨佐箇屢、避奈菟齋迺、以和多羅素西渡、以嗣箇播箇拖輔智、箇拖輔智爾、阿彌播利和拖嗣、妹慮豫爾爾、豫爾豫利爾爾、以嗣箇播箇拖輔智(遠く隔つてゐる田舎の女が、渡り處の石川の片淵よ、その片淵に網を張り渡して網の目の寄つて来る様に、やつていらつしやい)よの詠が出てゐる。○下照姫は天稚みこ云々 註である。下照姫の身分と、その歌の詠まれた場合とを説明したのである。但し下照姫は味耜高彥根命の妻で、天稚彦の妻ではない。古事記には高比賣とあるが、やはり味耜高彥根命の妻である。この註は違つてゐる。「天稚みこ」は天稚彦のこと。(記紀共に彦とある——記は日子)○せうと神の云々「せうと」は背人。こゝは夫のこと。天稚彦が薨じた時、その友の味耜高彥根の神が弔に行つた、處が味耜高彥根は天稚彦に容貌が頗る似てゐたので、天稚彦の父や妻は味耜高彥根命を天稚彦と思ひ違ひして、「天稚彦はまだ死なずに居た」と云つて喜んだ。其處で味耜高彥根の妻の下照姫(記によれば高比賣)が、「これは味耜高彥根命で天稚彦ではない」と云ふ事を歌つたのが此歌である。「かたにうつりし」は姿に似て。「輝耀く」は容貌のうるはしいこと。○えびすの歌 書紀には、前記二首の歌を「夷曲と號く」とあり、古事記には「此の歌は夷振なり」とある。その夷を「えびす」と讀んだのである。因に夷振は、雅樂寮で呼んだ歌の名であらう。○あらがねの土 あらがねは土の枕詞。前に「ひさかたの天」と云つたのに

對して、この地上では。○ちはやぶる云々 「ちはやぶる」は神の枕詞。神代では歌の文字の数が、五七とか七五とか定まつて居らず又その歌は餘りに質朴である爲に、意味も分らないやうである。○人の世となりて云々 神代には歌の字数が定まつてゐないが、人代になつてから、三十一文字の歌を詠む様になつた。「よりぞ素盞鳴命のみよとなりて」を本文の中へ入れては意が重複するから、これは衍文であらう。○素盞鳴命は天照おほむ神云々 註である。三十一文字の歌と云つたから、三十一文字の歌で最も古いとされるのは、「やくもたつ」の歌であるから、その歌の作者と傳へられる素盞鳴命のことを書いたのである。「このかみ」は兄であるが素盞鳴命は天照大神の御弟である。恐らくは註の記者が、天照大神が素盞鳴命を「兄」と稱んで居られる處から、兄と誤つたのであらう。(兄、背、は女から男を呼ぶ稱で、兄でも弟でも夫でも「せ」である)。○やいろの雲 八雲立つと歌にあるから、八色の雲と誤解したのであらう。「やくもたつ」は彌雲立つて、雲が澤山立ち登ること。

【餘論】「素盞鳴命は天照大神の」云々の註は、「あらがねの土にしては」云々と云ふ處へ入れる可きであると思ふ。素盞鳴命を人代に入れる事は不當であるから。

【大意】 此の一章は歌の起源について記したのである。この歌といふものは、天地開闢の時から生じたものである。——歌の本質から云ふと——(註略、以下同じ)しかも(天地開闢以來の歌が悉く傳つては居らない)世に傳つてゐるのでは、天(高天原)では下照姫の歌が最初であり、地では素盞鳴命の歌が一番古い。神代の歌は字数も一定して居らず、その歌は質朴で、(後世の者には)理解し難い様である。人代になつてからは、三十一文字に詠む様になつた。

かくてぞ、花を賞で、鳥をうらやみ、霞をあはれみ、露をかなしぶ心は、多く様々になりける。遠き處も
出立つ足のもとより初まりて、年月をわたり、高き山も、麓のちりひちよりなりて、天雲たなびくまで、生ひ
のぼれるごとくに、この歌もかくの如くなるべし。

【語釋】 ○花を賞で云々 「人の心」が種となつて、見るもの聞くものにつけて、いろ／＼の感情が起り、様々の歌が生ずる事
を云つたのである。 ○遠き處も云々 千里の道も一歩から初まる意。 ○年月をわたり 「わたる」は經過する。一歩づゝ歩い
ても長い年月の間には遠い所に達する事が出来る。 ○ちりひち 「ちりひち」とある寫本もある。ひの方が正しい。ひちは

土。塵芥の意。 ○たなびく たは接頭語。靡くこと。「たなびくまで」は靡いて居る處まで。 ○生ひのぼれる 「生ひのぼれ
る」とある寫本もある。ひの方が正しい。生長すること。塵も積れば、雲に變える山となること。この句は前の「遠き處も出立
つ足のもとより初まり」と對句になつてゐて、次の「歌もかくの如くなるべし」の譬に用ひたのである。即ち歌も神代以來段々
に進歩發達して來た事を述べたのである。

【大意】 此の様にして(神代以來段々進歩して)或は花の美しさを愛好し、鳥の自由さを羨み、或は霞に感じ、露を
愛する心は色々様々の言葉になつて表はれた。(その進歩の狀は譬へば)遠い道も出發の第一歩から初まつて、長い
間には目的地へ到達し、高い山も麓の塵芥から段々積つて行つて、雲までも透す様に、この歌も少しづゝ進歩し
て來たのである。

難波津の歌は、御門のおほむはじめなり。(大ささきのみ門の、難波津にて、皇子ときこえける時、東宮を
たがひに譲りて、位に即きたまはで、三年になりければ、王任と言ふ人の、訝り思ひて、詠みて奉りける歌
なり。この花は、むめの花をいふなるべし。) 淺香山のことは、采女の戯より詠みて、(葛城のおほきみを
陸奥の國に遣はしたりけるに、國のつかさ、こと疎かなりとて、まうけなどしたりければ、さきの采女なりけ
る女の、かはらけとりて、詠めるなり。これになむ、おほきみの心解けにける。)この二つの歌は、歌の父母の
やうにてぞ、手習ふ人の初にもしける。

【語釋】 ○難波津の云々 この一句は意味不明瞭である。「難波津の歌」は「難波津にさくや此花冬ごもり今を春べとさくやこの
花」(作者未詳)と云ふ歌であるが、「御門のおほむはじめなり」と云ふ語が明でない。天皇(仁徳)の御世の始の意と解した書
もある、又天子の御事を詠んだ最初の歌と説いたものもあるが、それでも意味が通じない。 ○大ささきのみ門云々 註であ
る。大鷦鷯皇子(難波宮に居られた)と菟道稚郎子皇子(宇治に居られた)とが、互に位を譲り合はれて、位に即かれず、應神
天皇の崩後三年間天皇が居られなかつた。三年目に菟道稚郎子は自殺せられたので、大鷦鷯皇子は致し方なく位に即かれたと云
ふ日本書記(卷十一)の話によつて、書いたものである。——「王任」は流布本には「王仁」とある。文の意は王仁が、御兄弟
の皇子が互に譲つて位に即かれぬのを不思議に思つて、難波津の云々の歌を奉つたと云ふのである。然し難波津の歌は王仁が
作つたと云ふ事は何等証據が無い事である。従つて此の註は一向に信用の出来ないものである。「この花はむめの花をいふなる
べし」と云ふのは、「難波津にさくやこの花」と云ふその花は梅花のことであると註したのである。 ○淺香山のことは云々
「淺香山のことは」は「淺香山影さへ見ゆる山の井のあさき心をわが思はなくに」と云ふ歌が萬葉集十六卷にあつて、歌の次に

「右歌、傳云、葛城王遣_三陸奥國、國司祇承綾意異甚。於_レ時意不_レ悅、怒色顯_レ面、雖_レ設_三飲饌、不_レ肯_三宴樂。於_レ是有_レ前采女、風流浪子、左手捧_レ鶴、左手持_レ水、擊_レ之王膝、而詠_三其歌、爾乃王意解脫、樂飲終日」とある。これを云つたので、采女がたはむれに詠んだものとの意。○葛城のおほきみ云々 右に記した萬葉集の詞をそのまま書いたものである。○この二つの歌は云々 難波津の歌と、淺香山の歌は、共に歌の父母の様にして(歌の根本の様にして)兒童の手習の初に教へることになつた。

【大意】 難波津の歌は天皇の御はじめの歌である。淺香山の歌は、采女が戯に詠んだもので、この二つの歌は「歌の父母であるかの様にして、兒童の手習の初めに教へることになつた。」

抑々歌のさまむつなり。から歌もかくぞあるべき。この六種_ハの一つには、そへ歌。(おほさきのみかどを、そへたてまつる歌、

難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花
といふなるべし)二つには、かぞへ歌

(さくはなにおもひつぐみのあぢきな身にいたづきの入るも知らずてをいへるなるべし。これは、たゞごとくに云ひて、物に譬へなどもせぬことなり。この歌いかにいへるにかあらむ。このころえがたし。五つに、たゞごとく歌きてなむ、これにはかなふべき。三つにはなづらへ歌

(きみに我朝の霜をおきていなば戀しきごに消えやわたらむといへるなるべし。これは物にもなづらへて、それがやうになむあるまやうにいふなり。この歌よくかなへり

とも見えず。

○ならちねのおやのかふこのまゆごもりいぶせくもあるか妹にあはずて
かやうなるやこれにかなふべからむ。)

【釋】 ○歌のさまむつなり云々 歌に六種の種類があるとの事。六種とは以下に記してある。(一)そへ歌。(二)かぞへ歌。(三)なづらへ歌。(四)たとへ歌。(五)たゞごとく歌。(六)いはひ歌。「から歌にもかくぞあるべき」は、支那の詩も此の様に六種に分ける様であるの意。然し實は和歌を六種に分けたのは、詩經の序に、「詩有_三六義焉、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」とあるのに依つて、分けたのである。——但し詩の六義と歌の六種とは必ずしも同一の意義のものでないが——。眞名序には明に、「和歌有_三六義、一曰風、二曰賦、三曰比、四曰興、五曰雅、六曰頌」と云つて、その六種の名は詩の六義と全く同じである。而して假名序には、「から歌にもかくぞあるべき」と云つて、和歌の六種の分類が、詩の六義を模したものである事を、隠してしまつてゐる。この本來顛倒の書方を、却つて撰者貫之等が、支那崇拜思想を快とせず、我が國風を發揚せんとしたものであると云つて、賞讃して居る註釋書もあるが、それは却て蟲風の引き倒ではないかと思ふ。其はともかくとして、詩經の詩の比賦興の三つは内容からの分類であり、風雅頌の三つは形式上の分類である爲に、彼此混雜してゐる。この分類法を歌に應用して、「歌のさまむつなり」と云つて分類したのである。○そへ歌 「そへ」はよそへる。其事を直接に云はずに、その心を悟らしめる歌。○おほさきのみかど云々 そへ歌についての註である。難波津の歌は、前記の如く、作者明でないが、左註の記者は、前の註にもあつた如く、この歌を王仁の作とし、大鸕鷀皇子に即位を促した歌と解して居た。即ち歌の表面は、難波津に咲くよ。この花か、今までは冬籠をしてゐたか、今は春だと云つて咲くよこの花が。と云ふのであるが、裏は、難波津に居られる

大鷲鷄皇子に、今までは位を譲り合つて居られたが、今は位におつきになる時です。と云ふことをお知らせした歌であると解釋してゐたのである。○といふなるべし かういふ歌を、そへ歌と云ふのであらう。○かそへ歌 ものを一つ二つと數へる様に、有のままに詠む歌。○さくはなに云々 註である。この歌の様なのを、かそへ歌と云ふのであらうと云ふのである。この歌は、拾遺集卷七物名に出て居る。「つくみ」と云ふ題で大伴黒主の作とある。「おもひつくみ」は思ひつく身に、鶴をかくしたのも。歌の意は、心もなく咲いてゐる花に思ひ込むでしまふ（惚れ込んでしまふ）身は、考へて見れば、つまらない事だよ、自分の身が病氣になるのも知らないで、と云ふ程の意。○これは云々 右の註に更に註を加へたのである。「これは」はかそへ歌の事。かそへ歌はたゞ有りのまゝに歌つて、物に譬へたりしないのである。然るにさくはなにの歌をかそへ歌の例に出したのは、如何なる意味であらうか、理解出来ない事である。この歌は第五番目に、「たゞごと」と歌と云ふのがある。この「たゞごと歌」の例に挙げるならば、適合するであらう。「この歌いかにいへるにかあらむ、このころえがたし」とは歌の意味が分らぬと云ふのではなく、この歌をかそへ歌とする意が分らぬと云ふ意である。○なづらへ歌 ものに記して詠む歌。○きみに我云々 なづらへ歌の註である。「きみに我」は流布本には「君に今朝」とある。一本には「君が今朝」とある。「きみに我」は君に私の意、「おきていなば」は、霜を置いて行くといふ言葉に託して、君を残して置いて、自分は歸つて行くこと云ふ意を表はしたものである。「消えやわたらむ」は霜の消えるのに託し自分の魂の消える（悲しさに身も心も消える）意を表はしたものである。歌の意は、朝の霜を置く様に起きて、私は別れて歸るならば、戀ひしいと思ふ度毎に、霜が日光に消える様に私は心も消る事であらうの意。「君が今朝」とすれば、女から男に向つて詠んだ歌になる。○これは云々 右の註に更に註したものである。「これは」はなづらへ歌。なづらへ歌は、物に託して、その託したものの様で（それがやうに）あると詠むのである。（霜に託すれば、霜の様に置くとか、

霜の様に消えるとか、の類）この歌よくかなへりとも見えず」この「君に我」の歌は、なづらへ歌の適例とも思はれない。○たらちねの云々 この歌は萬葉集卷十二にある。「たらちね」は母又は親の枕詞。「かふこ」は飼ふ妻。母の膝下にある娘を、前に入つてゐる妻になぞらへたのである。「いふせし」は心の晴れぬこと。憂鬱。歌の意味は、鬮に籠つてゐる妻の様に、親の膝下に居て外へは出ない娘だから、會ふ事も出来ず、氣のめいる事だ。○かやうなるやこれにかなふべからむ。かういふ歌が、なづらへ歌の例としては適合するだらう。

【大意】 扱和歌のすがたは六種類である。支那の詩も六種類あるやうである。歌の六種類の第一は、そへ歌、第二はかそへ歌、第三はなづらへ歌。

四にはたとへ歌、

（わが戀はよむともつきじありを海の濱のまさごはよみ盡くすごもといへるなるべし。これは、よろづの草木、とりけだものにつけて、心を見するなり。この歌は、隠れたる處なむなき。されどはじめのそへ歌におなじ様なれば、すこし様をかへたるなるべし。

すまの海人の鹽焼く煙風をいたみ思はぬかたにたなびきにけりこの歌などや、かなふべからむ。）

五つにはたゞごと歌

（作のなき世なりせばいかばかり人のことの葉うれしからまし

といへるなるべし。これは、ことの整ほり、正しきをいふなり。この歌のこゝろさらになはす。とめ歌とやいふべからむ。

やまさくらあぐまで色を見つるかな花散るべくも風吹かぬよに

六つにはいはひ(原本の)歌

(この殿はむべも富みけりさきくさの三つ葉四つ葉に殿づくりせり

といへることのたぐひなるべし。

これは、世をほめて、かみにつかふるなり。このうた、祝うたとは見えすなむある。

春日野にわかな摘みつゝよろづ代を祝ふ心は神ぞしるらむ

これらや、すこしかなふべからむ。おほよそ、六つに分かれむことは、充あるまじきことになむ。

【語釋】 ○たとへ歌 物にたとへて詠む歌。 ○わが戀は云々 たとへ歌の註である。わが戀はの歌は、たとへ歌の例として出したもの。「よむ」は数を數へること。歌の意は、濱の数を數へ盡す事は出来ても、自分の戀を計算し盡すことは出来ない。それ程自分の戀は繁く限りないの意。 ○これは云々 右の註に附いての註。「これは」はたとへ歌。たとへ歌は鳥獸草木等よろづのものに記して感情を表はす歌である。「隠れたる所なき」は、たとへ歌は、ものにととへて詠むのであるから、意味が多少裏面に隠れてゐなければならぬ。然るに「わが戀は」の歌は、意味が全部表に顯はれてゐて、隠れてゐる處がない。——従つて、たとへ歌の例としては不適當である。「されどはじめのそへ歌」に云々。然し意味が隠れた處のある歌と云ふと、第一のそへ歌と同じ

事になつてしまふから、そへ歌の例として出す歌とは少し違つた歌を(わが戀はの歌を)出したのであらう。 ○すまの海人の云々 「すまの海人の」歌は伊勢物語にも出、古今集卷十四にもある(讀人しらず)歌の意は、須磨の海人の、鹽を焼く煙が、風の強い爲に、思ひもよらぬ方へ靡いてしまつたと云ふのが表の意味で、自分の思ふ人が、強いて誘はれた爲に、思ひもよらぬ方へ靡いてしまつたと云ふのが裏の意味である。鹽焼く煙にたとへて、自分の意中を詠じたのである。 ○この歌などや云々 「須磨の海人の」の歌が、たとへ歌としては、最も適當なものであらう。 ○たゞごと歌 ものに託しきりせず、素直に有りのままに歌ふ歌。 ○伴りの云々 この歌は古今集十四卷にある。(讀人しらず)歌の意は、人の言葉には嘘があるから頼みにならないが、若し世の中に嘘と云ふものが無いのであつたら、眞實らしく云つて呉れる人の言葉が、どんなに嬉しい事だらう。 ○これは云々 右の註に附いての註。「これは」はたゞごと歌。 ○この歌のこゝろ云々 「伴のなき世なりせば」の歌は一向たゞごと歌の例としては不適當である。この歌は、「とめ歌」の部類であらう。「とめ歌」は竟歌。願ひ求める意の歌。 ○やまざくら云々 この歌は平兼盛の作で、家集には「その宮のおさゝの櫻の花御覽しにおはしましたりしに」と詞書がある。又續古今和歌集卷二に「清慎公月輪寺の花見侍りける時よみ侍りける」と詞書がある。「あくまで」は満足するまで。「風ふかね世」は、四海波治まつた太平な世。歌の意は、山櫻を十分満足するまで見た、花を散らす程の風もない太平の世に。この歌が、たゞごと歌の好標本であらうと註の記者は云ふのである。 ○いはひ歌 お祝の歌。 ○この殿は云々 いはひ歌の註。「この殿は」の歌は催馬樂の呂歌である。「むべも」なる程。尤の意。「さきくさ」は「三つ」の枕言葉。「三つ葉四つ葉」葉は端。軒が三重四重に重つてゐること。歌の意は、此の御屋敷はなるほど盛んなことだ(有福だ)殿舎の軒が三重にも四重にも重ねて建て、あるわい。 ○これは云々 右の註に對する註。「これは」はいはひ歌。いはひ歌は、その御代を賞めたゝへ、それを神に申上げる歌で

ある。然るに「この殿は」の歌は祝ひ歌とは思はれない。(人を祝つた歌であるから) ○春日野に云々 この歌は古今集巻七にある。素性法師の作、「内侍のかみの、右大将藤原朝臣の四十の賀しける時に、四季の繪かけるうしろの屏風に書きたりける歌」と詞書がある。歌の意は、春日野で、若葉を摘みながら、君の壽命が萬年もある様にと、お祝ひする私の心は、春日の神がお知りになつて下さるだらう。 ○これらや云々 この歌等が、祝歌の類としてや、叶ふであらう。 ○六つに分れむことは云々。歌を以上の六種に分類すると云ふ事は、むつかしい事である。(出来ない事である。)

【大意】 第四はたとへ歌、第五はたゞごと歌、第六はいはひ歌。

今の世の中、色につき、人の心花になりけるより、あだなる歌、はかなきことのみ出で来れば、色このみの家のみ、埋木の人知れぬこととなりて、まめなるところには、花薄ほに出だすべきことにもあらずなりたり。その初を思へば、かゝるべくなくあらぬ。古への代々の帝、春の花の朝、秋の月の夕毎に、さぶらふ人々を召して、ことにつけて歌を奉らしめたまふ。あるは花をそうとて、たよりなき處に迷ひ、あるは月を思ふとて、しるべなき闇にたどれる心を見たまひては、賢し愚なりと知ろしめしけむかし。

【語釋】 ○今の世の中色につき、人の心花になりけるより 「世の中」と「人の心」色につき」と「花になりける」は、異つた二つのものを對照させたのではなく、一つのを二に分けて云つたので、意味は、世の風潮、即ち一般人心が、華美に流れたからの意。眞名序には、「及、披時變、澆漓、人貴奢淫」とある。「色につき花になりける」は貴奢淫にあたる。 ○あだなる歌 はかなきこと云々。「こと」は言の意、あだなる歌もはかなきことも同じ意味の言葉。「あだ」は實のないこと。「はかなき」は

とりとめのない事、仇つばい輕薄な歌ばかり出来て、(底力のある歌が少い) ○色このみの家云々 色このみは好色。埋木は地の下に埋もれて居る木。次の「人知れぬ」の序詞「まめなる所」はまじめな所 「花薄」は次の「ほに出る」の序詞。「ほに出づる」は公然と顯はれる事。意味は、歌が仇つばい戀歌ばかり出来る様になつたから、その歌は男女の間で密かに讀まれる様になつて、公然と人の前に出す事は無くなつてしまつた。 ○その初めを思へば云々。 今日歌は公に人の前に出さぬものになつてしまつたが、昔の歌は決して男女の應答のみに用ひたのではないと云つて、以下その例証を上げるのである。但し「その初」と云ふのは、後の例証から考へて、歌の原始時代を指すのではない。 ○春の花の朝、秋の月の夕毎に。 春の花の朝毎に、秋の月毎にの意。 ○あるは。 或は。 ○花をそうとて。 この詞は次の「月を思ふとて」と對句になつて居るのであるが、「花をそう」は意味が明で無い。契沖は、「花を戀ふ」の誤字であらうと云つてゐる。今は契沖の説に従つて置く。 ○たよりなき處に迷ひ云々は次の「月を思ふとてしるべなき闇にたどれる」と對句になつてゐる。「たよりなき」は手引のない。「か」しるべなきも案内のない。しらない。 ○心を見たまひて云々。 流布本には、「こゝろ心を見たまひて」と心を重ねてある。意味は同じことで、花を暮うては、人里遠い山にふみ迷ひ、月を懐うては、道もしらぬ野山を歩いて詠んだ歌によつて、天皇は人々の心を觀られ、その賢愚をお知りになつたのであらうよ。流布本には「知ろしめしけむかし」の「かし」がない。「かし」が語尾に來ると、意味が強くなる。「知ろしめしけむかし」の知ろしめす主體は天皇。

【大意】 當今の世の中は華美になり、人心は奢淫に流れた爲に、仇つばい歌、輕薄な歌ばかり出来て來るから、自然と歌は戀をする男女の間のみ密かに取り交はされる様になり、埋木の様に他の人は知らぬ様になつて、眞面目な(公の)所へは出すべきものでない様になつてしまつた。(しかし)歌の當初の有様を考へて見れば、かういふ風な

もの(公の場所へは出せない様なもの)ではなかつた。昔の代々の天皇は、春の朝や秋の夕には、花につけ、月につけて、御傍近く侍して居る者共に歌を奉らしめられる。又臣下が花を慕うては、案内も知らぬ人里離れた山里にふみ迷ひ、月を懐うては道も知らぬ暗闇の中を歩いて詠んだ歌によつて、天皇は人々の心を觀察せられ、その賢愚をお知りになつたのであらうよ。(而して賢臣忠臣を用ひられたのであらう。)

しかるのみにあらず、さゞれいしにたとへ、筑波山にかけて君を願ひ、喜身に過ぎ、樂心に餘り、富士の烟によそへて人を戀ひ、松虫の音に友をしのび、高砂、住の江の松も、あひおひのやうにみまへ、男山の昔を思ひ出で、女郎花の一時をくねるにも、歌をいひてぞ慰めける。また春の朝に、花の散るを見、秋の夕暮に木の葉の落つるを聞き、あるは年毎に鏡のかげに見ゆる雪と浪とを歎き、草の露、水の泡とを見て、わが身を驚き、あるは昨日は榮えおごりて時を失ひ、世に侘び、親しかりしも疎くなり、あるは松山の浪をかけ、野中の水を汲み、秋萩の下葉をながめ、曉の鳴の羽がきを數へ、あるは吳竹の憂きふしを人にいひ、吉野川をひきて世の中を恨み來つるに、今は富士の山も、烟たゝすなり、長柄の橋もつくるなりと聞く人は、歌にのみぞ心を慰めける。

【語釋】 ○しかるのみにあらず。流布本には「しかあるのみにあらず」とある。意味は同じい。 ○さゞれいしにたとへ筑波山にかけて君を願ひ。「さゞれいし」は古今集卷七(賀歌)の「わが君は千代に八千世にまします(古本)さゞれ石のいはほととなりて

苔のむすまで」(題しらず、よみ人しらす)の歌によつた。和漢朗詠集雜の部、祝の中に、君が世は千代に八千世に……(現在)の國歌はこれである)とある。但しこの歌の君は、天皇の意味ではない。が序文に於いては、君を天皇の意に解して用ひてゐる。「筑波山」は古今集二十卷東歌の條の「常陸歌」二首の中の一詩で、「筑波根のこのもかのもに蔭はあれど君がみかげにます蔭はなし」によつた。この君も、歌の方の君は、天皇の意味ではない。歌の意味は、筑波山には澤山な木蔭はあるが、恵み深いあなたのお蔭にました蔭はない。このもかのもは此方面被方面) ○富士の烟。古今集十九卷(雜體)「富士のねのならぬおもひにもえばもえ神だに消たぬ空し烟を」(きのめのとの作)(歌の意味は、富士山の烟の様に、自分の叶はぬ戀の煙も燃えるのなら燃えるがいゝ、神様でさへも役にもたゝぬ富士の烟をお消しにならないのだから。自分は敢て胸の火を消さうとは思はぬ)によつた。 ○松虫の音。古今集卷四(秋歌)「君しのぶ草にやつるゝ故郷は松虫のねぞ悲しかりける」(よみ人しらす)によつた。(歌の意は、あなたが見捨てゝしまつて、來ても呉れない私の家は、君をしのぶと云ふあの忍草が生ひ繁つて、松虫の聲が、人を待つと云ふ名の故か、一人悲しく思はれたよ。 ○高砂住の江の松。高砂は播磨の名所、住の江は播磨の名所、共に古い松があるので有名。古今集卷十七(雜歌)に「誰をかも知る人にせむ高砂の松もむかしの友ならなくに」(歌の意は、自分は此の様に年を取つてしまつて、まあ誰を友にしよう。古いといふあの高砂の松も昔からの友ではないのに。松よりも自分の方が年長である)「われ見ても久しくたゞぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ」(歌の意は、此の住の江の松は自分が見てからも、もう随分の年になるが、一體初からは、どの位の年を経てゐることかしら)等の歌がある。「あひおひ」は相生。同年に生れた意。 ○男山の昔を思ひ出で。古今集十七卷「今こそあれわれも昔は男山さかゆく時もありこしものを」(歌の意は、今こそこんな年を取つて、人も相手にせぬ様になつたが、自分も嘗ては年も若く身も榮えた事もあつたのだがなあ)により、男が昔の若い時の事

を思ひ出しの意。○女郎花の一時。古今集十九「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」(借正通照)により、上の「男山の昔を思ひ出て」と對句にして、女が花の時代の早く過ぎさつた事を、くよくと思ひ廻らすこと。「くねる」は「くねくねしき」と云ふ形容詞と同類で、一本詞子でないこと。此處は、くよくと思ひ廻らすこと。(歌の意は、秋の野になまめかしく立てる女郎花、それを美しいと云つて、世間がまあやかましいことだ、だがその美しいのも少時の事で、直く見苦しく湖んでしまふのだ。女郎花は女にたさへたもの) ○歌をいひてぞ慰めける。さざれいしにたとへ云々より以下のことを承けてゐるので、喜につけ悲しみにつけ、心に感ずる事のある時は、歌を詠んで心をなぐさめたの意。○年毎に。古今集卷十「うばたまのわが黒かみやかはるらむかどみのかげにふれる白雪」(紀貫之)によつた。(歌の意は、眞黒だつた私の髪がこんなに變つたのだらうか、鏡に映つた影を見れば雪の様に白くなつてゐる) ○雪と浪とを歎き。老人が鏡に映つた己の影を見て、雪の如く白くなつた髪と、波の様に寄つた皺を歎く。○草の露。古今集卷十六「露をなどあだなるものと思ひけむわが身も草におかぬばかりを」(藤原惟幹)によつた。(歌の意は、今までは何故露をはかないものと思つてゐたのだらう、自分の身は露の様に草葉に置かぬばかりで、はかない事は露と少しも變らない) ○水の泡。古今集卷十五「うきながらけぬる沫ともなりなむながれてとだに頼まれぬ身は」(紀友則)(歌の意は、水に浮いたまゝ流れもせず消える泡の様に、消えて無くなつてしまひ度いものだ。後には又、と云ふ希望さへもない身だもの) ○わが身を驚き。我身のはかなさ、無常を驚き。○昨日は榮えおこりて云々。「榮えおこりて」の次に「けふは」とある可である。さうしなければ、意味が通じない。「けふは」を補つて解釋しておく。○世に侘び。侘びは難儀すること。「世に侘び」は、世間から捨てられて難儀すること。○松山の波。古今集卷二十「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山波もこえなむ」(讀人しらす)によつた。(歌の意は、若しも君より外に心移す

ことがあつたら、あの決して波が越える事のない末の松山を波が越えるだらうよ) ○野中の水。古今集十七卷「いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心をしる人ぞくむ」(讀人しらす)によつた。(歌の意は、昔いゝ清水であつた野中の清水を知つてゐる人は、その清水は今ほもう生温くなつてゐるけれど昔の事を忘れずに今でもやはり行つて汲む) ○秋萩の下葉。古今集卷四「秋萩の下葉色づく今よりぞ一人ある人のいねがてにする」(讀人しらす)によつた。「萩の下葉をながめ」の「ながめ」はつくつくと見ること、物を思ひつゝ見ること。(歌の意は、秋萩の下葉が紅葉して、これから段々夜が長くなるに従つて自分の様な添寝して呉れる人もない者は眠られぬ様になるんだわい) ○曉の鳴の羽がき。古今集卷十五、「あかつきの鳴のはねがき百はがき君が來ぬ夜はわれぞかすかく」によつた。(歌の意は、曉には鳴が度々羽振をするが、君の來ぬ夜は、私は鳴が羽振をする様に身悶えて歎く) ○吳竹のうきふし。古今集卷十八「世にふればことのはしげき吳竹のうき節ごとくうきすぞなく」(讀人しらす)によつた。(歌の意は、世にあれば、人からいろく憂い事を云はれるその度毎に泣く) ○吉野川。古今集卷十五「ながれては妹背の山の中におつる吉野の川のよしや世の中」(讀人しらす)によつた。(歌の意は、紀の國の妹山と背山の間にも吉野川が流れて居て距てがある、男女の仲も、長い年月が経つ内には隔りが出来て來るのも仕方がない) ○富士の山も云々。盡きざるものゝ例に用ひられた富士の山も盡てしまひ。○長柄の橋。古今集卷十九「なにはなる長柄の橋もつくるめり今は我身を何にたとへむ」(伊勢)によつた。(歌の意は、昔から古いものゝ譬に用ひた長柄の橋も新しく架けかへられたをいふことだ。ではまあこんな古くなつた自分の身を何に譬へよう、たとへるものがない) ○長柄の橋を古いものゝ例に用ひたのは、「世の中にふりぬるものは津の國の長柄の橋と我となりけり」(古今集十七、讀人しらす)等がある。(意味は、世の中で古くなつたものは、攝津の長柄の橋と自分と二つだけだ。)

【大意】 又そればかりではなく、小石が大きな巖になるのに譬へたり、筑波山の木蔭に言を寄せたりして、大君禮讃の歌を詠み、(或は)身に過ぎた喜のある時、心に餘る樂しみのある時にも(歌を詠み)、又富士の烟の絶えぬ様に、自分の戀の焰は止む時が無いと歌ひ、松虫につけて以前に親しかつた友を追懐し、(或は老年になると)高砂や住の江の松も自分と同年のやうに思ふ(と歌ひ)又男が自分の男盛りの頃を思ひ出し、女が花の時代を追想する時、さういふ場合には皆歌を詠んで慰めたのであつた。

或は又春の朝には花の散るのを見て、秋の夕暮には木の葉の落ちるのを聞いて歌を詠み、又或は鏡に映つる影が、一年々々白髪を増し、黧が多くなるのを難いて歌を詠み、又草葉に置く露、流れに浮ぶ泡を見て、自分の身もそれに變らぬはかないものである事に氣付いて驚き、或は昨日までは榮華に誇つてゐた人が、今日は忽ち失意の人となつて、世間から顧られなくなつて難儀をし、又以前に親しかつた人も疎遠になり(と云ふ様な時にも歌を詠み)或は又戀に成功し時には、末の松山にかけて愛を誓ひ、愛が稍衰へた時には、野中の清水に言寄せて歌を詠み、(又)秋萩の下葉を見つめて、失戀の惱を述べ、待つて居た男の來ない夜には、鳴の羽がきの様に寄せて悶々の狀を言ひ、又或は人に、つらく當られる時には、吳竹のうき節毎に泣く鶯の如く泣くと云ひ、又男女の中の絶えた時には妹山と背山の間を流れる吉野川を例に引いて、恨んだのであつたが、あの昔から絶えぬものゝ例に引いた富士の烟ももう絶えてしまひ、古いものゝ例に引いた長柄の橋も、新しく架け代へられたと聞いては、人は猶一層歌で心を慰めたのであつたよ。

古へより、かく傳れるうちに、奈良の御時よりぞ廣まりける。かの御代や歌の心を知ろしめしたりけむ。かのおほむ時に、おほきみつの位柿本の人丸なむ、歌のひじりなりける。これは、君も、人も、身を合せたるといふなるべし。秋の夕べ、立田川に流るゝ紅葉は、帝の御目に錦と見え、春のあした、吉野山の櫻は、人丸が心に雲とぞおほえける。また山部の赤人といふ人ありけり。歌にあやしうたへなりけり。人丸は、赤人が上に立たむ事かたく、赤人は、人丸が下に立たむこと難くなむありける。(奈良の帝の御歌)

たつた川紅葉みだれて流るめり渡らば錦なかや絶えなむ

人麿

梅の花それとも見えすひさかたの天霧る雪のなべてふれゝば

ほのぼのとあかしのうらの朝霧に鳥がくれ行く船をしぞおもふ

赤人

春の野にすみれ摘みにとこしわれぞ野をなつかしみ一夜寝にける

わかぬ浦に潮みちくれば濁をなみあしべをさしてたづなきわたる

この人々をおきて、またすぐれたる人も、吳竹のよゝにきこえ、かたいたのよりくゝに絶えずなむありける。これよりさきさきの歌をあはせてなむ、萬葉集とはなづけられたりける。こゝに、古へのこゝろをも、歌のこゝろをもしれる人わづかに一人二人なり。これかれ得たるところ、得ぬところ、互になむある。彼の御時より

このかた、年は百年にあまり、世は十つぎになむなりにける。

【語釋】 ○奈良の御時 奈良の都で天下の政治をせられた時代、即ち奈良朝の意であるが、奈良朝と云つても、七代ある事であるから、どの天皇の御時代かと云ふ事に就いては、古来いろ／＼説があるが、然し何天皇と限定して云ふよりも、漠然と奈良朝と解釋した方が穩當である。 ○かの御代や云々 やは疑問詞。かの御代(奈良朝)の天皇は歌の眞體をお知りになつて居られたのであらう。 ○おほむ時 御代。 ○おほきみつの位云々 「おほきみつの位」は正三位。但し人麿は正三位ではなかつた筈だから、これは誤であらう。と云ふのは人麿の事は書紀にも續日本紀にも出てゐない。又公卿補任にも出てゐない。(正三位であれば書いてある筈である。)又萬葉集卷二に柿本朝臣人丸在石見國^臨死之時自傷作歌云ふ詞書があるが、今の規則では、三位以上の人は薨と云ひ、四位五位は卒と云ひ、六位以下は死と云ふのである。この外にも人麿が卑官であつたであらうといふ事の傍証になるものはあるが、正三位の証據になるものはない。だから「おほきみつの位」は誤であらう。因に人麿の傳記は明でない。傳記の參考になるものは萬葉集のみである。萬葉集に依つて考へると、人麿は持統、文武の二朝に仕へた人で、持統天皇の御代に石見國から都へ上り、文武天皇の御代の終頃に又石見國へ歸つて、石見で歿した。 ○身を合せるといふなるべし 「身を合せるといふ一體になる。天皇は歌の心を知ろしめし、臣には人麿の様な歌聖が居るのであるから、君と臣が一體になつて居たと云ふのであらうの意。因に「これは君と臣と……人丸が心には雲とぞおぼえける」までは、恐らく左註の文が誤つて、本文に混入したのであらう。 ○立田川に流る、云々古今集卷五(秋歌下)に、題知らず、讀人知らずで、「たつた川紅葉みだれて流るめり渡らばにしきなかや絶えなむ」と云ふ歌がある。(歌の意は、立田川は川面一面に紅葉が流れて錦が流れてゐる様である。若し川を渡るならば、美しい錦が切れるであらう)左註に「この歌は、ある人、ならの御門の御歌なりとなむ申す」とあ

る。で此處の本文は、恐らく「たつた川云々」の歌の左註に依つて、此の歌を「ならの御門」の御製として、此處に引用したのであらう。然し古今集卷五の本文には、讀人知らず題知らずとある歌を、序文に天皇の御製として引用する云ふ事は解し難い事である。それ故に此處は衍文であらう。 ○春のあした吉野の櫻云々 秋の紅葉に對して、春の櫻を點出したのである。然し吉野の櫻を雲と思ふと云ふ意の歌は人麿の作歌中にはない。 ○山部の赤人 この人も傳記は分らない。萬葉集に依つて考へると、——萬葉集以外には參考すべきものがない——神龜元年から天平八年までの歌が出てゐるから、元正天皇の御代から聖武天皇の御代の中頃まで居た人の様である。眞名序には山邊赤人とある。山部と山邊、何方が正しいかは簡単に斷定出来ないが、何方か誤であらう。右の「奈良の帝の御歌」から、赤人の歌の「たづなきわたる」までは、凡て左註である。 ○奈良の帝の御歌云々 既に記した様に、「たつた川」の歌は、讀人知らずの歌であるから、この註は信用出来ない。 ○梅の花云々 「それとも見えす」は梅の花とも見えす。「ひさかたの」は天、空、雨、雲、日、月、星、光等の枕言葉。「天霧る」は天が曇る意。「なべて」はおしならべて、すつかり。(一首の意は、空を曇らせて一面に雪が降つてゐるから白い梅の花が雪にまぎれて、それが梅の花とも見えない。)この歌は古今集卷六、冬歌の部に、讀人知らず題知らずとして入つて居て、左註に、「此歌は、ある人のいはく、柿のもと人まろが歌なり」とある。拾遺集卷一には「題知らず、柿本人丸」として出て居る。然し果して人麿の作か否かは疑問である。 ○ほのぼのさ云々「あかし」は、ほのぼのと(ほんのりと)夜が明ける意と、播磨の明石とにかけてある。(一首の意は、ほのぼのと夜が明ける明石の浦の朝霧の中に、ほのかに現はれた船が、やがて島の蔭にかくれて行く姿に感興が引かれるの意。)古今集卷九、霧旅の部に、題知らず、讀人知らずとして出てゐて、左註に「この歌は、ある人のいはく、かきのもと人まろが歌なり」とある。然しこの歌は調子から云つても、人麿の作とは云ひ難いものである。 ○春の野に云々 この歌は萬葉集卷八に、「山部宿禰赤人歌四首」とあるその第一首で、「野をなつかしき」は野の景色のなつかしき故にの意(一首の意は春

の野にすみれを摘む爲にやつて来たのであるが、野の景色のなつかしく面白いので、つい一晩野で宿つたよ。○わかぬ油に云々この歌は萬葉集卷六に、「神龜元年甲子冬十月五日、幸千紀伊國時、山部宿禰赤人作歌一首并短歌」とあつて長歌一首、反歌二首ある、その二首目の反歌である。「湯をなみ」は、干湯が無いための意。(一首の意は、若の浦に潮が満ちてくると、——満潮になつてくると——鵜の居るべき干湯が無いために、磯邊へ鵜が鳴きながら飛んで来るよ) ○この人々をおきて人麿や赤人以外に。○吳竹のよきにきこえ。「吳竹」のは節(ヨ又はフシ)の枕詞。轉じて世の枕詞ともする。今はその例。代々和歌に名聲を馳せの意。○かたいとのよりくゝに絶えず「かたい」とは片糸で、より合せない一筋の糸。片糸を二本又は數本より合せたのが、普通の糸である。今は「かたいとの」は「よりくゝ」の枕詞。「よりより」は時々、時代々々の意。「吳竹のよき」も「かたいとのよりくゝ」も同じ意味。眞名の序には「白大津皇子之初作詩賦、詞人才子、慕風繼塵、移彼漢家之字、化我日域之俗、民業一改、和歌漸衰、然猶有先師柿本大夫者、高振神妙之思、獨步古今之間。有山邊赤人者、並和歌仙也。其餘業和歌者、綿々不絶」とある。○これよりさきさまの歌云々この本文のまゝでは、「これより」と云ふのは何時の時代を指すのか明でない。が意味は是より以前の歌を集めて、萬葉集と名付けた、と云ふのであるから、「これより」と云ふのは、萬葉集を撰した時を指して居ることは明らかである。○こゝに古へのこゝろをも云々流布本は、「こゝに」の前、「萬葉集とはなづけられたりける」の次に、「彼の御時よりこのかた、年は百年にあまり、世は十つぎになむりにける」の文が入つてゐる。「こゝに」は萬葉集撰定以後の時代をさす。萬葉集撰定後は歌が衰へて、本當の歌を知つて居る人は極めて少數で一人か二人しかないの意。○かれこれ得たるところ得ぬところ互になむあるその少數の人も、人麿や赤人の様に十分に歌の心を知つて居るのではなく、歌の一部分を知つてゐるに過ぎないとの意。——この少數の人とは、次の條に批評してゐる六人を主として指すのである——「かれこれ」はあちこち云ふ程の意。あちらを得ても、こちらを得ず、こちらを得ても、あちらを得ないと云ふ事、即

ち表現が巧でも内容が貧弱であつたり、内容は十分でも表現が拙かつたりして、その少數の歌を知つた人にも、お互に皆缺點があるとの意。○彼の御時より云々「彼の御時」は萬葉集撰定の時を指す。

【大意】 歌は古から、右に記した如く傳つて来たが、特に奈良朝から廣く行はれる様になつた。奈良朝の天皇は、歌の神髓を知つて居られたのであらう。その時代に、正三位柿本人丸と云ふ人が歌聖であつた。これは君臣合體と云ふ譯であらう。秋の夕には、天皇は立田川に流れる紅葉を錦と御覽になつて歌を詠まれ、春の朝には、人丸は吉野山の櫻を雲かと感じたのである。又(その頃に)山部赤人と云ふ人があつた。歌に非常に堪能であつた。(人丸と赤人とを比較すると)、人丸が赤人より上手であると云ふ事も出来ず、赤人が人丸より劣るとも云ひ難かつた。(奈良の帝及び人麿、赤人の歌は語釋の部を見られ度し)この人丸や赤人を除いて、歌に優れた人々も、その時代その時代にあつて、歌は絶えなかつたのである。この(名人が猶代々續いてゐた時代に、その)時代以前の歌を集めて、萬葉集と名付けられたのである。此からは昔今の歌の本體も知つてゐる人は極めて少數の人である。その少數の人も(人麿や赤人の様に歌に於いて十全を盡してゐると云ふのではなく、歌の必要條件を)或る部分は體得してゐても、他の部分は缺けてゐると云ふ様な有様である。彼の萬葉集が作られてから、今日まで、年は百餘年、天皇の御代で申せば、十代になつた。

【餘言】 ほのぼのとの歌。これは左註に出てゐるのであるから、直接序文に關係した事ではないが、序にこゝに記して置かう。鎌倉から室町にかけての時代、即ち何事にも秘傳、傳授と云ふ様な事をやかましく云つた頃には、この歌を人麿の代表作として取扱ひ、人麿や赤人を神聖化した結果、「ほのぼのと」と云ふ語は、凡人が歌に用ひては

成らぬ等と云つたのである。然し此の歌は、調子から見て、萬葉集時代のものとは思はれない、従つて人麿の作では無いだらうと云ふ事が、殆んど定説になつてゐる。

次に此の歌の解釋について、古來いろ／＼説がある。此の歌は、陸から海を見て詠んだのか、或は作者が船中に居て、陸を望んで歌つたのか、又作者は船中に居て、他の船を見て作つたのかと云ふ事についても説がある。説の分れ目は、「鳥がくれ行く船」と云ふ語の解釋の相違から来る。「鳥がくれゆく」は他のものがだん／＼鳥隠にかくれてゆく意と、自分が鳥隠を行く意とある。古今集遠鏡には、「千秋云」として「鳥がくれゆく船とは、船の鳥がくれゆくごとく聞ゆれど、さにはあらず。朝霧に明石の浦のかくれゆくを、見つゝゆく船といふ意也。此所むかしより人皆まどへり」と云つてゐるが、猶此歌は作者が明石の浦に立つて、船が朝霧の中を行き、やがて鳥の陸へかくれて行くのを見て歌つたと解するのが正當と思ふ。今昔物語集卷二十四の第四十五詩に、「小野篁隱岐國に流されし時和歌を讀む語」の中に、「明石といふ所に行きて其夜宿りて、九月許りの事なりければ、あけぼのに寝られで、眺め居たるに、船の行くが鳥隠れするを見て、哀れと思ひてかくなむ讀みける。「ほの／＼のとあかしの浦の朝霧に鳥かくれ行く舟をしぞおもふ」と云ひてぞ泣きける。これは篁が返りて語りけるを聞きて、語り傳へたとや」とあつて、陸に居て詠んだ事になつてゐる。更にこの詩に依つて、此の歌を小野篁の歌としてしまつてゐる人もある。

今この事を云ふに、官位高きをば、かやすきやうなれば入れず。その外、近き世にその名きこえたる人はい

とすくなし。僧正遍昭は、歌のこゝろをえたれども、まこと少なし。たゞへば繪にかける女を見て、徒らに心を動かすがごとし。

あさみどり絲よりかけでしらつゆを玉にもぬくか春のあをやぎ

はちすばの濁りにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく

嵯峨野にて、馬より落ちてよめる。

なにめでて折れるばかりぞをみなへしわれ落ちにきと人に語るな

在原業平は、その心あまりて、事あかず。萎める花の、色なくて匂残れるがごとし。

月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身一つはもとの身にして

おほかたは月をもめでしこれぞこのつもれば人の老となるもの

ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなくもなりぬべきかな

文室康秀は、ことば巧にて、その様身におよばず。いはゞ、商人のよき衣着たらむがごとし。

ふくからにのべの草木の萎るればむべ山風をあらしといふらむ

深草の帝の御國忌に、

草ふかき霞の谷にかけかくし照る日のくれし今日にやはあらぬ

宇治山の喜撰は、詞かすかにして、始終確ならず、云はゞ秋の月をみるに、曉の雲に逢へるがごとし。

わがいはほは都の辰巳しかぞなくよをうちやまと人はいふなり

よめる歌多くきこえねば、かれこれを通はして、よく知らず。

小野の町は、市への衣通姫の流なり。あはれなるやうにて強からず。云はど、よき女の惱めるところあるがごとし。強からぬは、女の歌なればなるべし。

おもひつゝぬればや人の見えつらむ夢と知りせばさめざらましを

いろ見えてうつろうものはよの中の人の心の花にぞありける

わびぬればよを浮草のねを絶えてさそう水あらばいなむとぞ思ふ

衣通姫の歌

わがせこが来べき宵なりさゝがにのくものふるまひかねてしるしも

大伴黒主は、そのさまいやし。いはど薪負へる山人の、花の蔭にやすめるがごとし。

おもひつゝ戀しき時ははつかりの泣きわたるとも人の知らなむ

かゝみ山いざたちよりて見てゆかむ年経ぬる身は老いやしぬると

【語釋】 ○今この事を云ふに 此の語は流布本の順序に「これかれ得たるところ得ぬところ互になむある」の次につゞけた方が意味がとり易い。「この事」は、古の心も歌の心も知つてゐても、然も人麿赤人の如く、歌を體得して居るのではなく、或る部分を得て他の部分を得ない事を指して居る。その得失について云ふにの意。○官位高きをばかやすきやうなれば入れず 「かやすき」は流布本には「たやすき」とある。心安いの意。歌の得失を論ずるに就いて、高位高官の人に就いて自分等身分の低い者が云つては、餘り心安い様であるから輕々しく取扱ふ様で失禮だから云はぬ。○僧正遍昭 俗姓は良岑宗貞と云ふ。桓

武天皇の孫。嘉祥三年三月仁明天皇の崩御された時出家して、名を遍昭と改め、叡山の慈惠僧正の弟子になる。後元慶寺の座主に補せられ、僧正になる。寛平二年七十六才入滅。○歌のこゝろ 歌の詠み方。流布本には「歌のさま」とある。「歌のさま」は歌の形、體裁。○あさみどり云々 この歌以下「われ落ちにきと人に語るな」まで三首は、例の左註。この歌は、古今集巻一に「西大寺のほとりの柳をよめる」といふ詞書がついて出でゐる。遍昭の歌。(意味は、淺みどりの糸に玉を貫いたのであらうか、あの、露をおびた春の青柳の美しい事よ)。○はちすばの云々 古今集巻三に「はちすの露を見てよめる。僧正遍昭」として出でゐる。(意味は、蓮は濁りに染まぬ喻に、法華經前品にも説いてあるのに——あの清い心を持つてゐる蓮の葉が、何故まゝ露を玉の様に見せて、人を欺くのだらう。——蓮の葉に止つた露の美しさに驚嘆した歌)。○嵯峨野 京都市の西の方にあり。○なにめで云々 古今集巻四に「題しらす」として出でゐる。遍昭の歌。一首の意は、をみなへしと云ふ名が好きだったので折り取つたげなのだよ、女郎花よ、私が墮落した——女に手がけた——等とは人に云つてくれるなよ。第二句「折れる」を「おれる」とし、馬から下りた意に解して「馬より落ちてよめる」としたのであるが、これは「折(を)れる」が正しい。一步を譲つて「おれる」であつたにしても、「下り」は羅行上二段活用で、「おれる」と云ふ活用はない。○在原孝平 阿保親王の五男母は桓武天皇の皇女。元慶四年に卒。年五十六。位は從四位上。○心あまりて事あかず 流布本には「語たらず」言葉たらすとある。何方も同じ意味。「事」は形に表はれたもの、「あかず」十分でない意。内容は十二分に豊富だが、表現が十分でない。○月やあらぬ云々 以下三首は左註。「月やあらぬ」の歌は古今集巻十五にある。業平の歌。長い詞書がある。曰く「五條の后宮の、西の對に住みける人に、本意にはあらで、ものいひわたりけるを、正月の十日あまりになむ、外へかくれにける。ありどころは聞きけれど、えものもいはで、またの年の春、梅の花ざかりに、月のおもしろかりける夜、去年をこひて、この西の對にいきて月の頃まで、あばらなる板敷にふせりてよめる」と。(歌の意は月は去年と同じ月ではないか、同じ月だ、春は去年と同じ)

じ春ではないか、同じ春だ。そして自分の身も去年と同じ身でありながら、去年とは變つてゐる。——去年會へた女に今年は會へなくなつてしまつた。○おほかたの云々 古今集卷十七にある。題しらず。樂平の歌。(意は、月はいゝものではあるが、大抵の事なら月を觀賞すまい。何故かと云へば、月が重なると——「月を賞するのが重なる」と「月日が重なる」にかけてある——人間の老になるんだもの。○ねねる夜の云々 古今集卷十三、「人に逢て朝にのみて遣しける」と詞書がある。樂平の歌。(意は、昨夜の逢瀬が夢の様にはかなかつたから、も一度夢にでも見度いと思つて眠つてみると、夢も見ることが出来ず、ますくはかなく思はれるよ。○文屋康秀 天武天皇の皇子二品長親王の後と云はれるが系圖は明でない。貞観、元慶頃に歌人として聞えた人。○こまば巧にて云々 歌の言葉の使ひ方が上手であるが、歌が下品だの意。「その様」は歌の外形、「身」は歌の品格。○ふくからに云々 「今日にやはあらぬ」までは註。「ふくからに」の歌は古今集卷五に「是貞のみこの家の歌合の歌、文屋の康秀」として出て居るが、契沖は康秀の年齢から考へて、康秀は誤で、康秀の子の朝康の歌であらうと云つてゐる。(一首の意は、秋になつて山風が吹き下ろして来るにつれて、草木が萎れるから、なるほど、山風をあらしと云ふのだらうよ。○草深き云々 古今集卷十六に「深草のみかどの御國忌の日よめる」としてある。康秀の歌。「御國忌」は天皇の御一週忌。「深草の帝」は仁明天皇。嘉祥三年三月二十一日崩御。寶算四十一。この歌は翌嘉祥四年三月廿一日の作。天皇の御陵は京都府紀伊郡深草陵。(一首の意は、まだ晝で照つてゐる日が突然暗くなつた様に、御齡まだ若くおはします天皇が、急に崩御になつて、深草霞の谷へをさめ奉つたのは、丁度去年の今日ではなかつたか、今日だ。○宇治山の喜撰 宇治に住んでゐた喜撰法師。喜撰法師の傳は全く分らない。橋奈良磨の子と云ひ、又紀名虎の子と云ふが明でない。又その歌も、確かなのは「わかいほは」の一首のみである。○詞かすかにして云々 詞が幽玄であるが、その爲に歌の全體が茫漠としてゐて明瞭を缺く。○わがいはは云々 古今集卷十八にある。題しらず。第三句「しかぞなく」が流布本は「しかぞすむ」になつてゐる。「わがいはは」は我が庵。

「たつみ」は辰巳の方角。東南方。「世をうち山」は世を憂しと云ふ、に宇治山をかけた語。(一首の意は、自分の住居は京都の東南方で、宇治山だ、即ち人は世を憂しと云ふに縁のある宇治山なのだ。因に流布本に従へば「しかぞすむ」はかくの如く住んでゐるとにかけた語。○よめる歌云々 この一行は恐らく註が本文に混入したものであらう。意味は、喜撰法師の歌が澤山傳つて居ないから、あの歌この歌と參照する事が出来ないから、よく分らない。論定する事が出来ないの意。○小野小町傳記は分らない。小野篁の孫さか、小野良實の子とか云ふ説があるが、信用出来ない。僧正遍照や文屋の康秀等と應答した歌に限つて大體時代を推定し得るのみである。後撰集には「小町の孫」と云ふ者の歌が出てゐる。○古への衣通姫の流なり この語は註釋が本文へ混入したものであらう。小町の歌が衣通姫の歌の類だとの意。衣通姫は應神天皇の孫、允恭天皇の妃である。本名は弟姫。允恭紀に「弟姫容貌絶妙、其鬢色徹衣而晃之。是以時人名曰衣通姫」云々。その歌は允恭紀に二首出てゐる。○あはれなるやうにて云々 その歌は深い感じが現はれて居る様だけれども、調子は強くない。○強からぬは云々 この語は註が誤つて本文に混入されたものであらう。○おもひつゝ云々 以下「くものふるまひかねてしるしも」までは左註。「おもひつゝ」の歌は、古今集卷十二に題しらずとして出てゐる。小町の歌(一首の意は、戀しい人を思ひながら寝たからその人が夢に見えたのであらう。まあそれが夢だと云ふ事を知つてゐたら、醒めずに居たものを。——夢がさめてしまつて残念なことだ。○いろ見えて云々 古今集卷十五にある。小町の歌。「うつらふ」は移る。盛なものが衰へる意。(一首の意は、草や木の花の衰へるのは目に見えるが、色にも見えずに凋落するのは、たゞ一つ人の心に咲く愛の花だ。○「わびぬれば云々」古今集卷十八にある。小町の歌。流布本の詞書に「文屋の康秀が三河の極になりて、あがた見には、——田舎見物の意——え出て立たじやさいひやれりける返りごとに詠める」と。(一首の意は、自分はひどく難儀をして居るから、浮き草が根が切れて、水に従つて流れる様に、誰でも誘ふて呉れる人があれば、何處へでも行かうと思ふ。第二句「よを浮草の」が流布本には「みをうち草の」とあ

る。「よ」は世。「み」は身。同じ様な意味。「うき草」は、憂いと浮草をかけてある。○わがせこが云々 日本書紀十三卷、允恭天皇の條に出てゐる。元永本にはないが、貞應本以下の本には、卷末に附けた所謂「墨減之歌」の中にある。それには「そとほり姫のひとりゐて、みかどを戀ひ奉りて」と詞書がある。「さゝがに」は蜘蛛の枕詞。(轉じて蜘蛛の意にも用ふ「かねて」は前もつて、豫め、(一首の意は、我が夫の君が今夜は來られる筈だ、と云ふのは、蜘蛛の舉動で其事が豫め明かに分る)。○大伴黒主は云々 黒主は近江の人、郡の大領になつて八位に叙せられた。宇多法皇が近江へ幸せられた時に歌を奉つて、觀感に與かつた事がある。傳記は明でない。以上の五人の批評は皆その得失を擧げて、すぐれてゐる所は賞め、缺點は貶してゐるのに、黒主だけは、「そのささいやし」と貶してあるのみで、優れた所が擧げてないのは、恐らく脱文があるのであらうと云はれてゐる。眞名序には「頗有逸興、而體甚鄙」とある。○おもひいで云々 二首の歌は註である。「おもひいで」の歌は古今集卷十四にある。黒主の歌。詞書がある。曰く「人をしのびにあひ知りて、會ひ難くありければ、その家のあたりを、まかり歩きける折に、雁の鳴くを聞きて、詠みてつかはしける」と。(意味は、思ひ出して戀しい時には、初雁が鳴きながら空を渡る様に、自分は泣き／＼してゐる事を、あなたは知つてゐるだらうか、知らないでしやう。)○かみ山云々 古今集卷十七に、題しらず、讀人しらずで出てゐる。そして左註に「此歌はある人のいはく、大伴黒主がなり」とある。然し果して黒主の歌か否か明でない。「鏡山」は滋賀縣蒲生郡にあり(昔は野洲郡)(一首の意は、鏡山と云ふ名の山なら、ものゝ影もうつるだらう、年をとつた自分は、老いてしまつたか否かを、さあ立ち寄つて見て行かう)。

【大意】 今この事(歌に勝れた人々にも、それ／＼長所もあるが缺點もある事)を云ふについて、高位高官の人は、批評しては、心安い様で失禮であるから、問題外にする。その外では近世有名な歌人は甚だ少い。(先づ第一に有名な)僧正遍昭は歌の詠み方は心得てゐる(その點は勝れてゐる)が、眞實性が乏しい。(言葉の上の技巧の歌が多

欠

欠

確には到底分らないのであるから、この問題は、今後の研究に待つより外はない。本講義に於てはたゞ假名序を解釋する参考として擧げて置くに止める。講義中にも時々引用したが、左にその全文を掲げておかう。猶註釋は畧するが、註釋の見度い方は、契沖の「古今餘材抄」卷一。(大阪朝日新聞社から出た契沖全集第五卷に入つてゐるが、いゝ)又は柿村重松氏の「本朝文粹註釋」(大正十二年刊、京都内外出版株式會社發行)等を見られるのが便利であらう。

三十二頁ヨリ
四十二頁ヨリ
切取

古今和歌集序

紀 淑 望

夫和歌者。託其根於心地。發其花於詞林者也。人之在世。不能無爲。思慮易遷。哀樂相變。感生於志。詠形於言。是以逸者其詞樂。怨者其吟悲。可以述懷。可以發憤。動天地之感。鬼神之化。人倫之和。夫婦之宜。於和歌。和歌有六義。一曰風。二曰賦。三曰比。四曰興。五曰雅。六曰頌。若夫春鶯之囀。花中。秋蟬之吟。樹上。雖無曲折。各發歌謠。物皆有之。自然之理也。然而神世七代。時質人淳。情欲無分。和歌未作。逮于素盞鳴尊到出雲國。始有三十一字之詠。今反歌之作也。其後雖天神之孫。海童之女。專莫不以和歌通者也。爰及人代。此風大興。長歌短歌。旋頭混本之類。雜體非一。源流漸繁。譬猶拂雲之樹。生自寸苗之煙。浮天之波。起於一滴之露。至如下難波津之什獻。天皇。富緒河之篇報。太子。或事關神異。或興入幽玄。但見上古之歌。多存古質之語。

未^レ爲^ニ耳目之玩^ト。徒^ニ爲^ニ教戒之端^ト。古天子每^ニ良辰美景^ヲ。詔^{シテ}侍臣預^ニ宮筵^ニ者^ト。獻^ニ和歌^ヲ。君臣之情。由^レ斯^ニ可^レ見。賢愚之性。於^レ是相分。所^レ以隨^ニ民之欲^ニ。擇^ニ士之才^ト也。自^ニ大津皇子之初^ニ。作^ニ詩賦^ヲ。詞人才子。慕^ニ風繼^ニ塵^ヲ。移^ニ彼漢家之字^ヲ。爲^ニ我日域之俗^ト。民業一^ニ改^リ。和歌漸^ニ衰^レ。然^レ猶^ニ有^ニ先師柿木大夫^ノ者^ト。高振^ニ神妙^ノ之思^ヲ。獨^ニ步^ニ古今之間^ニ。有^ニ山邊赤人^ノ者^ト。並^ニ和歌之仙也^ト。其餘業^ニ和歌^ヲ者。綿綿^{トシテ}不^レ絶。及^ニ彼時變^ニ澆漓^ノ。人貴^ニ奢淫^ト。浮詞雲^ニ興^リ。艶流泉^ニ涌^リ。其實皆落^ニ其花獨榮^ト。至^ニ有^ニ好色之家^ト。以^レ此爲^ニ花鳥之使^ト。乞食之客。以^レ之爲^ニ活計之媒^ト。故半^ニ爲^ニ婦人之右^ト。難^ニ進^ニ大夫之前^ニ。近代存^ニ古風^ノ者。纔^ニ二三而已^ト。然^レ長短不同。論^ニ以^レ可^レ辨。花山僧正。尤^ニ得^ニ歌體^ヲ。然^レ其詞甚花^ト。而少^ニ實^ト。如^ニ畫面好女^ノ。徒^ニ動^ニ人情^ヲ。在^ニ原中將^ノ歌^ハ。其情有^レ餘。其詞不^レ足。如^ニ菱花雖^ニ少^ニ彩色^ト。而有^ニ薰香^ト。文琳巧^ニ詠^ニ物^ヲ。然^レ其體近^ニ俗也^ト。如^ニ賈人之著^ニ鮮衣^ト。宇治山僧喜撰^ニ其詞華麗^ト。而首尾停滯。如^ニ望^ニ秋月^ノ。遇^ニ曉雲^ト。小野小町之歌。古衣通嫺之流也。然^レ艶^ニ無^ニ氣力^ト。如^ニ病婦之著^ニ花粉^ト。大友黑主之歌。古猿丸大夫之次也。頗^ニ有^ニ逸興^ト。而體甚鄙。如^ニ田夫之息^ト。花前^ニ也。其外氏姓流聞^ニ者^ト。不^レ可^ニ勝^ニ數^ト。其大底皆以^レ艶爲^ニ基^ト。不^レ知^ニ歌之趣^ト者也。俗人爭^ニ事^ニ榮利^ト。不^レ用^ニ和歌^ト。悲哉。雖^ニ貴兼^ニ相將^ト。富餘^ニ金錢^ト。而骨未^レ腐^ニ於土中^ト。名先^ニ滅^ニ於世上^ト。適^ニ爲^ニ後輩^ト。被^ニ知^ニ。唯和歌之人而已。何^ニ者^ト。語近^ニ人耳^ト。義通^ニ神明^ト也。昔平城天子。詔^{シテ}侍臣。令^ニ撰^ニ萬葉集^ヲ。自^ニ爾^ニ以來。時歷^ニ十代^ト。數過^ニ百年^ト。其間和歌棄^ニ不^レ披^ニ探^ト。雖^ニ風流^ト。如^ニ野相公^ノ。雅清。如^ニ在^ニ納言^ト。而皆依^ニ他才^ト。不^レ以^ニ斯道^ト顯^レ。伏^ニ惟^ト。陛下御宇。于^ニ今九載^ト。仁流^ニ秋津洲^ノ之外。惠茂^ニ筑波山^ノ之陰。淵變^ニ爲^ニ瀨^ト之聲。寂々^ト閉^ニ口^ト。沙長^ニ爲^ニ岩^ト之頌。洋洋^{トシテ}滿^ニ耳^ト。思^ニ繼^ニ既^ニ絶^ト之風^ト。欲^ニ興^ニ久^ニ廢^ト。

之道。爰詔^ニ大内記紀友則^ト。御書所預^ニ紀貫之^ト。前甲斐少目凡河内躬恒。右衛門府生壬生忠岑等。各獻^ニ家集^ヲ。並^ニ古來舊歌^ト。於^レ是重^ニ有^レ詔。部^ニ類所^レ奉^ニ之^ト。勅^ニ爲^ニ二十卷^ト。名^ニ曰^ニ古今和歌集^ト。臣等詞少^ニ春花之艶^ト。名竊^ニ秋夜之長^ト。況乎進^ニ恐^ニ時俗之嘲^ト。退^ニ慙^ニ才藝之拙^ト。適遇^ニ和歌之中興^ト。以^レ樂^ニ吾道之再昌^ト。嗟呼人丸既^ニ歿^ト。和歌不^レ在^ニ斯哉。于^ニ時延喜五年^ト。歲次乙丑。四月十八日。臣貫之等謹^ニ序^ト。

古今和歌集卷第一

春歌上

ふるとしに春の立ちける日

在原元方

年のうちに春は来にけり一年を去年とやいはむ今年とやいはむ

【語釋】

○ふるとし 舊年。去年。 ○春の立ちける日 流布本には「春立ちける日」の次に「よめる」とある。「春の立ちける日」は立春の日。立春の日から後を春と云ふ。當時の曆——勿論大陰曆——では正月の始めに立春が来るのが普通であるが、稀には前年の十二月に立春が来る事もある。今はそれである。 ○作者在原元方は 在原棟梁の子で、樂平の孫になる。大納言藤原國經の猶子になった人。

【大意】

舊年中に立春が来たので（詠んだ歌）。舊年中に立春が来てしまつたわい。これでは同じ一年の中を（立春

以前の日を) 去年と云はうか、それともやはり今年と云はうか。

春立ちける日よめる

紀 貫 之

袖ひちてむすびし水のこほれるを春立つ今日のかぜや解くらむ

【語釋】

○ひちて 濡らして。 ○むすびし水 手で抱ひ上げた水。 ○かぜや解くらむ 「や」は疑問詞であるが、此處では輕

い意味で、風が解くだらうなあ、と云ふ程の意。この歌には「結ぶ」と「解く」が對して用ひてある。

【大意】 立春の日に詠んだ歌——暑い頃に袖を濡らして汲んだ水が、冬になつて氷つて居るのを、(その氷を)立春の今日の暖い風が解くだらうなあ。

【餘言】

以上の二首は立春の歌であるが、今日から見ると調子の低い、一向に共鳴を感じない歌である。「年のうちに」の歌は、立春はいつも正月に来るから、立春以前は去年と云ふのであるが、今年舊年中に立春が来てしまつたが、いつもの様に立春前を去年と云はうか、それとも未だ正月は來ないのだから今年と云はうか。と云ふので、そんな事は今日の我々には問題にならない。従つて一首の歌にまとめる程の價值がない事である。又次の「袖ひちて」の歌にしても、暑い時と、寒い冬とそして春と三つの季節の事を云つてゐる。貫之が神聖視された時代には、一首の中に春夏秋冬の四季が讀み込まれてゐるのは偉いなど云つたのであるが、我々には聊かしか感興を引かぬ歌である。が此の様な歌が何故古今集の巻頭にあるかと云ふ事は一應考へて見なければならぬ。尤も古今集は内

容を、春、夏、秋、冬、賀、離別、釋旅、物名、戀、哀傷、雜の順序にしてゐるから、立春の歌は春の部の初めに、即ち巻頭にあるとも云へるが、然し何故四季の歌を初めに出したか。又上記の様な歌が、十分に價值のあるものとして此の歌集に加へられたのであらうか。立春の歌ばかりでなく、單に春が來たとか、春が去るとか、夏が來たとか秋が來たとか云ふ歌が、古今集に多くあるが、その理由を考へなければ成らない。

春夏秋冬の季節の變化に驚いて歌つた歌は、萬葉集中にも少くはない。が季節の變化だけを骨子として詠んで居る歌が多いのは、古今集の一つの特徴とも云へよう。この事から次の事がいへるであらう。即ち季節の變化を詠つた歌が多いと云ふ事は、當時の歌人が季節の變化について特別な興味を有つて居たのであると云ふ事を。考へて見れば平安朝の初期から中期にかけては、世は頗る太平で、貴族達は都の外へ足を踏み出す事は殆んどなく、朝廷に仕へて政治に參與すると云つても、年中行事を繰り返して居るに過ぎない。其他には物詣と、戀と官位の爭奪があるのみである。さういふ單調な生活に於いて、春が來る、花が咲く、夏が來る、時鳥が鳴く、やがて涼い風が吹いて秋が來ると野山が紅葉する、冬が來て雪が降ると云ふ、自然界の變化は甚だ重大な事件であり、それは最も美的で、單純な感傷心を刺激するものである。『従つて其處に多くの注意が向けられ、季節の變化を驚く歌が多く生れ、そして其の歌が尊重せられたのである。この事を頭に置いて見れば、「年のうちに」の歌や「袖ひちて」の歌を、一顧の價值なしとして退ける事は出來ない。我々は此等の歌に延喜時代の人々の様に共鳴を感じる事は到底出來ないけれども、當時の人々が喝采した心持を理解する事は出來る。此事は古今集を觀る上に甚だ大事な事である。

○ 春のはじめに
 二條皇后御歌
 雪のうちにはるは来にけりうぐひすのこほれる涙いまや解くらむ

【語釋】 詞書は流布本には「二條のきさきの春のはじめの御うた」とある。二條皇后は清和天皇の皇后で陽成天皇の御母。御名は高子、贈太政大臣藤原良長の女である。この皇后は或る事件の爲、寛平八年に后位を停められ、延喜十年に薨せられた。其後朱雀天皇の天慶六年に、再び后位に復せられた。(其時の詔は本朝文粹卷二に、二條皇后復本位詔——菅三品の作——と云ふ題で出てゐる。)が、古今集撰進の時代には皇后の位を止められて居られた時代であるから、二條皇后と云ふのは稍不穩當である。○うぐひすのこほれる涙 この語について或る論者は、鶯が涙を流したり、又涙が氷れると云ふ様な事はないと云ひ、或る論者は此を反駁する爲に色々な推測をして、むつかしく解釋して居るが、この句は別に問題になる句ではない。鶯に擬人法を用ひたまでである。

【大意】 まだ雪がある内に春が来てしまつた(暦の上で)が春になつた事であるから、冬の間氷つてゐた鶯の涙も、もう解ける事であらう。

○ 不知題
 讀者不知
 梅が枝に来るうぐひす春かけて啼けどもいまだ雪はふりつゝ

【語釋】 ○不知題 讀者不知。流布本には「題しらず。讀者しらず」とある。歌の題も、作者も分らぬと云ふのである。これは實際に分らないのが多いのであるが、中には作者が分つて居ても、憚る事情があつて、わざと讀者しらずと云ふ事もある。又作者の身分が特に卑しい時に、讀者しらずと云ふ事もある。——かう云のは極く稀ではあるが——古今集の讀者しらずの歌は大部分は、萬葉集に次ぐ古い時代——六歌仙の時代及びそれ以前——の歌である。○來る 來て居る。○春かけて この語だけを解すれば、冬から春へかけてと云ふ意であるが、冬から春へかけてとすると「啼けどもいまだ雪はふりつゝ」が意味をなさない。「春かけて」は「いまだ雪はふりつゝ」にかゝる語と説く人もあるが、其は餘り窮した説の様に思はれる。或はもとは「春つけて」ではあるまいか。「か」と「つ」とはよく間違ふものであるから。

【大意】 梅の枝に来て居る鶯は、先がけて(春が来た)と啼いて居るけれど、まだ雪はつゞいて降つてゐる。

○ 素性法師
 雪の樹に降りかゝれるを
 春立てば花とや見らむしら雪のかゝれる枝にうぐひすの鳴く

【語釋】 ○詞書は流布本には「雪の樹に降りかゝれるをよめる」とある。○素性法師 俗名は弘延と云ひ、暹昭の在俗時代の子である。大和物語に暹昭は出家の子に俗人が居るのは、をかしいと云つて、強いて出家させ、石上の良因院に住はせたとある。在俗の時には左近將監であつた。清和天皇の御代の人。有名な歌人で、歌は古今集に澤山出てゐる。○春たてば 春が立つてゐるので。春になつてゐるので。○花とや見らむ 「見らむ」は見らむ。花と見らむ。花と思つて見るのであらうよの意。一本には「見えむ」とある。

【大意】 春になつてゐるので(枝に降りかゝつてゐる雪)を梅の花に思ふのであらうか、白雪のかゝつてゐる枝に鶯が鳴いてゐる。

不知題

よみびこしらす

こゝろざし深くしそめてをりければ消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

或人のいはく、この歌、さきのおほいまふちきみのなり

【語釋】

○深くしそめて 流布本には「深くそめてし」とある。何方にしても「し」は意味を強める辭。○をりければ 「をり」は「折り」と「居り」と二説あるが、「居り」である。○消えあへぬ 消えようとして未だ消えない。○或人のいはく云云 左註である。「さきのおほいまふちきみ」は前太政大臣藤原良房。

【大意】

梅の花に深く志をそめて居たから——深く思ひ込んで居たから——消え残つて居る枝の雪が花の様に見えるのであらう。

○

二條きさきの、東宮のみやすどころとまうしける時に、正月三日、御前に召しておほせごごあるあひだに、日は照りながら、雪のかしらにかゝりけるを、詠ませたまうける。

春の日のひかりにあたる我なれどかしらの雪となるぞわびしき

文室 康秀

【語釋】

○二條きさき 前出。○東宮のみやすどころ 「東宮」は春宮とも書く。皇太子。「みやすどころ」は御息所と書く。皇子や皇女を生み奉つた女御、更衣等の尊稱、又東宮や親王の妃、貴人の室をも云ふ。が「東宮のみやすどころ」と云ふ時は、東宮の妃と云ふ事ではなく、東宮を生み奉つた女御の意。○文室康秀 普通の本には文室康秀となつてゐる。傳記は前に記した。

【大意】

詞書——二條皇后が、(まだ皇后とは申上げずに)「東宮のみやすどころ」と申上げて居た時の正月三日に、(自分を)御前に召され、御言葉を下されてある間に、太陽は照つて居るのに、雪が降つて、自分の頭にかゝつたのを、歌に詠ませられた(ので詠んで奉つた歌)。

歌——表の意は、自分は春の太陽の光を受けては居るけれど、頭に雪が降りかゝつて白くなるのは、つらい事である。といふのであるが、裏の意は、春の日を春宮にたとへて、春宮の恵の光を蒙つてゐる有難い自分ではあるけれども、もう頭がこの様に白くなつて(年寄つて)しまつたのが、情なく思はれる。

○

雪の降りける日

貫之

かすみ立ち木の芽もはるのゆき降れば花なきさとも花ぞちりける

【語釋】

○木の芽もはる 「はる」は木の芽が張る。木の芽がふくらむ。と「春の雪」の「春」にかけてある。

【大意】

霞が立つて、木の芽もふくらむ此の春の季節にこの様に雪が降ると、(雪が花に見えて)花のない里にも實際に花が散つて居る。

春のはじめに
藤原言直

○ 春やとき花やおそきと聞きわかむうぐひすだにも啼かすもあるかな

【語釋】 ○春やとき 「や」は疑問詞。「とき」は早き。 ○聞きわかむ 聞いて何方か判断すべきの意。 ○作者言直は藤原安繩の子。昌泰三年に因幡掾に任ぜられた人。歌は古今集には此一首だけ。

【大意】 もう春になつたのに花はまだ咲かないが、これは春の来ようが早すぎるのか、それとも花の咲き様が遅いか、(それは鶯の聲を聞けば分るのだが)その何方かを判断す可き鶯さへもまだ鳴かずに居る事よ。

【餘言】 以上、「雪のうちに」以下の歌は——「春の日の」の歌は少しくちがふが——皆春の初の歌である。春と云つてもまだ花も咲かない頃の歌であつて、花の咲く可き春になつたが、まだ咲かないと云ふ。曆と實際の自然界との矛盾に立脚して居る。その點に於いて、最初の「年のうちに春は来にけり」云ふ歌と相通するものがある。而して既に記した如く、當時の人が季節の變化に特殊な興味を有つて居た事を、頭に置いて見なければ、これらの歌を味ふ事は出来ない。

不知題
讀人しらす

○ 野べちかく家居をすればうぐひすの啼くなるこゑを朝な朝なきく

【語釋】 ○家居をすれば 流布本には「家居しをれば」又は「家居しせれば」とある。家居す、は家を作つて住居すること。流布本の家居しのしは意味を強める辭。 ○朝なく 毎朝。

【大意】 野邊近く住居をしてゐるので、鶯の鳴く聲は、毎朝聞く。おもしろい事だ。

○ かすが野は今日はな焼きそ若草のつまもこもれりわれもこもれり

【語釋】 ○(題しらす 讀人しらすの歌)。 ○かすが野 大和の名所今の奈良市の近くである。 ○今日はな焼きそ。「な……」それは勿れ。今日は焼く勿れ。(春日野では毎年春、野に火をつけて前年の枯草を焼き拂ふのである)。 ○若草の「つま」の枕詞。つまは夫の意にも妻の意にも用ひるが、此處では妻の意。 ○こもる 籠る。中に居る。

【大意】 春日野は今日は焼いてくれるな、春日野には妻も来てゐる。自分も来て居るのだから。

【餘言】 右の歌は、夫妻で春日野へ遊びに来て、野守に向つて歌つたものであらう。この歌は伊勢物語に、初句を「武藏野は」とし、男女が駈落して武藏野に隠れて居る時、跡を追ひかけて来た者が、武藏野に火をつけて、二人を捜し出さうとしたので、女が之を憂うて歌つたとしてある。

○ 春日野の飛火の野守出でて見よ今いく日ありてわか菜摘みてむ

【語釋】 ○(題しらず 讀人しらずの歌)。○飛火の野守。飛火野の野守と云ふこと。のを一字略したのである。飛火野は春日野の一部分を云ふ。飛火は烽火で、戦争等の時、急いで通知せなければ成らぬ時に、火を揚げて合圖をするのを烽火―飛火と云ふ。その飛火の設備があつたので、其野を飛火野と云ふ。○野守 野の番人。○わか菜つみてむ 「てむ」は希望の意にも、用ひるが、此處は未來の推量。

【大意】 春日野の飛火野の野守よ(お前は野に居るのだから知つて居るであらうが)もう何日経たら若菜が摘めるだらうか。聞かせてくれ。

貫之

梓弓おしてはるさめ今日降りぬ明日さへ降らばわか菜摘みてむ

【語釋】 ○貫之 流布本には作者の名がない。(讀人しらずになつてゐる)。○梓弓 梓は木の名で、赤芽柏とも云ふ。弓の良材とされてゐる。(支那では梓は版木に用ひる)梓弓は、梓で作つた弓の意であるが、轉じて引く、張る、本、末等の枕詞に用ひる。こゝは「はる」の序詞。○おしてはる 「おして」は、おしなべて、「はる」は梓弓の縁で、弦を張ると云ふ意と、春の意とかけてある。

【大意】 おしなべて何處も春雨が今日は降つた。もう一日明日雨が降つたら(若菜が摘める様になるだらうから)若菜を摘まう。

仁和帝の、みこにおはしましける時、人に若菜たまひける歌

君がため春の野に出でて若菜摘むわがころも手に雪は降りつゝ

【語釋】 ○仁和帝 光孝天皇のこと。仁明天皇の第二皇子。○みこにおはしましける時 まだ親王でゐらせられた時。流布本には「おまし／＼ける時に」とある。○君がため 君のために、君にあげやうと思つて。君は若菜を頂戴する人をさす。○ころも手 袖のこと。

【大意】 君にあげやうと思つて、春の野に出で、若菜を摘んでゐる自分の袖に、雪が降りかゝつて、中々難儀だつたよ。――この歌は百人一首に「光孝天皇」として出てゐる。

不知題

在原行平

春の著るかすみの衣ぬきをうすみ山かぜにこそたたるべらなれ

【語釋】 ○在原行平 阿保親王の子で、樂平の兄。眞名序に在納言とあるのは此人の事。○春の著るかすみの衣 霞は野山を覆ひ包むから衣と云ひ、霞は春の景物であるから、春を擬人して、霞を春の著る衣と云つたのである。○ぬき ぬき糸のこと 布帛を織るのには、經(縦)糸と緯(横)糸とある。○うすみ 薄いので。○たゝる 断たる。たち切られる。流布本には「みだる」。○べら べきと同じ意、べらと云ふ語は平安朝の初頃に用ひられた語で、古今集には多くあるが、拾遺集の時代になると、殆んど用ひられてゐない。「たゝるべらなり」は断たれさうだの意。

【大意】 春が着てゐる霞の衣は、緯糸が薄いので山風に吹き切られさうだわい。

○

不知題

読人知らず

もよちどり啼くなる春はものごとに改まれどもわれぞ古り行く

【語釋】 ○もよちどり 百千の鳥。多くの鳥の意。因に「もよちどり」は昔は古今傳授の三鳥の一つであつた。百千鳥は春の物也。鶯の事を云ふ。と云ひ、更に色々な説を附會して居る。がこれは「もよちどり」と云ふ語が一寸見ると或る種の鳥の名の様に思はれる所から起つた説で、固より取るに足らぬものである。

【大意】 色々な鳥が鳴き交はす春は、山川草木すべてのものが、皆新らしくなつて行くが、それらに反して自分だけは段々年を取つて古くさくなつて行く。

○

をちこちのたづきもしらぬ山中におぼつかなくも呼ぶこどりかな

【語釋】 ○(題知らず讀人しらすの歌)。○をちこち をちは遠方。こちは此方。あちこちの意。○たづき たよりどころ。

「たづきもしらぬ」は案内もしらぬと云ふ程の意。○呼ぶこどり 「おぼつかなくも呼ぶ」と「よぶこどり」とがかけてある。扱て「よぶこどり」は、これも古今傳授の三鳥の一つで、猿だともいふ。また山彦をも云ふと云つた。が猿や山彦をよぶこどり云ふ

答はない。よぶこどりは鳥の名である事は間違ないが、如何なる鳥かについては定説はない。或は鳩だと云ひ、或は鶉鳥と云ひ、或は閑古鳥だと云ひ、又鳩だとも云はれてゐる。因に呼ぶこどりは萬葉集卷十にも出てゐる。

【大意】 何方へ行つていゝのか道も分らない山の中で、ぼんやり呼子鳥が人を呼びかける。

○

色よりも香こそあはれとおもほゆれたがぬぎかけし宿の梅ども

【語釋】 ○(題知らず 讀人しらすの歌)。○あはれ あゝと感嘆する語。こゝではあゝいゝなあと身に感ずる意。○たがぬぎかけし たれが衣をぬいで掛けた。流布本及筋切には、「たが袖ふれし」とある。誰の袖がふれた……の意。この方がいゝやうである。昔は着物に香をたきこめて居たから、着物が觸れれば香が移るのである。○宿の梅ども 宿は屋戸である。が家の意にも用ゐられてゐる。「ぞ」は「たがぬぎかけし」を受けて、意味を強くする語。

【大意】 この宿の梅の花は、色もいゝが、それよりも香が身に染みてよく感ぜられるが、一體この梅は誰が衣をぬぎかけて、その香が移つたのだらう。

○

くらぶやまにて

貫之

梅の花にほふ春べはくらぶ山やみに越ゆれどしるくぞありける

【語釋】 ○くらぶ山 滋賀縣甲賀郡にあるといふ。歌の「くらぶ山」は暗くらぶに因み、「やみ」と聯關させてある。○春べべは附近の意であるが春べは春の頃。○しるく著しく 判然としてゐるの意。

【大意】 梅の花が美しく咲き匂つて居る春の頃は、くらぶ山を暗夜に越して行つても、梅の花は匂ふから、匂で、こゝがくらぶ山であると云ふ事がはつきり分る。

はるの夜、梅花を

春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ

【語釋】 ○(太河内躬恒の歌 躬恒の傳は序文の註にある。) ○あやなし 布帛の文が無いと云ふ事から出た語で、道理が立たぬ。分がわからぬの意。○香やはかくるゝ 香のやは疑問詞で、香はかくるゝやと同じ。反語で香は隠れようか、かくれないの意。

【大意】 春の夜の闇と云ふものは、分のわからないものだ。(と云ふのは)闇で花の色は隠す事が出来るが、花の香をかくす事は出来ないのだから。——香が隠れなければ、色は見えなくても花がある事は分るから、隠した事にならぬ。

初瀬はつせにまうづるごとに、れいのやどりける人の家に、ひさしうやどらで、程へてまかりたるに、かくさだか

其之

になむやどはがあると、あるじいひ出だしたれば、そこなる梅を折りて。
○人はいざこゝろも知らずふるさは花ぞむかしの香ににほひける

【語釋】 ○初瀬 泊瀬とも書く、今は長谷と書く。大和國長谷山にある長谷の觀音のこと。○まうづる 參詣する。○れいのやどりける人の家 いつでも參詣する時には自分が宿泊した宿。○やどらで 宿らないで「で」は打消の語。○程へて後程は時と同じ。久しく経てから。○かくさだかにやどはある。「さだか」ははつきり。「やど」は流布本には「やどり」とある。やどりは「宿る」と云ふ動詞から轉じた名詞で、宿と同じ。意味は此の様にはつきりと——昔の通り——宿はありますよと云ふので、裏は、あなたは私の家ももう無くなつてしまつたかの様に、一寸も来られませんでしたね、と云ふ意を含ませてある。宿の主人が皮肉を云つたのである。○そこなる 其處にある。○人はいざ「いざ」は下の「知らず」に續く語で、如何と云ふ程の意。「いざ」は全然別の語である。○ふるさと 生れ故郷の意ではなく、嘗つて住んだ事のある土地の意。

【大意】 詞書——初瀬の觀音へ參詣する度に、(以前には)いつも宿る事にして居た人の家へ(近來)久しく宿らないで(外の宿に宿つてゐたが)、久しぶりに以前の宿へ行くと、此の様にちゃんと家はあるんですよ(家が無くなつたかのように来られなかつたが)と宿の主人が云ひ出したので、其處にある梅を折つて(次の歌を詠んだ)。

歌——(家は昔の儘にあると云はれるが)あなたの心は昔の通りか否か分らない。が梅の花は昔と同じく咲き匂ふてゐる。この歌は百人一首に入つてゐる。

水のほとりに、梅の花のさけるをよめる 伊勢

はるごとに流るゝかはをはなと見て折られぬ水に袖ぞぬれける

【語釋】 ○水のほこり 伊勢集にはこの歌の詞書に「京極の院に亭子のみかどおはしまして花の宴せさせ給ひ、参れとお任せられしに参りて、池に花などちりたるを見て」とあるので、この水は池の水、或は池に積いた遺水やちみづであらうと解釋して居る人が多いが、「伊勢集」と云ふものは後人の撰だと云はれて居るし、又歌に「流るるかは」とあるから、この「水のほこり」は河邊の意と解して置いた方がいゝ。

○流るゝかはをはなと見て 流れる河にうつて居る花の影を、實際の花かと思つて。 ○袖ぞぬれける 流布本には「袖やぬれなむ」とある。 ○作者伊勢は 當時第一の女流作家である。藤原繼蔭の女で七條后の女房。宇多天皇の寵を受けた。天皇が位を退かれる時、伊勢も宮廷を退いた。後教慶親王との間に女中務を生んだ人。

○作者伊勢は 當時第一の女流作家である。藤原繼蔭の女で七條后の女房。宇多天皇の寵を受けた。天皇が位を退かれる時、伊勢も宮廷を退いた。後教慶親王との間に女中務を生んだ人。

【大意】 いつの春でも、あの流れる川にうつる花の影を、眞の花かと思つて、折る事も出来ぬのに一枝折らうとしては袖がぬれる事である。「袖やぬれなむ」ならば、毎春ぬれる事であるが、今年も亦ぬれる事であらう——水に映つた花の美しさを歌つた技巧の歌である。

○

年を経て花のかゞみとなるみづは散りかゝるをや曇るといふらむ

【語釋】 ○年をへて 年を重ねて。 ○花のかゞみとなるみづ 花の影をうつして花の爲に鏡になる水。 ○散りかゝる 花が水面へ散りかゝるの姿、鏡に塵がかゝるの姿をかけた語。

【大意】 (作者は伊勢、前の歌と同時に詠んだ歌である) 年を重ねて毎年花の影をうつして花の爲に鏡になる水は、普通の鏡が年久しく経て塵がかゝるのを曇ると云ふ様に、花か散りかゝるのを曇ると云ふのであらう。これも前と同じく技巧の歌である。

○

家に侍りける梅花の散りけるを 貫之

暮ると明くとめかれぬものを梅の花いつの人まに移ろひにけむ

【語釋】 ○暮ると明くと 日が暮れると云ふても夜が明けると云ふても。朝夕に。 ○めかれぬものを 目を離さぬものを。「かれる」は離の意。 ○人ま 人の見ぬ間 人の居らぬ間。後撰集に「あひ見てもつゝむ思のわびしきはひとまにのみぞねはなかれぬる」と云ふのがある。 ○移ろひにけむ 流布本には「移ろひぬらむ」とある。「移ろひ」は「移り」の延言。移るはものゝ變化することであるが、盛なものが衰へる時に用ゐる。こゝは花の散る意。「移ろひに」には過去の助動詞。(移ろひぬぬも過去の助動詞)

【大意】 日が暮れるとても、夜が明けるとても、いつも目を離さずに見て居たのに、梅の花はいつの間に散つてしまつたのだらう。——自分が見て居らぬ時は無いのに、知らない間に散つてしまつた。

○

渚の院にて櫻花を見て

業平

190

53

世の中にたえて櫻の咲かざらばはるの心はのどけからまし

六〇

【語釋】 ○ 渚の院 渚は地名。河内國交野郡の名所。院は別荘と云ふ程の意。「渚の院」は惟喬親王が遊獵の時に設けられた假宮である。親王がこの渚の院へ行かれた時、業平が御供して行つて、この歌を詠んだのである。この事は伊勢物語にも出て居り、土佐日記にも出て居る。○ たえてさくらの咲かざらば「たえて」は一向に、全く。「さくらの咲かざらば」は、流布本には「櫻のなかりせば」となつてゐる。伊勢物語も同じ。土佐日記には「咲かざらば」とある。○ のどけからまし のどけくあるだらう。「のどけく」はのんびりしたこと、悠長な貌。

【大意】 世の中に櫻の花が全く、咲かないものなら、春の心はのんびりするだらうに。——櫻を非常に愛する心を歌つたので、愛する餘りに、花の咲くのを待ちこがれ、咲きそるへば風や雨の心配をし、散る様になれば又愛惜して、のどかであるべき筈の春の櫻の爲に一向のどかでない。

21

56

花のさかりに京を見やりて
見わたせば柳さくらをこきまぜてみやこぞ春のにしきなりける

素性

【語釋】 ○ 見わたす 遙に見やる事。○ こきまぜて かきまぜてと云ふ程の意で。○ 京 平安京 今の京都市。○ 作者素性法師は僧正通照の子、通照が出家してから、出家の子に在俗の者があるのは感心しないと云つて、強ひて出家させたと傳へら

れる。父に劣らぬ歌僧である。

【大意】 遠くから見ると、柳と櫻の花が入り亂れて、みやこは誠に春の錦そのままであるわい。春の錦の語が、新しく美しい。

67

さくらの花見に来たりける人につかはしける
わが宿のはな見がてらにくる人は散りなむ後ぞこひしかるべき

躬恒

【語釋】 ○ さくらの花見に云々 この花は躬恒の邸に咲いて居るのである。○ はな見がてら 花見のついで。——花を見るのが主目的で、そのついでに躬恒を訪ふ。

【大意】 自家の宅へ花見がてらに来る人は（自分に會ふのが主目的では無いのだから）花が散つてしまつた後には（来ないだらうから）その人が戀しく思はれるだらう。

古今和歌集卷第二

春下 (流布本は春歌下)

70

待てと云ふに散らでしとまるものならば何を櫻におもひまさまし

素性

【語釋】 ○待てといふに 散るのを待つてくれといふのに。 ○散らでし「し」は意味を強める辭。 ○何を櫻に思ひましまし「まし」は普通「ば」と連なつて、未來を表はす助動詞。何を櫻以上に思はうか、何物をも櫻以上に思はないだらうに。

【大意】 散るのを待つてくれと云ふと、散らないで待つてゐてくれるものなら、何を、櫻よりもいと思ふだらう。櫻を最上のものと思ふだらうに。——惜しい事には散るのを待つてくれと云つても待たずに散つてしまふ。

72

この里に旅寝しぬべしさくらばな散るとまがふに家路わすれて

【語釋】 ○旅寝しぬべし 旅寝は旅行中の宿泊の意であるが、旅行と云ふ程でなくて、一晚か二晩他に宿泊するのも旅寝と云ふ。こゝはその意。「しぬべし」の「ぬ」は過去の助動詞、「べし」は推量の助動詞。旅寝してしまはう。 ○散るとまがふに「散ると」は副詞句で「まがふ」にかゝる。「まがふ」盛に散る事。大變散る爲にの意。流布本には「都のまがひに」 ○家路 自分の家へ歸る道。 ○作者は素性法師。

【大意】 今夜はこの里に宿つてしまはうよ。櫻の花が(あまり)散り亂れ爲に家へ歸る道も忘れてしまつて。

74

僧正遍照によみておくりける

惟喬親王

さくらばな散らば散らなむ散らすとて古里人の來ても見なくに

【語釋】 ○散らば散らなむ 散るのなら散つてくれ「なむ」は希望の助動詞。 ○古里人 故郷の人。昔なじみの人。こゝでは僧正遍照をさしてゐる。故郷は、ここでは生れた所と云ふ程の意味ではなく、自分が前に居た所の意。 ○見なくに「なく」はぬと同意。見ないのに。 ○作者惟喬親王は文徳天皇の第一皇子で、天安十四年に御出家遊ばされ、翌十五年二月に薨せられた。御年廿六。

【大意】 櫻の花よ、散らうと思ふのなら勝手に散つてくれ、散らないで居るからと云つても、昔なじみの人が見に来るのではないのに。——古里人が來てくれるのなら、櫻も散らずに居てほしいと思ふけれど。

○

あひしれりける人まうできてのちに、花にさしてつかはしける 貫之
ひとめ見しきみもや來ると櫻花今日は待ちみて散らば散らなむ

【語釋】 ○あひしれりける人 前から知つてゐた人。知人。

【大意】 知つて居た人が訪れて來て、歸つた後に花につけて與へた(歌)——櫻の花よ、一寸見たあの人、再び來るかも知れないから、今日一日だけは散らすに待つて居て、(然る後に)散るのなら散つてくれ、といふ事を、私は花に向つて申しました。どうぞ今日一度見に御出下さい。

○

山のさくらを

深養父

春霞なにかくすらむさくらばな散るまをだにも見るべきものを

【語釋】 ○なに 何故。 ○作者深養父 氏は清原房則の子。延喜延長の頃の有名な歌人。

【大意】 春霞は何故、櫻をかくすのだらう。花が散る間をでも、せめて見ようものを。——霞がかゝつて見られな
ゝのは残念だ。

心地そこなひて、わづらひける時、風にあたらじとて、おろしこめてのみ侍りける
あひだに咲ける花の、散りかたになりけるを見て、よみはべりける。
たれこめて春のゆくへも知らぬまに待ちし櫻もうつろひにけり

典侍因香

【語釋】 ○心地そこなひて 氣分を害して、病氣をして。 ○おろしこめて 簾、几帳などを下して内に「閉ぢこもつて」。 ○
たれこめて おろしこめてと同じ意。「たれ」は簾や几帳を垂れること。 ○春のゆくへ 春の過ぎてゆく方向の意であるが、こ
ゝは春の過ぎてゆくこと。 ○作者典侍因香氏は藤原高藤の女と云ふ。寛平九年に従四位下掌侍になつた人。典侍は内侍司の女
官で、略して「すけ」とも云ひ、音讀して「てんじ」とも云ふ。

【大意】 氣分を害して惱んで居た(病氣になつてゐた)時に、風にあたるまいとして、閉ぢ籠つてばかり居た間に、
咲いた花が、散る頃になつてしまつたのを見て、よんだ歌。——閉ぢこもつて春の過ぎゆく事も知らずに居た間
に、咲くのを遅いと待つて居た櫻が、もう盛りが過ぎてしまつた。なごり惜しい春だ。

久方のひかりのどけき春の日にしづごゝろなくはなの散るらむ

友則

【語釋】 ○久方の 枕詞。前出。こゝでは「ひかり」に係る。 ○しづごゝろ 静かな落ちついた心。 ○らむ 推量の助動詞。

○作者紀友則の傳は前出。○流布本には「櫻の花をよめる」と詞書がある。この歌は百人一首に出てゐる。

【大意】 大空の陽は、のんびりとしたこの春の日に、花は、何故落ちついた心もなく(あわたしく)散るのであら
う。「や」などの係がなく、たゞ「らむ」で終つてゐる歌は、「など」の疑問の意を添へて解するのが普通である。

東宮の帯刀の陣にて、さくらの花の散るをよめる
はる風ははなのあたりをよきて吹け心づからやうつるふと見む

藤原好風

【語釋】 ○東宮 皇太子。春宮と書いても同じ。 ○帯刀の陣 帯刀は東宮付の武官。帯刀の陣は帯刀の詰所。 ○花のあたり
花の近く。 ○よきて よけて。避けて。 ○心づからや 「や」は疑問詞。「心づから」は心のまゝから。他から強要せられて
ゝはなく、自分の自由な心から。 ○見む 試みようの意。 ○作者好風は滋賀の子とも正野の子とも傳へられる。延喜の頃に東
宮の帯刀であつた。のち出羽國城介になつた人。

【大意】 (花は風に吹かれて散るものであるが)春風よ花の近くを避けて吹いてくれ。(自分は)花が自ら散らうと思つて散るのか(風に吹かれて心ならずも散るのか)試して見ようと思ふから。

題 不知

よみびとしらす

春の色の花よりいたらぬ里はあらし咲ける咲かざる花の見ゆらむ

【語釋】

○春の色 春の気分、春の景色と云ふ程の意であるが、こゝでは單に春と解すればいゝ。漢文の春色と云ふ語を直譯した語。○いたりいたらぬ 語を強め調子を調へる爲に語を重ねた。至る里と至らぬ里との意である。次の「咲ける咲かざる花」と對する。「咲ける咲かざる花」は咲いた花と咲かない花との意である。

【大意】 春は到つた里と至らぬ里との區別はあるまいに(何處の里へも平等に訪れてゐるのであらうに)、何故、花は咲いたものとまだ咲かないものとあるのであらう。理路に墮してゐる。

○

雲林院親王のみもとに、花見に北山の邊に罷けるによめる

素性法師

いざ今日は春の山べにまどひなむ暮れなばなげの花のかけかは

【語釋】

○雲林院親王は雲林院に居られた親王で、こゝは常康親王を指す。雲林院は今の京都市紫野、大徳寺のある所にあつた寺で、文學上有名な寺である。○北山 當時の京都の北方、現在の京都市の西北にある一體の山、船岡山、衣笠山等を指す。——雲林院は船岡山の東の麓にある。○春の山べにまどひなむ 「山べ」のべはあたりと云ふ意であるが、(詞書の北山の邊。又は川邊、海邊)等の邊、こゝは接尾語的に軽くつけ加へたもので、單に山と云ふ程の意。「まどひなむ」のなむは希望の助動詞。まどふは行く可き方向の分らない事であるが、こゝは、家へ歸る事も忘れて遊ばうの意。(流布本には「まじりなむ」とある。山に入らうの意)。○なげ 無しの語根に氣をつけた語で、なささう。なくなりさう。○かは 反語。

【大意】 北山の邊の雲林院に居られる常康親王の許へ花見に行つて詠んだ歌。——さあ今日は、春の山で(家路も忘れて)遊ばう。日が暮れたなら無くなる様な花の蔭だらうか、暮れたつて花の蔭はあるのだから。(花に宿を借ればいゝ)。

うつろふ花を見て

射 恒

はな見れば心さへにぞうつりけるいろには出でし人もこそ知れ

【語釋】

○心さへにぞ ぞは意味を強める天聲波。○うつりける 「うつる」は詞書の「うつろふ」と同じく、盛なものや衰へること。○いろには出でし 表にはあらはすまい。「いろ」は表面、顔色の意。

【大意】 盛りを過ぎてしまつた花を見て、詠んだ歌。——衰へた花を見ると、自分の心までが移つてしまふがその心を表面にはあらはすまい。(あらはせば)人がそれと知るであらうから。戀の意を含めたのを喜んだのである。

○ ふくかぜを啼きてうらみよ鶯はわれやははなに手に觸れたる

【語釋】 ○うらみよ 恨めよ。「うらむ」は古くは上二段活用であるから、命令形は「うらみよ」となる。 ○われやは花に手に觸れたる やは疑問詞。この句は反語になる。自分は花に手でも觸れたらうか、手もふれない。 ○「題知らず」「よみびと知らず」の歌。

【大意】 鶯は（自分が花を散らしたかの様に、うらみ顔に啼くが、花を散らしたのは風なのだから）吹く風を啼いてうらめ、自分は花に手でもふれただらうか、觸れはしない。

109 鶯の啼くを 素性
木づたへばおのが羽風に散る花を誰におほせてうぐひすのなく

【語釋】 ○木づたへば 木づたふは木の枝から枝へ傳ひ歩くこと。 ○羽風 鳥が飛ぶ時、羽を動かす事に依つて生ずる風。 ○誰におほせて 「おほせて」は負はしめて。誰に責を負はしめて。 ○結句「うぐひすのなく」が流布本には「こゝらなくらむ」とある。「こゝら」は澤山の意。「らむ」は推量の助動詞。

【大意】 鶯が花の咲いて居る枝を、枝から枝へ飛び傳つて行けば、自分の羽風で花が散るのに、花を散らした咎を誰に負はせて、まあ、うらみ顔に鶯が啼くのだらう。下句（流布本に従へば、咎を誰に負はせて、こんなに大さうに啼くのだらう）。

○ 題知らず よみびと知らず
駒なめていざ見にゆかむ故里はゆきとのみこそはなは散るらめ

【語釋】 ○駒なめて 駒を並べて。うちつれて駒に乗つて。 ○雪とのみこそ 「のみ」は範圍を極限する辭。「こそ」は意味を強める辭。全く雪の様に。

【大意】 さあ馬を乗りならべて、一處に見に行かう。故郷は花が、全く雪が降る様に散つて居ることであらう。

113 小野小町
花の色は移りにけりないたづらに我身世にふるながめせしまに

【語釋】 ○うつりにけりな 「うつる」は前出。「な」は感嘆詞。 ○いたづらに 無駄に。ぼんやりと。 「ながめせしまに」に係る。 ○世にふる 「ふる」は経るで、世に長へて年を取る意と、「降る」で次の「ながめ」が降ると兩様の意味にかけてある。 ○ながめ 長目で、物思ひにふける意と、長雨、即ち長く降りつゞく雨で、霖雨の意とにかけてある。

【大意】 花は盛りが過ぎてしまった、ぼんやりと自分が年を取った事に思ひふけて居り、外には長雨が降つて居た間に。

○

志賀よりかへりける女どもの、華山に入りて、藤の花のもとに立ちよりて
かへりけるに、よみておくりける
遍照

よそにみてかへらむ人に藤のはなはわまつはれよ枝は折るとも

【語釋】 ○志賀 志賀寺を指してゐる。志賀寺は崇福寺とも云ひ、滋賀縣滋賀郡見世の西にあつた寺で、天智天皇の七年に建てられたもの。○女ども 女は流布本に「をうな」とある。同じ事である。「おうな」は老女の事。○華山 華山寺のこと。本名は元慶寺。山城國宇治郡山科村北花山にあつた寺。遍照はこの寺に住んでゐたのである。(遍照を華山僧正とも云ふのはこの故である)。山科村は近江から京都へ行く途中。○よそにみて よそ、くともみて。○はなまつはれよ。「はな」は流布本には「はひ」とある。「まつはれよ」は命令形。藤よ、延びて行つてまつはれ。

【大意】 志賀寺から京都へ歸る女達が花山寺へ寄つて、藤の花の下へ立ち寄つて、(自分には會はないで)歸つて行つたので、詠んで贈つた歌。——藤の花よ、自分の方をよそ／＼しく見て歸つて行く様な人は、たとひ枝は折れてもかまはぬから、纏ひ附いて引き止めよ。

○

題しらす

よみびとしらす

蛙鳴く井出のやまぶき散きにけり逢はましものを花のさかりに

此歌、或人のいはく、きよともがとぞ

【語釋】 ○蛙なく 井出の枕詞。蛙は今河鹿の事。井手には河鹿が多かつたので、井出の枕詞になつたのである。○井出

山城國相樂郡の名所。こゝは山吹の名所であり、又蛙(河鹿)の名所である。○四五句は流布本では元永本とは違に、「花のさかりにあはましものを」とある。○此歌云々 左注である。清友は橋氏で、奈良麿の子。

【大意】 (山吹を見ようと、訪れてみれば)蛙なく井出の里の山吹は、既に散つてしまつて居る。花のさかりに逢ひ度いものであつたのに。

○

やよひのつもごりがたに、山を越えけるに山川に、花の流れけるに 深養父
はなの散る水のまに／＼とめくれば山には春もなくなりけり

【語釋】 ○やよひ 彌生 三月。○つごもりがた 月末頃。「つごもり」は「つきごもり」のきが略されて出來た語で、「月籠り」は月が隠れて現はれないの意。○はなの散る 流布本には「はな散れる」とある。○まに／＼ まゝに。○とめくれば

「とめ」は求め。○山には春も云々 流布本には「山にも春は」とある。

【大意】 三月の末に山を越えてたところ、山川に花が流れてみたので。——花が散つて流れてゐる水に添うて、川上の山へ春を求めて来て見れば、花は既に散つてしまつて、山には春もなくなつてしまつてゐる。(山にも春は、とすると、平地にも春は去つてしまつたが、山にも春はないの意)。

寛平御時、后宮歌合

興風

こゑたゝずなけや鶯ひとゝせにふたゝびとだに來べきはるか

【語釋】 ○寛平の御時云々 流布本には「寛平の御時、きさいの宮の歌合のうた」とある。「寛平の御時」は宇多天皇の御代。后宮歌合」は後宮が主催者になつて行はれた歌合。「歌合」は歌人を左右に分け、左右に一番二番と順序を定め、左右の一番から順次歌を一首づゝ出させて、判者が優劣を判定し、全部終つてから、一番毎の勝負の数を合算して、左の方の勝、或は右の方の勝と定める一種の遊び、番数は、五番七番位のものから、多きは千五百番に及ぶ。千五百番の歌合をするには三千人の歌人が居らねば成らぬ。○こゑたゝず 啼く聲を絶たず。流布本には「こゑたえず」とある。「たえず」は自動詞であるが、意味の上から云ふと、他動詞に「たゝず」と云つた方がいゝ様に思ふ。

【大意】 鶯よ聲を絶たずに啼きつゝけてくれ、春は一年に二度來だらうか、二度とは來ないのだから。

【餘言】 後撰集に「ひとゝせにかさなる春のあらばこそふたゝび花を見むと頼まめ」と云ふ歌がある。「こゑたゝ

ず」の歌と極想は同じである。

○ やよひのつもごりの日、雨の降りけるに、藤花折りて人につかはすとて 業平

濡れつゝぞしゐて折りつるとしの内に春は今日をし限とおもへば

【語釋】 ○しゐて 流布本に「しひて」とある。其の方が正しい。強ひて。○春は今日をし限とおもへば 今日三月晦日。明日は即ち四月初日は夏であると思へば、流布本には「春はいくかもあらじとおもへば」とある。春はもう何日もあるまいと思へばの意。流布本に従へば、詞書の「つごもりの日」を晦日頃、三月下旬の意に解しなれば成らない。(元永本ならば言葉通りに解すればいゝ)尤も晦日と云つても、月の最後の日ではなく、下旬の意に用ゐる事は、古い時代には、珍らしくない事であるから、流布本を意味の上から見ても、誤りと云ふ事は出来ない。

【大意】 雨に濡れながら強いて藤を折りましたわい。今日が今年の春の最後の日だと思ひますから。——春の藤を君に上げ度いと思つて。

古今和歌集卷第三

夏歌

題 不知

讀人 不知

古今和歌集選釋

135 わが宿の池のふちなみ咲きにけり山ほととぎすいつか来なかむ
この歌、或人のいはく、柿本人丸がなり

【語釋】 ○ふちなみ 藤の花の事。藤の花房は波の様に風に靡びく所から藤波と云つたのであらう。(池の縁語で淵波に藤波をかけたと解いてゐる書もあるが、さうまでしなくてもいゝ) ○咲きにけり 「に」は過去の助動詞。すつかり咲いた。満開したの意。 ○山ほととぎす ほととぎすは主に山に居るから、山ほととぎすと云つたので、單に時鳥と云ふのと同じ。(山の時鳥と云ふ意味ではない)。字は、時鳥、子規、郭公、杜宇、杜鵑、不如歸なども書く、皆ほととぎすの事。
【大意】 我が宿の池の汀の藤がすつかり咲き揃つた。さて(藤の咲く頃には何時も来る)時鳥は、何時来て啼くであらうか。(早く来て啼いてくれ、ばい、のに)——(或人の云く。この歌は人麿の歌である)。

139 さつき待つはなたちばなの香をかげば昔の人のそでの香ぞする
よみびと知らず

【語釋】 ○さつき待つはなたちばな 花橘は五月に咲くものであるから、五月を待つて咲く花橘と云つて、「五月待つ」を花橘の枕詞の條に用ゐたのである。これと同じく時鳥は主に五月に鳴くから「さつき待つ山ほととぎす」と云ふ事がある。「花橘は橘の一種に特に花の勝れたものがあつて、其を云ふとも云ふ。
【大意】 五月を待つて咲く、あの花橘の香をかぐと、前に親しくしてゐたあの人(前に戀をした人)の袖の香がする

よ。なつかしい。

143 郭公の、はじめて啼きけるを聞きて
素性法師
ほととぎすはつ聲きけばあぢきなく主さだまらぬ戀せらるはた

【語釋】 ○はつ聲 初めて啼く聲。(其年に自分が初めて聞いた聲)。 ○あぢきなく あぢけなく。つまらなく。 ○主さだまらぬ戀。誰といふ相手のはつきりしない戀。漠然たる戀心。 ○はた 嘆息の語。
【大意】 時鳥の初聲を聞くと、誰が戀しいと云ふのでもないつまらなく、漠然たる戀心が、さしあたり感じられることである。

○
時鳥なが啼く里のあまたあれば猶うとまれぬおもものから

【語釋】 ○なが啼く里 汝が啼く里。 ○猶うとまれぬ やはり疎ましく思はれる。「うとむ」は親しまない。よそ／＼しくする。 ○思ふものから (慕しく)思ふのだけでも。
【大意】 時鳥よ、お前は氣が多くて、あちらこちら多くの里で啼くから、(自分の處だけで啼くのではないから)、やはり心から親しめない。お前を慕しくは思つて居るのだけれど。

おもひ出づるときはの山のほととぎすから紅のふりでてぞ啼く

【語釋】 ○おもひ出づるときはの山 思ひ出づる時に、常磐の山をかけたのである。常磐の山は、松杉等の常磐木のある山。

○から紅 からは唐錦、唐衣等の唐と同じく舶來の上等品の意で、紅の美稱に用ゐたもの。(唐の紅と解するには及ばぬ)。紅を染めるには、紅の汁に布帛を入れて、振動かして染めるものでこゝは次の「ふり出で」の序詞として「から紅」を用ゐたのである。○ふり出でゝぞなく 嘉祿本には「ふりいでゝなく」とある。聲をふり立てゝ啼くの意。「ふり」は前の「から紅」の縁で「振り」を云ひ、それを「ふり」でぞなくの接頭語「ふり」に掛けたるもの。○題しらず よみびと知らずの歌

【大意】 戀しい人と思ひ出す時、折も折とてあの常磐の山の時鳥が聲ふり立てゝ啼く事よ。(遠鏡には時鳥が戀をして啼く意に解いてゐるが、其は誤り)。

足引の山ほととぎすをりはへてたれかまさるを音をのみぞ啼く

【語釋】 ○足引の 山の枕詞。○をりはへて 居るのが長く續くこと。はへては延へて。○たれかまさると。誰がすぐれてゐるか云つて、思ふ心が、何方が(作者自身と時鳥と)深いかと競ふて。○ねをのみぞ 「ね」は音。「を」は感動詞。「のみ」はばかりで、「ぞ」と共に意味を強める語。

【大意】 (自分が物思ひに悩んで泣いてゐる時に)あの山時鳥が、いつまでも居て、自分と何方が思ひが深いか、自分ほど深いものはない。ひたすらに音を上げて啼くことよ。

8 154 ○ 夜やくらき道やまどへるほととぎす我宿をしも過ぎがてに啼く

【語釋】 ○夜やくらき やは疑問詞。夜が暗いからか。次の「道やまどへる」のやも同じ。○我宿をしも 「し」は意味を強める辭。「も」は感嘆詞。○過ぎがてに 「過ぎがて」は過ぎがたく。「に」はにしての意。

【大意】 夜が暗いからであらうか、或は道を迷つたのであらうか、時鳥がこの私の家の處を通り過ぎにくい様になくことよ。

10 ほととぎすの啼くを聞きて 五月雨の空もとどろにほととぎす何を憂しとて夜たゞ啼くらむ

【語釋】 ○空もとどろに 「とどろ」は音の響く貌。○憂し つらい。心のなやましいこと。○夜たゞ啼くらむ 「たゞ」はひたすらの意。

【大意】 さみだれの空も響く様に、夜をひたすら時鳥は啼くが、一體何がつらいと云つてあの様に啼くのだらう。

さぶらひに、酒たうべけるついでに、をのこどもをめして、
 ほととぎす待つ歌よめ、とおほせられける時に みつね
 ほととぎすこゑもきこえず山彦は外に啼くねをこたへやはせぬ

【語釋】 ○さぶらひ 宮中の侍候所を云ふ。酒宴等はこゝで行はれる。 ○たうべ 食への音便。 ○をのこども 男達。但しこゝは天皇から云はれるので、「をのこども」は殿上人を云ふ。 ○とおほせられける時に 流布本には「さありければ」とあつて敬語を用ゐてない。が「ほととぎす待つ歌よめ」とあるのは天皇の御言葉であるから、「とおほせられける時」と云ふが可からう。
 ○山彦 山に向つて大聲を出すと、反響して来る。この反響を山彦と云ふ。又山彦が答へると云ふ。 ○答へやはせぬ 何故答へをしないか、答へよ。

【大意】 宮中の侍所で酒宴があつた。その時主上が侍臣共を召されて、ほととぎすを待つ歌を詠めと仰せられたので、詠んで奉つた歌。(但し凡河内躬恒は殿上人ではない)。——時鳥の啼くのを待つて居るが一向聞けない。(一體山彦は他の音を反響するものであるが)山彦は他の處で啼く(であらう處の)時鳥の聲を反響してくれないか。反響させてくれ。

はやもすみける所に、時鳥の啼けるをきよて 忠 峯

むかしべや今もこひしきほととぎす故郷にのみ啼きて來つらむ

【語釋】 ○はやう 早くの音便。流布本には「はやく」とある。以前の意。 ○むかしべ 昔の意。「べ」は「いにしへ」「ゆく」「ゆべ」等のへと同じく、方向を示す接尾語。このへは時間上前後の方向を示してゐる。昔頃。以前。 ○來つらむ つは過去の助動詞。來たのであらうか。

【大意】 以前に住んで居た所(故郷)で時鳥が啼いたのを聞いて(詠んだ歌)。——(自分は故郷が戀ひしくて今再び來たのであるが)時鳥も昔の事が今でも戀ひしいのであらうか、それで故郷へばかり啼いて來たのであらう。

月おもしろかりける曉に 深養父

夏の夜はまだよひながら明ぬるを雲のいづくに月やどららむ

【語釋】 ○曉 明時の轉訛。夜明け方。 ○まだよひながら 「よひ」日が暮れて間もない頃。初夜。初更。「ながら」はそのまゝの意。 ○明ぬるを 「ぬる」は過去の助動詞「ぬ」の連體形。夜が明けてしまつたのに。 ○雲のいづくに 空の雲の何處に。
 【大意】 月が面白くて夜を明かしてしまつた夜の明け方に(詠んだ歌)。——夏の夜はまだ宵であるのに、そのまゝ夜が明けてしまつたが、(これでは月が西へ隠れる時間がないから、まだ中空にあるであらうか)空の雲の何處に月は宿るであらうか。

隣より、とこなつの花をこひにおこせたりければ、やらで 弟 恒
塵をだにするじと思ふ咲きしより妹と我ぬるとこなつのはな

【語釋】 ○とこなつ 撫子とおなし。○こひにおこせたりければ。「こひ」は乞ひ、もらひに人をよこしたから。○やらで 花はやらないで、——この歌を贈った。○詞書流布本には「隣より、とこなつの花を乞ひにおこせたりければ、をしてみてこの歌をよみてつかはしける」とある。○すゑじと思ふ 「すゑ」は居る置くこと。○妹を我ぬるとこなつのはな 妹は女を親しんで云ふ語であるがこゝは妻と云ふ程の意。「ぬる」は寝る。妻と自分が一處に寝る床とこなつのこととを掛けて、妹を愛する心持を、とこなつの花を愛情する心に通はしたるもの。

【大意】 隣から、とこなつの花をくれと云つて、人をよこしたので、——咲き初めてからは、塵さへもかゝらせまいと思つて大事にしてゐる床夏、乃ち妻と自分と一緒に寝る床といふ名の花ですから、差上げることは出来ませぬ。

古今和歌集卷第四

秋 上

秋立日よめる

敏行朝臣

秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

【語釋】 ○秋立つ日 立秋の日。○秋來ぬと 秋が來たさ。○さやかに あざやかに。明らかに。はつきりさ。○作者氏は藤原、流布本には藤原敏行朝臣とある。父は富士齋と云ふ。寛平、延喜の頃の人。位官は從四位上、右衛門督。
【大意】 秋が來たと、目には明らかに見えなけれど、風の音を聞くと昨日までとは變つて居て秋が來た事が驚き感ぜられる。

題 しらす

わがせこが衣の裾を吹きかへしうらめづらしきあきのはつかぜ

【語釋】 ○わがせこ 夫の意。「わが」は親しみを表はす語。「せ」は古くは女から男を呼ぶ時に用ゐる語で、必ずしも夫の意ではないが、夫の意に最も多く用ゐる。「こ」は親しみを表はす語。(男から女を呼ぶには、我が妹子の時、「わぎもこ」又は「いも」を用ゐる) ○うらめづらしき 「うら」は「うらさびし」「うらかなし」「うらはづかし」等のうらと同じく、心の意であるが、接頭的の軽い意味である。こゝは「裏」に通はせてゐる。

【大意】 「わがせこが衣の裾をふきかへし」は「うら」の序詞。秋の初風は、珍らしく思はれる。

あき風のふきにし日よりひさかたの天の川なみ立たぬ日はなし

【語釋】 ○あき風のふきにし日より 秋風は立秋の日以來吹くのであるが、特に風と云つたのは、下句の「天の川なみ」を云ふ爲である。 ○天の川なみ 天の川に立つ川浪。 ○流布本には下句「天の川原に立たぬ日はなし」とある。「なみ」と「原」とで一首の意味は全く違つて来る。 ○この歌は七夕を歌つたもので、七月七日の七夕には牽牛と織女とが會ふのである。 ○題しらずよみびと知らずの歌。

【大意】 秋風が吹き初めれば、牽牛と織女が互に待ちに待つた一年に一度の會に、あの七夕が目前に迫つて來たが、秋風の爲に天の川には浪が立たぬ日がない。これでは切角の七夕にも牽牛は川を渡る事が出来ないだらうに。秋風が牽牛、織女にとつて嬉しくもあり、悲しくもあるだらう事を推察して詠んだもの。流布本の「天の川原」にすると、作者は織女に代つて牽牛を待つ心を詠んだので、「秋風が吹き初めた日から、私は、今宵は川を渡つて來れるか來られるかと、天の川原へ出て立たぬ日はなし」と云ふ意。

【餘言】 七夕の歌は古今集に十首程ある。七夕祭は、もと支那の風俗で、荆楚歲事記に「天河之東有織女。天帝之子也。年々織杼勞役。織成天雲錦天衣。天帝憐其獨居。許嫁河西牽牛。即嫁後遂廢織。天帝怒令歸河東。但使其一年一度相會」とある。この牽牛と織女が一年に一度會ふ夜が七月七日の夜なのである。その夜に牽牛織女の二星を祭るのが所謂七夕祭である。この風俗が何時日本に傳つたかは明でないが、萬葉集に、既に七夕の歌があり、延喜式には七月七日織女祭とあるから、その傳來が古い事が知られる。平安朝には立派な年中行事の一つに成つてゐて、その行事の次第は、江家次第に詳しく出てゐる。南北朝時代の事は、建武年中行事に出てゐる。江

戸時代には五節句の一つとして上下ともに一般に行はれた。此夜には文人墨客は相會して、七夕を題材にして詩や歌を作つて、これを二星に奉つたのである。處が牽牛織女の二星が如何にして會ふかについては定説が無かつたので歌には色々な風に現はれてゐる。即ち男星の牽牛が天の川を船で渡るとして歌ひ、(天漢橋の音聞ゆ彦星と織女と今夕逢ふらしも——萬葉集。君が舟今榜き來らし天漢霧立ち渡るこの川の瀬に——同)。或は牽牛が天の河の淺瀬をさぐりながら歩いて渡るさし、(あまの川淺瀬しうなみたどりつゝわたりはてねば明けぞしにける——古今集)或は鳥鵲が翼を延して橋を造つて織女を渡すと云ふ。これをかさぎの橋と云ふ(天の河扇の風に霧はれてそらすみ渡るかさぎのはし——拾遺集)此の様に色々あるが、年に一度會ふと云ふ事は支那以來一定してゐる。七夕が年中行事の一つとなつて流行して以來、歌の格好な材料になつてしまつて、どの歌集にでも秋の部の初に七夕の歌があり、又戀の部には、はかない戀を二星に喩へた歌がある様になつた。猶序に支那の織女が、日本に傳來されてから、日本の神代傳説にある高天原で機を織つた棚機津女と混同せられて、織女を、たなばたひめと云ふ様になり、それから七夕を「たなばた」と云ふ様になつたのだと云はれる。織女の相手の牽牛は日本では彦星とも云つてゐる。彦は男の意で、男の星と云ふことである。七夕は云ふ迄もなく、七月七日の夜と云ふ事である。七夕祭を乞巧奠、又は織女祭と云ひ、或は星祭とも云ふ。

戀ひ戀ひてあふ夜は今夜あまの川露たちわたり明けずもあらなむ

【語釋】 ○戀ひ戀ひて 語を二つ重ねて意味を強めたもの。戀ひ焦れて。 ○明けずもあらなむ 「なむ」は希望の助動詞。夜が明けないでゐてくれ。 ○題しらず、よみびとしらずの歌。

【大意】 去年の七月八日から、戀ひ焦れ待ちこがれてゐた夜、その夜は今晚だ「七月七日夜」。どうか天の川の川霧が立ち渡つて、夜が明けずに居てほしいものだ。——（織女の心になつて歌つたもの）。

○
寛平御時、七月のゆふべに、さぶらう男ども、歌たてまつれと
仰事ありけるに人にかはりて
友 則

あまの川淺瀬しらなみたどりつゝわたりはてねば明けぞしにける

【語釋】 ○寛平御時 宇多天皇の御代。 ○さぶらふ男ども 御前に侍ふ男共。殿上人。 ○淺瀬しらなみたどりつゝ 淺瀬を知らないに、白瀬をかけてある。「たごる」は知らない道を迷ひつゝ行くこと。一ツで波の立つ所は大抵淺瀬であるから、川を渡る時には、波の立つてゐる所を探つて渡るのである。 ○わたりはてねば 「ねば」「ぬに」の意。當時の「ば」「に」「ど」等の意を持つてゐる。渡つてしまはないのに。

【大意】 宇多天皇の御代、七月七日の夜、御前に侍ふ男達（殿上人）に七夕の歌を奉れとの仰があつた時、或る殿上人に代つて詠んだ歌。——（牽牛は）天の川の淺瀬を知らないのに、白波の立つ淺瀬を、さぐり／＼してかち渡りするのにまだ渡つてしまはない中に、夜が明けてしまつた。

○
おなじ御時の后宮の歌合に

興 風

ちぎりけむ心ぞつらきたなばたの年にひとたび逢ふは逢ふかは

【語釋】 ○おなじ御時 寛平の御時の意。 ○ちぎりけむ。ちぎるは約束する。「けむ」は推量の助動詞。 ○つらき つれなしの意。情知らぬ。氣強い。 ○たなばたの 棚織姫の。 ○逢ふかは。「か」は疑問詞。「ば」は感嘆詞。この一句は反語になる。逢ふと云へようか、逢ふとは云へない。

【大意】 一年に唯一夜だけ會はうと約束したであらう處の、あの棚織姫の心は、情を知らぬ氣強い事だわい。一年に唯一度會ふのは、會ふたと云へるだらうか云へない。——年に一度位では會ふたのも會はぬのも同じ事だ。

○
題 し ら ず

素 性

今夜こむ人にはあはしたなばたの久しきほどにあえもこそすれ

【語釋】 ○今夜こむ人 「む」は未來の助動詞。今宵來るであらう人。 ○あえもこそすれ 流布本には「まぢもこそすれ」とある。「あえ」は有る意。棚織姫のあはれない契に似るかも知れない。

【大意】 今晚（七月七日の夜）來るだらう人には會ふまい。何故かと云へば、今晚會ふと、棚織姫が來年の七月七日

まで、長い間待たなければならぬ、あのはかない契りに似るかも知れないから。(流布本に依れば、下句「柵織姫の様に長い間待たねば成らぬ様になるかも知れないから」)

○ 題しらす
よみびとしらす

木の間より漏り来る月のかげ見れば心づくしの秋は来にけり

【語釋】 ○月のかげ 「かげ」は日、月、火等の光のこと。(陰影の意ではない)。○心づくし 心のありたけを用ゐる意から轉じて、心配するの意。

【大意】 木の間から漏れて来る月の光を見ると、秋が来た事がわかる。あの物思ひをする秋が。

○ 神鳴の壺にて人々あつまりて秋を惜しみけるついでに 躬 恒
かくばかりをしと思ふをいたづらにねて明すらむ人さへぞうき

【語釋】 ○神鳴の壺 宮中五舎の一つ、豊芳舎のこと。(他の四舎は、梨壺、藤壺、桐壺、梅壺)壺は壺庭の意であるが、こゝはその壺庭に臨んでゐる殿舎をさす。製芳舎は嘗つて落雷したので、以來雷の時には近衛の武士が伺候するので、此名がある。○秋を惜しむ 秋の夜ををしむの「夜」の脱落が。○をしと思ふを。流布本には「をしと思ふ夜を」とある。この方が正しいであ

らう。傳寫の際「夜」が脱落したと見える。○人さへぞうき 「さへ」はものが添加する意で、その上の意。澄み渡つた秋の月を見ないで寝てしまふ事は、無風流な「憂き」ことであるが、「さへ」はこゝでは強めていつたのであらう。

【大意】 自分等はこの様に夜が明けるのが惜しいと思ふて寝ずに眺めてゐる秋の月夜を、初から見ようともせず、無益に寝て夜を明かすであらう人はことにいとほしく思はれる。

○ 題しらす
よみびとしらす

白雲にはねうちかはし飛ぶかりのかげさへ見ゆるあきの夜の月

【語釋】 ○かげさへ見ゆる 「かげ」は姿の意。流布本には「かざさへ見ゆる」とある。列を作つて飛んで行く雁が何羽であるか、雁の數までが分るの意。

【大意】 白雲の浮んでゐる大空に羽を動かさしつゝ飛んで行く雁の姿まで(はつきりと)見える、秋の清く明るい月の光よ。

○ 人のもとにまかれける時、きりぎりすのなきけるを聞きて 藤原忠房
きりぎりすいたくな啼きそ秋の夜ながき思ひはわれぞまされる

【語釋】 ○人のもと 人の所。こゝは愛してゐる女の所の意であらう。○いたくな啼きそ 「な……そ」で勿れ。「いたく」は甚しく。甚しく啼くな。○秋の夜の長き思 秋の夜の長きと、長き思ひを掛けてある。○作者忠房は 廣敏の孫で、延喜延長の頃の人。雷の名人で、胡蝶樂を作つたと傳へられる。

【大意】 きりぎりすよそんなに泣くな。秋の長夜を啼き明かすお前には悲しい思があるのであらうが、お前よりも更に悲しい思ひを懐いてゐる自分は、お前の様には泣かずに居るではないか。

○
秋の夜の霧こそことに寒からし草むらごとにもむしのわづれば

【語釋】 ○寒からし 寒くあるらしい。○わづる 思ひわづらふ。なやむ。

【大意】 秋の夜の露は、殊に寒いらしい。露が光つてゐるどの草むらにも、虫があのようになやましがつて泣いてゐるから想像される。

○
君しのぶ草にやつるよふるさとはまつ虫が音ぞかなしかりける

【語釋】 ○君しのぶ草云々 君を思ひしのぶと云ふのに、しのぶ草をかけたもの。○やるよ 衰へて醜くなること。○まつ虫 人を待つと云ふのと、松虫をかけたもの。

【大意】 故郷は、君をしのぶといふ名の忍ぶ草が生ひ叢つて、荒れ果てよ侘びしいがその上あの人をまつ虫の聲が一入悲しくきこえる。

○
あきの野に人まつ虫の聲すなりわれかと行きていざとぶらはむ

【語釋】 ○人まつ虫 人を待つに、松虫をかけたもの。○とぶらはん 訪れよう。

【大意】 秋の野に人を待つ松虫の聲がする。松虫の處へ行つてお前の待つて居るのは、私かま云つて一つ訪れよう。

○
題 しらす
よみびとしらす

我門わがかどにいなおほせ鳥の啼くなべにけさ吹く風に雁は來にけり

【語釋】 ○いなおほせ鳥 この鳥は、卷一に出でた「もちどり」「よぶこどり」と共に三鳥と云ひ、有名な傳授がある（古今傳授）。がその傳授は有名なだけで、内容は一向信用出来ないものである事は、既に記した通りである。「いなおほせ鳥は鶴鶴の事だといふ。○啼くなべに なくともとの意。啼くにつれて。

【大意】 わが門に、いなおほせ鳥が啼くと共に、今朝なく秋風につれて雁が飛んで來た。

寛平の御時、后宮の歌合

菅根

あきかぜに聲をほにあげてゆく船は天の門渡る雁にぞありける

【語釋】 ○聲をほにあげて 聲を高く上げて、と云ふのに、帆に上げてを掛けてある。「ほ」秀で ひいでる。ぬきんするの意。

明かに、高く等の意。○くる舟 雁を舟と云ふのは少しく無理な様ではあるが、雁の脚を楫の音に聞きなす事もあり（木朝文粹に雁櫂來と云ふのがある）この歌では「ほにあげて」のほを帆にかけてあるから、その縁語で、雁を舟と云つたのである。○天

の門 門は水門、追門（瀬戸は宛字）等のこと同じで、せまくなつてゐる所の意。天を海に見なして、海では渡る可き所は門であるから、移して天の門と云つたので、意味は空と云ふ事。○此歌には縁語が澤山用ゐてある。秋風——帆にあげて——舟——

と——わたる。は縁語である。○作者菅根は藤原氏、文章博士で、侍從參議を兼任した人。延喜八年に五十四歳で薨。贈從三位。

【大意】 海の様な青い空を、秋風に乗つて、帆を上げて走る舟の様に、来るものは、大空を啼きながら渡る雁である。

あき萩につまこひをればあしびきの山したとよみ鹿のなくらむ

【語釋】 ○あき萩につまこひをれば 流布本第二句「うらぶれをれば」とある。「あき萩に」のにはにつけての意。秋萩のもの淋しい姿を見るにつけて、つまを戀ひしく思つて居れば。「つま」は夫にも妻にも用ゐるが、此處は妻の意。「うらびれ」は愁ふること。

○あしびきの 山の枕詞。語義については諸説一致して居ないが、山の裾が長く引いて居る意味と見るのが穩當であらう。○とよみ は響く意。

【大意】 秋萩のうらさびしい姿を見るにつけて、一人に妻が戀しく思はれて、それだけでもう堪へ難いのに、何故あの妻戀ふ鹿は、山の麓までも響く程に泣き悲しんで、この上更に自分に物思の種を増させるのだらう。

あき萩をしがらみふせてなく鹿の目には見えすて音のさやさ

【語釋】 ○しがらみふせて 「しがらみ」は擱む意。鹿が萩を足からんで踏みつけること。○音 聲の意。○見えすて 見えすして。

【大意】 秋萩を踏みしだいて、啼く鹿の、姿は見えないのに、啼く聲は、まあ何とはつきり聞える事だらう。

むかしあひ知りて侍りける人の、あきの野にあゐて、
ものがたりし侍りけるついでに。

躬恒

あきはぎのふる枝に咲けるはな見ればもとの心は忘れざりけり

【語釋】 ○あきの野にあひて「あひて」のぬは誤り。ひとしなればならぬ。秋の野で出遇つて。 ○ふる枝 舊枝、前年からある枝。(萩には木萩の一種がある。普通の萩は毎年幹が枯れるが、木萩は枯れない)。 ○もとの心 以前の心。

【大意】 以前に交際してゐた人(その後交際が絶えてゐた人)に、秋の野で出遇つて、話をした時に詠んだ歌——萩の舊枝に咲いて居る花を見ると、心ない萩でさへも、以前の心を忘れずに居るのがわかる。況んや人間の自分は昔の心持を忘れはしない。

家持

はぎの露玉にぬかむととめばけぬよし見む人はえだながら見よ
ある人のいはく、この歌はならの帝の御歌なりと

【語釋】 ○玉にぬかむと 玉として、糸に貫かうと。 ○とめばけぬ「とめば」は求むれば、手にとるとの意。「けぬ」は消えぬの約言。 ○よし まよと云ふ程の意。 ○えだながら 枝のまよで。 ○ある人のいはく云々 例の左註である。此の様な言ひ傳があつたと云ふ迄で、信用出来ない。 ○作者家持 大伴家持は聖武天皇から桓武天皇まで六朝に仕へた人で、歌は萬葉集に澤山出でゐる。但し此歌を家持の作として記して居るのは元永本だけで、筋切本も、流布本も、讀人しらずの中へ入れてゐる。又左註には「ならの帝」とあるのであるから、作者を家持とする事も出来ない。流布本等の如く、作者は分らぬとしておかねばならぬ。

【大意】 寶玉の様に見える美しい萩の露を、眞實の玉の様に糸に貫かうとして、手に取れば忽ち消えてしまつた。えいまよ(しやうがない)。萩の玉の様な露を賞翫しようとする人は、枝についてゐるまよに見てくれ。

はぎの花散るらむ小野の露霜に濡れてを行かむ夜は更けぬとも

【語釋】 ○散るらむ らむは推量の助動詞。散るであらう。 ○小野 野と云ふに同じ。 小は美稱。 ○露霜 露と霜と二種ではなく、氷りかゝつた露のこと。ツユジモと讀む。 ○濡れてを 「を」は感嘆詞。 ○夜は更けぬとも 「ぬ」は過去の助動詞。夜は更けてしまはうとも。流布本「さ夜はふくとも」とある。「さ」は接頭語。夜は更けても。

【大意】 萩の花が散るであらう、あの野(さぞ露霜が深い事であらう)の露霜に濡れて行かうよ、夜は更けてしまはうとも(かまはない)。——晩秋の夜更けに、野を横切つて人(多分愛する女)を訪はうとしての作。

朱雀院の女郎花合によみてたてまつれる 左大臣

をみなへしあきの野風にうちなびき心ひとつをたれによすらむ

【語釋】 ○女郎花合 歌合(前記)の一種で、女郎花を詠つた歌のみを出して、優劣を競ふのである。(菊合、撫子合、菖蒲合せ)

等も同類)。○うちなびき「うち」は接頭語。靡くこと。○心ひとつ「すじの誠の心。○作者 流布本には「左のおほい
まうちぎみ」とある。左大臣の事である。この左大臣は藤原時平。

【大意】 女郎花は秋の野風のまゝに、彼方此方へ吹き靡いてゐて、心が定まらぬ様であるが、本當の心は誰に寄せ
てゐるのだらう。(誰を本當に戀してゐるのだらう。女郎花に、女と云ふ意味を持たせて歌つたもの)

○

藤原定方朝臣

秋ならであふことかたきをみなへしあまの川原におひぬものゆゑ

24

【語釋】 ○秋ならで 秋でなくては。○あまの川原におひぬものゆゑ 天の川原に生えるものではないのに。「生ひぬ」のぬは
打消の助動詞。○作者 定方は三條右大臣と云つた人で、承平二年六十三歳で薨。贈従一位。

【大意】 何故、女郎花は秋でなくては會ふこゝが出来ないのだ。天の川原に生えるものでもないのに。——女郎花
を女にし、秋にのみ會ふ女、と云ふので、天の川の西岸にゐる棚機津女に譬へたのである。即ち天の川原に居る
女、織姫にならば、秋でなければ會へないのは分つてゐるが、天の川原に生えてゐるでもない女郎花に、何故秋
でなければ會へないのだらう。

○

躬 恒

妻こふる鹿ぞ鳴くなるをみなへしおのがすむ野の花に知らずや

【語釋】 ○おのが 自分が。鹿自身が。

【大意】 妻を戀ひ慕うて鹿が鳴いてゐるあの女郎花(女)が自分の住んでゐる野に咲いてゐる花を知らないのか——
女郎花を妻にすればいゝのに。

○

をみなへしなき名や立てし白露のぬれ衣をのみ着てわたるらむ

【語釋】 ○なき名や立てし 「や」は疑問詞。「し」は過去の助動詞。なき名を立てたのであらうか。○白露のぬれ衣 露に濡れ

た衣に、「ぬれ衣」をかけてある。ぬれ衣は冤罪、事實無根の汚名。○着てわたる 「わたる」は廣く、遍くの意であるが、こゝ
は時間的の意で、始終、常にの意。○この一首は流布本にはない。

【大意】 女郎花は事實無根の噂を立てたのであらうか。それで露にぬれた濡れ衣をいつでも着て居るのであらう。
——露にぬれた女郎花を、濡れ衣を着た女にかけて、作り上げた技巧の歌である。

○

ものへまかりけるみちなる人の家に、女郎花植ゑたるをみて

兼覽王

をみなへしうしろめたくも見ゆるかなあれたる宿に獨立てれば

【語釋】 ○ものへまかりける云々 或所へ行つた……。流布本には「物へまかりけるに、人の家に、女郎花うゑたりけるを見てよめる」とある。同じ意味。 ○うしろめたく 不安心に。心もとなく。 ○作者 兼覽王は惟喬親王の御子。文徳天皇の御孫。

【大意】 或所へゆく途中、或人の家に女郎花を植ゑてあるのを見て。——あの女郎花は不安心に思はれる。と云ふのは荒れた家に、後見する人もなく、一人で居るのだから。——女郎花を女と見たてゝ詠んだ歌。

○

おなじ御時宮中の歌合の歌

業平朝臣

なに人か来てぬぎかけし藤袴くるあきごとに野へをにほはす

【語釋】 ○おなじ御時 この歌の前の歌の詞書に、「寛平御時云々」とある。それを承けてゐる。寛平の御時は宇多天皇の御代。 ○なに人か 何人か、誰が。 ○来てぬぎかけし藤袴 藤袴は草花の名。秋淡紫色の小さい花が群をなして咲く。藤袴と云ふので、袴の意に通はせて歌に詠む。袴の縁で「ぬぎかけし」と云つたのである。 ○にほはす 薫らす。

【大意】 袴といふ名のある藤袴は、誰が来て脱ぎかけて行つたのだらう。毎年秋に野を薫らせる。

○

藤袴をよめる

素性

ぬし知らぬ香こそにほへれあきの野にたが脱ぎかけし藤袴ぞも

【語釋】 ○ぬし知らぬ 「たが脱ぎかけし藤袴」にかゝる。「ぬし」は藤袴をぬぎかけた主。 ○ぞも 「ぞ」は意味を強める辭。「も」は感嘆詞。

【大意】 主は知らない高い匂がしてゐる。秋の野に誰がぬぎかけて行つた藤袴なのか。

○

われのみやあはれとおもはむきりぎりす鳴く夕ぐれの大和撫子

素性

【語釋】 ○われのみや 「や」は感嘆詞。自分だけがまあ。 ○あはれ 身にしみて感ずること。こゝはあゝ美しいと感ずること。 ○夕ぐれ 流布本には「夕かげ」とある。夕かげは夕陽の蔭。 ○大和撫子 撫子には大和撫子と唐撫子とある。大和撫子は野生で紅梅色の花が咲く。

【大意】 自分だけが美しい事よと賞翫しよう。きりぐりが鳴いてゐる、静かな夕暮に匂ふてゐる美しいこの大和撫子を。——一人で見るには惜しいものだ。

○

仁和帝の親王におはしましけるまき、布留の瀧御覽せむとておはしましける
 とき、暹照が母の家にやどりたまひたりけるに、庭を秋の野につくれりけり。
 御ものがたりのついでにのみてたてまつりける 僧正暹照
 里はあれて人は古りにし宿なれや庭もまがきもあきの野らなる

【語釋】 ○仁和帝 光孝天皇。御諱時康。 ○布留の瀧 大和國山邊郡布留にある瀧。 ○暹照が母が家。暹照は良岑安世の子
 で桓武天皇の孫である。暹照の母は安世の室である。 ○庭を秋の野につくれり 庭を秋の野の景色に造つた。秋草等を植えて
 秋の野らしく造つたのである。 ○古りにし 「にしもし」も過去の助動詞。古くなつてしまつた。年をとつてしまつた。 ○宿
 なれや 「や」は感嘆詞。 ○まがき まは接頭語で美稱。垣の意。 ○野ら 「ら」は接尾語。野と同じ意。

【大意】 光孝天皇がまだ親王であらせられた時、大和の布留の瀧を御覽なさうとして、おいでになつたとき、暹
 照の母の家に御宿りなされたが、その時庭を秋の野の景色に造つた。「その時」親王と御物語のついでに詠んで奉つ
 た歌。——里は荒れ、住んでゐる人は年を取つてしまつた家であるからでございませうか、この家の庭も垣もすつ
 かりわびしい秋の野になつてをります。

古今和歌集卷第五

秋 下

惟貞親王の家の歌合の歌

康 秀

吹くからに野への草木の萎るればむべ山風をあらしこいふらむ

【語釋】 ○吹くからに 吹くにつけて、吹くに依つて。 ○野への 流布本には「秋の」とある。山と對してゐるので、全體の意
 味から云ふと、「野への」方がいい。 ○むべ うべの轉訛。肯定する意で、成る程、然り尤もの意。

【大意】 山風が吹くと、野の草木が傷み萎れるから、成る程それで山風を「あらし」と云ふのであらう。

【餘言】 この歌は百人一首に康秀の作として入つてゐる。但し第二句は流布本の通りに「秋の草木」とある。作者に
 ついて契沖は古今餘材抄に、古今集の「春上に、二條后まだ東宮のみやす所と申ける時、奉りける歌に、かしらの
 雪とよめり。いづれの年とはしらせれど、貞觀十一年以後、元慶元年以前の事なり。然るに菅萬の序を見るに、近
 衛の侍臣、後進の詞人に歌を奉らせ給ひたりと見ゆれば、康秀たとひ此歌合の時まで存命なりとも、みつわさすほど
 なるべければ、人數に預るべからず。六帖に此歌をば康秀が歌としたれども、次の歌をば朝康が歌とせり。しかれ
 ば朝康が歌なるにひかれて、此歌をも朝康を誤て康朝としけるか」と云つてゐる。次の歌云々とは、古今集に「吹
 くからに」の次に、「くさも木も色かはれどもわたつみの波の花にぞ秋なかりける」が康秀の作としてあるが、古今
 六帖には朝康の作となつてゐる事をさす。朝康は康秀の子で、氏は同じく文屋。年代の考證から見て契沖の説が穩

當な様である。

十月しぐれもいまだ降らなくにかねてうつらふかむなびの山

【語釋】 ○かみなつき 十月のこと。次の「しぐれ」にだけ係る語で、歌全體の意味には關係がない。時雨は秋冬の交に、降つたり晴れたりする小雨。○降らなくに 「なく」はぬと同意。降らないのに。○かねて 前以て。○うつろふ 移ると同意。紅葉すること。○神なびのもり 三室山——大和國平郡にあり——を神南備山と云ふ。此附近の森のこと。○よみびとしらずの歌。

【大意】 十月に降る時雨がまだ降らないのに——まだ十月に成らないから——神南備の森は、もう時雨が降つたかの如く、既に紅葉した事よ。

貞觀御時、綾綺殿御前に、梅木ありけるが、西方にさせりける枝の、もみちはじめたりけるを、うへにさぶらひけるをのこどももの、うたよむついでによめる。
藤原勝臣

【語釋】 ○綾綺殿 宮中の御殿の名。仁壽殿の東、宣陽殿の北にある。清和天皇貞觀の帝が此の御殿に歴々おはしました事が、三代實錄に見えてゐる。○おなじ枝をわきて云々 同じ梅の枝であるのに、取りわけて西の方の枝のみが。○作者勝臣は發生の子 元慶の頃、阿波權掾になつた人。

【大意】 清和天皇の御代、綾綺殿の御前に梅の木があつたが、西の方へさしてゐた枝が紅葉したのを題にして、殿上人等が歌を詠んだついでに自分も詠んだ歌。——同じ一本の幹から出てゐる枝であるのに、(他の枝は紅葉せず)に、西の方へ出た枝だけがとりわけて紅葉したのは、考へて見れば、なるほど西が秋のはじめであつたのだわい。
【餘言】 易では坤の卦を方角では西にし、時候では秋に配するので、其を梅の西の方の枝が紅葉したのに取り合せて、秋は西が始めだといふ事が事實的に證明せられてゐるのに興味を寄せて詠んだのである。が、術學的の傾向がみえる。

守山にて
貫之

【語釋】 ○守山にて 流布本には「もる山のほとりにてよめる」とある。守山は滋賀縣志賀郡にある。今はモリヤマと云ふ。○もる山 地名の守山と、白露も時雨も瀧る山とを掛けた。○下葉 枝の下の方の葉。○いろづきにけり 流布本には「うつろひにけり」とある。意味は同じ事。

【大意】 白露も時雨も甚しく漏るのでこの守山は、遂に下葉がすっかり紅葉してしまつた。守山の紅葉の梢のみでなく下葉までに及んだのを地名から解釋するやうに詠んだのである。

○ 秋の歌とてよめる
元 方

雨降れどつゆも洩らしを笠取のやまはいかでもみちそむらむ

【語釋】 ○つゆも洩らしを「つゆ」は雨の縁で露と云ふ。「じ」は打潰の助動詞。○笠取 笠取山は山城國宇治郡にある。その山の名に、笠を取る——笠を取る意をかけてある。○もみちそむらむ 流布本には「もみちそめけむ」とある。「らむ」は未來を推量する助動詞。「けむ」は過去を推量する助動詞。

【大意】 笠を取ると云ふ名の笠取山は、雨が降つても少しも濡れないであらうのに、どうして紅葉するのだらう。——紅葉は秋の雨に會つて生ずるものであるのに、地名から作り上げた技巧的歌である。

○ 神のやしらのあたりをまかりけるに、いがきのうちの紅葉を見て
貫 之
ちはやぶる神のいがきには葛も秋にはあへず色づきにけり

【語釋】 ○いがき 齋垣の意。神社の周圍に作る垣の事。○ちはやぶる 普通に神の枕詞として用ゐる。「ちはや」は「いち」

や」の略で、敏捷の意。「ぶる」はその姿體を表はす語。元は神の枕詞に用ゐたが、轉じて、或は「神」の語から、「金の御時」、「加茂の社」等と續ける様になつた。○あへず 堪へず、抵抗する。

【大意】 神社の齋垣に這ふ葛もは神聖な場所であるから、秋も這入れまいと思つたのに遂に這入つて来て、葛も對抗出来なくて、紅葉してしまつた。

○ 惟貞の親王の家の歌合に
忠 岑
あめ降れば笠取山のみち葉はゆき交ふひとのそでさへぞ照る

【語釋】 ○あめ降れば 雨が降ると笠をかむると云ふ意から、こゝは「あめ降れば」を「笠取山」の枕詞に用ゐたもの。○ゆき交ふ 行きちがふ。

【大意】 (雨降れば)笠取山の紅葉は、色が甚だ鮮かで、往來する人の袖さへも、紅葉の色に反映するよ。美しいことだ。

○ 秋歌にて讀める
坂 上 是 則
佐保山のはゝその色は薄けれどあきのふかくもなりにけるかな

【語釋】 ○は、そ 柞。葉は小楯に似て、薄く紅葉する木。 ○あきのふかくも 流布本には「秋は、ふかくも」とある。 ○作者
是則は、延長二年に従五位下になった人。卑官の人である。

【大意】 佐保山の柞の紅葉は色が薄いけれど、秋はもう深くなつてしまつた。「薄い」と「深い」を対照して用ゐて
ある。

人の家の前栽菊に結ひつけて植ゑける 在原業平

うゑし植ゑば秋なき時や咲かざらむ花こそ散らめ根さへかれめや

【語釋】 ○人の家の前栽云々 流布本には「人の、せむざいに、きくに結びつけてうゑける歌」とある。この方が意味がよく分
る。前栽は庭前の植込み。 ○うゑし植ゑば 植ゑたならばの意。「うゑを二つ重ねたのは意味を強くする爲。但しそれは恐ら
く「うつしうゑば」で、「移して植ゑたならば」とはあつたのであらう。 ○秋なき時や 「や」は感嘆詞。 ○かれめや 「め」
は未來の助動詞「む」の已然形。「や」は疑問詞。この一句は反語になる。枯れるだらうか枯れない。

【大意】 かく植ゑたならば、秋のない年には咲かないだらう（秋が来る限り、必ず咲くだらう）。たとひ今年の花は
枯れて散つても、根まで枯れると云ふ事があらうか、根まで枯れる事はないから毎年新しい芽を出して、秋毎に花
が咲くだらう。

惟貞親王の家の歌合に

きのともひら

露ながら折てかささむ菊の花老いせぬあきのひさしかるべく

【語釋】 ○露ながら 露のついてゐるまゝ。 ○かささむ かざすは、髪挿の意で、頭に挿すこと。巾子の根に挿す。 ○老い
せぬ秋いひさしかるべく 「老いせぬ」は老いぬ。年寄にならぬ。「秋」は菊の花につけて詠んだから秋と云つたので、意味は年と
云ふに同じ。「ひさしかるべく」は久しくある様に。老いずに年久しくある様にの意。支那の民間信仰（所謂老荘思想）では、菊の
露を飲むと長命になると云ふ。この思想は我國へは早く傳つてゐる。此の歌は此の思想を背景にしてゐる。 ○作者は流布本に
は「きのともひら」とある。

【大意】 露のついてゐるまゝにこの菊を折つて、頭へ挿さう。年久しく経ても年寄にならない様に。

おなじ御時、きくあはせに、洲澄に、ふきあげのはまをつくりて、菊の花を植ゑたりけるに添
へたりける歌 菅原朝臣

秋風の吹きあげに立てる白菊ははなかなあらぬかなみのよするか

【語釋】 ○おなじ御時 此歌の二首前の歌の詞書に「寛平御時」とあるそれを受ける。 ○きくあはせ 菊合。菊花の優劣を競ふ

一種の遊び。○すはま 洲のある濱邊の凹凸した所のこと 轉じて其の形を模したるもの。此處は轉じた方の意。今の鳥臺に似たもの。○ふきあげのはま 紀伊國、和歌浦の附近。「秋風の吹きあげ」は秋風の「吹き」と吹上の「ふき」とをかけてある。○花かあらぬか 花か、花にあらぬか。○作者菅原朝臣は菅原道眞の事。當時は位官を奪はれたまゝになつて居たから、姓に依つて單に朝臣と書いたのである。

【大意】 秋風の吹上げる吹上の濱に立つてゐる白菊は、非常に澤山なことであるが、あれは果して白菊であらうか、菊ではないのであらうか、事によると秋風に吹かれて濱へ寄せる白浪であらうか——と思はれる。調子が變つてゐておもしろい。

○

仙宮に、菊を分けて、人の入りたりけるを、繪に書けるを見て
濡れてほす山路の菊のつゆのまにいつか千年をわれは經にける

素 性

【語釋】 ○仙宮 仙人の宮。○濡れてほす 露に濡れて、着物を乾す。○つゆのま 菊の露と、「つゆの間」——極く少時の間——のつゆを掛けてある。○いつか いつの間にか。

【大意】 仙人の御殿へ人が入つた有様を繪に書いたのを見て詠んだ歌。——自分は山路の菊の露に濡れた衣を乾す眞の少時の間と思つたのに、何時の間にか、人間世界の千年を經てしまつた。(前の「路ながら折りてかささむ」の歌に註した如き思想から、仙人と菊の露を配合し、仙界の少時の間が、人界の千年に當る事を、自ら仙宮へ至つた

事にして詠んだもの。)

13

○

世の中はかなき事を思ひけるころ、菊の花を見て
あきの菊匂ふかぎりはかさしてむはなよりさきと知らぬわが身を

貫 之

【語釋】 ○世の中はかなき事 世の中のとよりにならぬ事。人生の無常な事。○匂ふかぎり 花の美しい間。「匂ふ」は色の美しい事。香のする事ではない。○かさしてむ かさして居らう。「てむ」は、過去の助動詞「つ」の終然形「て」に未來の助動詞「む」が添ふたので、過去から續いて來た現在の状態を、未來へまで續けようとする意。「かさしてむ」は單に將來かざさうと云ふだけではなく、現在もかさりして居るのである。○はなよりさきと知らぬわが身を 花が散るよりも前に死なないとは推定出來ない自分であるものを。

【大意】 菊の花が美しく咲いてゐる限りは、かさして樂しまう。花の散るよりも前に、死なないとも限らない自分なのだもの。

14

○

白菊を見て
心あてにをらばやをらむはつ霜のおきまどはせるしら菊のはな

躬 恒

【語釋】 ○心あてに 心に推し量つて。 ○をらばやをらむ 「をらばや」のやは感嘆詞。「をらむ」は折り得む。折つたならば折れるだらう。 ○おきまどはせる 初霜が置いて、まぎらはしくする。

【大意】 心に推し量つて折つたならば、大抵折れるであらう。初霜が眞白に置いて、區別が附かなくなつてゐるあの白菊の花を。誇張に失した歌である。

○ 仁和寺に菊めしけるに、添へてたてまつりける歌 平 定 文
秋をおきて時こそありけれ菊の花移るふからにいろのまされば

【語釋】 ○仁和寺 仁和寺の上皇の意。仁和寺は光孝天皇の御願で仁和年中に建てられた寺で、宇多法皇も此寺に御住みになつた。こゝは宇多法皇。寺は京都府葛野郡、京都から嵐山へ行く途中にある。 ○秋をおきて時こそありけれ 菊の花は秋以外にもいゝ時がある。秋以外でも美しい時がある。 ○移るふからに 「移るふ」は盛を過ぎること。「からに」に依つて、に従つて。

【大意】 菊の花は秋以外にもいゝ時がある。(冬になつて)花が盛を過ぎるに従つて、色がまさつて美しいから。

【餘言】 花が盛を過ぎて凋落しようとする時の爛熟し切つた美しさを詠つたものである。秋に咲く菊が、秋を過ぎても、なほ美しいと云ふ中に、位を譲つてしまはれた。猶盛んな法皇の御徳を讃仰する意を譬喩してゐる。

○ 題 し ら す
よみびとしらす

佐保山のはゝその紅葉ちりぬべ^めよるさへ見よと照らす月かげ

【語釋】 ○はゝそ 梓。葉は小槍に似て、薄く紅葉する。 ○ちりぬべみ 「ぬ」は過去の助動詞。「み」は形容詞的を用する語の語根に添ふて、「の故に」「に依つて」の意味をなす。散つてしまふべきに依つて、散つてしまひさうだから。 ○月かげ 月の光。

【大意】 佐保山の梓の紅葉は、散つてしまひさうだから、(晝は勿論)、夜でも見よと云つて、月光が照らして居るよ。單純な味が深い。

○ 題 し ら す
ならの帝御製
たつた川もみちみだれて流るめり渡らばにしきなかやたえなむ

【語釋】 ○たつた川 普通には大和國平群郡立田村を流れる川を云ふ。但し異説がある。 ○流るめり 「めり」は推量の助動詞。動詞の終止形に接続する。云々の様子だの意。流れる様だ。 ○渡らば 渡つたならば。――徒歩で渡るのである。 ○にしき中やたえなむ 「にしき」は紅葉の錦。錦の如く美しく川面に浮んでゐる紅葉。「中や」の「や」は疑問詞。錦の途中が切れるだらうか。 ○作者 流布本には「よみ人しらす」とし、左註に「この歌、ある人、ならのみかどの御歌也みなむ申す」とある。元永本には、この歌の次に、題しらす、讀人しらすとして、「たつた川もみちばなる神なびのみむろの山にしくれ降るらし」の歌があつて、左註に「此歌二首ならの帝御歌」とある。流布本には後の歌は「此歌不注人丸歌」と云ふ註がある。兎も角「たつた川

もみぢみだれて流るめり」の歌は、ならの帝の御製と云ふ云ひ傳があつたのである。然し序文の註に記した如く、「ならの帝」と云ふのが、何天皇か明でない。

【大意】 たつた川は紅葉が一面に亂れ散つて流れてゐる様子だ。若し川を渡つたらあの美しい紅葉の錦が、途中で切れるだらうか、切れるだらうよ、渡らずに見て居らう。

○ 秋風にあへで散りぬるもみぢばの行くへさだめぬわれぞ悲しき

【語釋】 ○あへで 「で」は打消の助動詞。堪へる事が出来なくて。流布本には「あへず」とある。「ず」の方が語調がいゝ。○作者 元永本は藤原關雄としてゐる。流布本は讀人しらすとしてゐる。關雄は藤原内膳の孫、眞夏の子。林泉を愛して東山に閉居したので、東山進士と名づけられた。學才があり、書を能くした人である。

【大意】 秋風に堪へられなくて、散つてしまつた紅葉の行方が定まらぬ様に、身の行末がどうなるか見當のつかぬ自分は悲しい事だ。哀痛の念が切で優れた作である。

題しらす

關雄

○ 霜のたて露のぬきこそもろからし山のしきの織ればかつ散る

【語釋】 ○霜のたて露のぬき 「たて」はたて糸。「ぬき」はぬき糸。横糸。○もろからし もろくあるらしい。もろいらしい。流布本には「よわからし」とある。この語は前の「霜のたて露のぬき」を受ける語であるから、技巧から云ふと「よわからし」の方がいゝ様である。○山のしき 紅葉のこと。○織ればかつ散る 「かつ」は、一方から、かたはらから。織るかたはしから散る。織つたかと思ふと散る。○此の歌では たて、—ぬき、—錦、—織る。皆縁語である。紅葉を錦に譬へるので、錦の縁で此等の語を用いたのである。紅葉は露や霜に會うて色を増すので、露と霜を、紅葉の錦の縁糸、緯糸に見えたのである。○作者 關雄は前の歌に註した。

【大意】 霜の緯糸、露の経糸はもろいらしい、だから山の紅葉の錦は、織り上る片はしから散るのだ。

○ 雲林院の木の陰にたゞすみて 遍照金剛
わび人の分きて立ちよるこのもとは頼む陰なくもみぢ散りけり

【語釋】 ○たゞすむ ぼんやり立ち止まる。○わび人 「わび」は「わぶ」の名詞形。困難する。思ひあまるの意。わび人は、世をわびた人。世の中の事が思ふ様にならず困惑した人。○分きて立ちよる とりわけて立ちよる。ことさらに立ち寄る。○このもと 木の下。○頼む陰 身の置所として頼りにする木の陰。

【大意】 世を侘びた人が、乃ち自分が身を寄せる陰として、ことさらに立ち寄るこの木の陰は、頼みにする陰もなく、既に紅葉は散つた。淋しいことだ。

○ 惟貞親王の家の歌合せに

業平

ちはやぶる神代も知らずたつた川からくれなるに水くゝるとは

【語釋】 ○ちはやぶる 前出。神の枕詞。 ○神代もしらず 不思議な事が多かった神代にも此の様な不思議な事があつたとは知らない。流布本には「神代もきかず」とある。神代にも此の様な事があつたとは聞かない。 ○からくれなる 「から」は韓の意で、韓の朝である事に「くれなる」と云ふと同じになつてしまつた。眞紅のこと。 ○水くゝる 水をくゝる事。「くゝる」はくゝり染めにすること。今のしぼり染の意。

【大意】 (ちはやぶる)神代にも此の様な不思議な事があつたとは知らない。(無かつただらう)。このたつた川の水をしぼり染めにすると云ふ不思議な事は。

○ 北山に紅葉をしむとて

貫之

見る人もなくて散りぬるおく山のもみちはよるの錦なりけり

【語釋】 ○よるの錦 暗夜に錦を着ても、その美しさが見えないから、一向價値がないと云ふ譬で、支那に故事がある。即ち前漢の朱買臣の傳に、會_フ 邑子_ニ 熊助_ガ 貞幸_ハ、應_ニ 買臣_ヲ、召_シ 見_セ 説_キ 春秋_ニ 言_フ 楚詞_ヲ。武帝_ノ 説_ク 之_ヲ 拜_シ 中大夫_ト。與_ニ 嚴助_ニ 俱_ニ 侍_中。久_シ 之_ヲ 拜_シ 會_者等とあるのに依つた語。

【大意】 北山で紅葉を惜しむ歌——見てくれる人もなくて空しく散つてしまふ奥山の紅葉は、たとへば暗夜の錦の様なもので、一向效のないものだ。惜しい事だ。故事をよく使つたのに、技倆がみえる。

○ かみなびの山を過ぎて、立田川を渡りけるに、もみちの流れければ 深養父
かみなびの山を過ぎゆく秋なればたつたのかはにぬさはたむくる

【語釋】 ○かみなび山 立田川。共に前出。大和國平群郡にある。 ○ぬさ 幣帛のこと。「みてぐら」とも「にぎて」とも云ふ。神にさし上げるもの。古くは絹を長いまゝで用ゐたが、平安朝になつてから、小さく切つた五色の絹を、神前にまきちらして奉つた。こゝは五色の「ぬさ」の意で、立田川に散る紅葉を「ぬさ」と見て歌つたのである。

【大意】 神南備山を越えてゆく秋だから、神南備山の神の御前の立田川に、紅葉のぬさを奉るのであるわい。(秋を擬人化して、立田川の方から神南備山を越えて過ぎ行くものと見、立田川に流れる紅葉を、秋が神に奉つたぬさと見たのである。)作者と秋を反對の行路を取つてゐたのである。その意味で、序詞を精しく書いたのであらう。

○ 志賀の山越にてよめる 列樹 春道 貫木

山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり

【語釋】 ○志賀の山越 京都から近江へ行く山越の道。京都の北、北白川から滋賀へ出る道。 ○山川 谷川のこと。 ○しがらみ 水の流を堰く爲に、杭を立て連ね、それに竹等を編みつけたもの。 ○ながれもあへぬ 流れることも出来ない。 ○作者 貫木はあて字。流布本には列樹とある。新名宿彌の子。延喜二十二年に壹岐守に任ぜられた人。但し出發しない先に卒した。 【大意】 山川に風がかけたしがらみは、流れる事も出来ずにとどほつて居る紅葉である。人のかけたのでないとすよゝころに技巧があ。

○
寛平御時、古歌たてまつれとおほせ事ありけるに、「たつた川もみちばながる」といふ和歌ども
よみて、その心をよめる
興 風
みやまより落ちくる水のいろ見てぞあきはかぎりと思ひ知りぬる

【語釋】 ○おほせ事ありけるに 流布本に「おほせられければ」とある。 ○たつた川もみちばながる 前記「たつた川もみちばながる神なびのみむろの山にしがれ降るらし」(立田川に散り落ちた紅葉が流れる。川上の(神なびの)みむろの山には、もう時雨が降つてゐるらしい)の歌。 ○その心をよめる その古歌と同じ趣向の歌を自作した。 ○水のいろ 紅葉が流れて紅になつてゐる水の色。 ○あきはかぎり 秋は終り。

【大意】 宇多天皇の御代に、天皇が古歌を奉れと仰せられたので、「たつた川もみちばながる神なびのみむろの山にしがれ降るらし」と云ふ古歌を奉り、その古歌と同じ趣向の歌を別に詠んだ——山から流れおちて来る水が、紅葉で紅になつて居るのを見て、秋はもう終りだ(み山の紅葉が散つてしまつて、山にも秋はなくなつた)と知つた。この歌で、當時の古と新との相違を知るべきである。

○
おなじ日
躬 恒
道知らばたづねも行かむもみち葉を幣とたむけて秋は去にけり

【語釋】 ○おなじ日 この歌の前に貫之の歌があつて「九月つごもりに云々」とある。 ○道知らば 秋が立ち去つた道を知つてゐたら。 ○幣 前出。旅行の時は、道中安全を祈る爲に、道路を守護する神に幣を奉るのが當時の習慣である。 【大意】 秋が去つて行つた道を知つてゐたら、跡をたづねて行かうものを。(残念な事よ)。散りゆく紅葉を、幣として神にさし上げて秋は、行方も知らせずに立ち去つてしまつた。

古今和歌集卷第六
冬
冬の歌とてよめる
宗 子

山里は冬ぞわびしさまさりけるひとめも草もかれぬと思へば

【語釋】 ○わびしさ 前記の如く困惑する貌であるが、こゝはつらさと云ふ程の意。流布本には「まびしさ」とある。○人めも草もかれぬ 人めもかれ、草もかれた。人めもかれ、は、人目も離る意。「かれぬ」は「離れぬ」と「枯れぬ」をかけてある。○作者宗子は源氏 光孝天皇の御子の是忠親王の子。宇千の代に源の氏を賜つた。天慶三年に卒。正四位下であつた。

【大意】 山里は冬がことさらに、つらさがまさる。それは人も訪れなくなり、草も枯れてしまつたと思ふと。「さかる」の懸詞に興味を寄せるのである。

題しらす

大空の月のひかりしさむければかけ見しみづぞまづこほりける

よみびとしらす

【語釋】 ○月のひかりし 「し」は意味を強ぬる辭。○さむければ 流布本には「きよければ」とある。○かけ 月かけ。月光のこと。

【大意】 大空の月の光が、大變寒いから、その寒い月光を見た水が、まづ第一に氷つたわい。

【餘言】 月光の冴え切つた冬の夜、水邊に立つた時の直感を詠つたもので、ことに優れてゐる。

いまよりは續ぎて降らなむわが家戸の薄おしなみ降れるしらす

【語釋】 ○續ぎて 引續きて。○降らなむ 「なむ」は希望の助動詞。降つてほしい。○家戸 家の戸である。家の傍。○おしなみ 「おし」は接頭語。「なみ」は感かして。○題しらす よみ人しらすの歌。

【大意】 今からは引き續いて降つてもらひ度いものだ。私の家の薄を押し離かして降つたこの白雪は。雪の重なるのを愛してかくの如く云ふのは後にはすくない。

降るゆきはかつも消ぬらし足引の山のたぎつ瀬落ちまさるなり

【語釋】 ○かつも 「かつ」は一方から、かたはしから。「も」は感嘆詞。かたはしからまあ。流布本には「かつぞ」とある。「ぞ」は意味を強める辭。○けぬらし 「け」は「きえ」の約音便。消えてしまふらしい。○足引の 前出。山の枕詞。○たぎつ瀬 奔騰して流れる所。○落ちまさる 落ちる水の量が増すこと。流布本には「おとまさるなり」とある。流れ落ちる水の音が増すこと。

【大意】 降る雪は、降るかたはしから消えてしまふらしいよ。(足引の)山の奔騰する流れが、降る雪と共に水量が増してゐる。冬の雪消は自然の事であるから、かやうに詠んでゐる。然し後には少ない。大低春のこととしてある。

冬の歌として讀める

ゆき降れば冬ごもりせる草も木も春に知られぬはなぞささける

貫之

【語釋】

○ゆき降れば「はなぞ咲きける」に係る。○冬ごもり もとの「春」の枕詞。冬の間、活動を中止して内に閉ぢこもつてゐること。○春にしられぬ「知られぬ」は受身の形、春を擬人化して、春に知られない。

【大意】

雪が降ると、冬籠りして枯れた様になつてゐる草も木も、春には知られない花が咲いた。

○

寛平の御時后宮の歌合に

興風

浦ちかく降りくる雪はしらなみの末のまつやま越すかとぞ見る

【語釋】

○浦 海や湖が陸地に入りこんだ所。入江の事。○末の松山 奥羽にあると云ふが明でない。但し現今岩手縣一戸町の北にある山を、末松山と云つては居るが、これが古來文學上有名な末松山であるか否か明でない。さて末の松山は、決して浪が越さないものと定まつてゐて、決して無い事の例に用ゐる。「河原の石が上つて星になる」と云ふ様な語と同じ意味に末の松山を浪が越えたと云ふ。但し男女間の愛を誓ふ時に用ゐた。この歌は古今集卷二十に「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山浪もこえなむ」君以外の人に私の愛を移す様な事があるならば、末の松山を浪が越すであらう。末の松山を浪の越さぬ限り自分の心は變らないの歌に依つて詠んでゐる。

の心は變らないの歌に依つて詠んでゐる。

【大意】

浦近く降つて来る雪は、岸に打ち寄せる白浪と同じ色に見えて、大空まで白浪が上る様で、あの決して浪の越す事のない末の松山を白波が越すのかと思はれる。古歌を反轉したところに技巧がある。

○

題しらす

同人

白雪の降りてつもれるやまざとは住む人さへもおもひ消ゆらむ

【語釋】

○同人 この歌の前に壬生忠岑の歌がある。この歌は忠岑の作。○住む人さへや 住む人までがさ。「や」は感嘆詞。○おもひ消ゆらむ「おもひ消ゆ」は心細くなつて消え入る。消えるは雲の縁語。「らむ」は推量の助動詞。

【大意】

白雪が降つて積つてゐる山里は、寂びしくて、住んでゐる人までが、心細さに消え入るであらう。縁語から作りあげたので厭味がある。

○

雪のふるをみて

躬恒

ゆき降りて人もかよはぬ道なれやあとはかなくも思ひ消ゆらむ

【語釋】

○あとはかなくも云々「あ」とは人の足跡。道を受ける語。「あとはかなくも」で、跡もななくの意。

古今和歌集選釋

【大意】 雪が降つて人も往來しない道であるからであらうか、まあ道が跡なく消えてゆく様に、冬籠りしてゐる私の心も、わびしさに、あとかたもなく、消えて行く様だ。

【餘言】 この歌上の句は客觀の景色を叙し、下の句は主觀の感懐を述べて、客觀を、主觀に歸結したのであるが、理に落ちて厭味のある歌である。

○

大和の國にまかりける時、雪の降りけるを見て 坂上 是則

朝ぼらけ在明の月と見るまでによしのゝやまに降れるしらゆき

【語釋】

○朝ぼらけ 夜明のほの明るくなつた頃。 ○在明の月 夜が明けても。まだ西へ隠れずにある月。十七八日以後の月

は早朝には見える。但しこゝの月は月かげ、月光の意。

○見るまで 「まで」は、ほど、ばかり。在明の月の光かと思ふ程。

○よしのゝやま 流布本には「吉野の里」とある。山の方がいゝやうである。

【大意】 朝、漸く夜が明ける頃、遙に吉野山を望むと、在明の月の光が残つて居るのかと思はれる程、ほのかに白く雪が積つてゐるわう。

○

題 不 知

よみびとしらず

消ぬが上にまたも降りしけ春霞立ちなばゆきをまれにこそ見ぬ

【語釋】

○消ぬが上に 雪の消えない上に。 ○降りしけ 「しけ」は「しく」の命令形。「しく」は頻るの意。降りしけは、降り頻

れ、益々降れ。 ○見ぬ 見るだらう。「ぬ」は未來の助動詞「む」の已然形。上に「こそ」があるから已然形で結んだのである。

○流布本 第五句みゆき「まれにこそみぬ」とある。この方が調子がいゝ。

【大意】 白雪よ、消えない上に、もつと益々降つてくれ、春霞が立つ春になつたならば、この美しい雪を稀に見るだけになるだらうから、後にあまりに云はない思想をよんである。

○

人 丸

梅の花それとも見えすひさかたのあまぎる雪のなべて降れよば

【語釋】

○ひさかたの 前出。こゝは「あま」の枕詞。 ○あまぎる 「あま」は天、空。「きる」はかすむこと。動詞である。(き

り、きれる等と活用する)。曇るの意に近い。 ○なべて。すつかり。一面に。 ○作者 流布本には、よみ人知らずの中に入

つて居て左註に「この歌はある人の曰く、かきのもとの人まろが歌也」とある。

【大意】 梅の花が梅の花とも見えない。空が曇つて梅花と同じ色の雪が一面に降つてゐるから。

○寛平御時、中宮の歌合に

ゆき降りて年の暮れゆく時にこそつゝにもみぢぬ松は見えけれ

よみびとしらす

【語釋】

○年の暮れゆく 流布本には「くれぬる」とある。「暮れゆく」は現在。「くれぬる」は現在完了。暮れてしまった。意味の上から云ふと「暮れゆく」がよい。○つゝに 流布本には「つひに」とある。假名遣はひが正しい。次の「もみぢぬ」に係る。結句「見え」にかゝるのではない。とう／＼。結局の意。○もみぢぬ 紅葉しない。「もみぢ」を動詞に用ゐた。○松は見えけれ 流布本には、「松も見えけれ」とある。「も」では力が弱い。意味から云ふと、「松は」の方がよい。外の木は凡て紅葉するから、松もその中に紅葉するだらうと待つて居たのに、とう／＼紅葉しなかつた緑の松が見ゆるわい。

【大意】

雪が降つて年が暮れてゆく時になつて、とう／＼紅葉しなかつたあの緑の松が、特に目につく事である。

【餘言】

論語の「歳寒知松柏之後凋」か、白代文集の「歳暮南山雪。松色鬱青々」等から作つたものであらう。

341

年のはてによめる

列樹

昨日といひ今日とくらしてあすか川流れて早きつきひなりけり

【語釋】

○あすか川 明日と飛鳥川とかけた。飛鳥川は大和國高市郡にある川で、流れが早くて、昨日は淵であつた所が、今日

は瀬になつたりするので、變化の速な事、無常な事等の例に引かれる川。「世の中はなにか常なるあすか川昨日の淵は今日の瀬となる」。——古今集卷十八。○作者列樹は前記貫木に同じ。

【大意】

昨日と云ひ今日と云つて、一日々々をそれ／＼に心を用ゐて暮して來たのであるが、さて年の終りになつて、ふり返つて見ると、何を爲て此の一年を送つたのだらう。月日のたつのは、(其時には早いとも思はぬが)ふりかへつて見ると、誠に早いものだ。

【餘言】

この歌は殆んど縁語ばかりで出來てゐる。



然しこの様な日常誰れでもが感ずる漠然とした氣持を、これだけのはつきり捕へて、少しのたゆみもない一首の歌に表はした手腕は、賞嘆に價するが、厭味は免れない。

歌奉れとおほせられけるに

貫之

ゆく年のをしくもあるかなます鏡みる影さへに暮れぬとおもへば

【語釋】

○ます鏡 眞澄鏡の略。「ま」は美稱。曇りのない鏡。(枕詞に用ゐる事がある。こゝは枕詞ではない)。○見る影さへに暮れぬと思へば 年が暮れたばかりでなく、鏡にうつして見る自分の影(姿)までが老いたと思ふと。「暮れぬ」は「年」と「影」と

両方を受ける。鏡にうつった影は「老いぬ」とか「衰へぬ」とか云ふ可き處であるが、「年」の縁で「暮れぬ」と云つてしまつたのである。

【大意】 暮れて行く年は、名残り惜しい事である。鏡にうつして見る自分の姿までが、年と共に老い衰へて行くと思ふと、暮れ行く年は誠に惜しい事である。

古今和歌集卷第七

新

○ 讀人しらす

わが君はちよにましませさゞれいしの巖となりて苔のむすまで

【語釋】 ○新 この巻の題である。流布本には「賀歌」とある。賀は算賀で、長壽を祝ふ意である。新も祝ふの意であるが、「賀歌」と云ふ方がいゝ様である。 ○ちよにましませ 千代に榮えてゐらつしやいませ。流布本には「千代に八千代に」とある。千代に八千代に榮えてましませの意。 ○さゞれ石 小石。 ○巖 大きな石。古い時代には、石が年月と共に少しづつ成長すると信じてゐた。但しその成長は、極めて少しづつで、人間の感覚では殆んど感知し得ないものとしてゐた。即ち「さゞれ石の巖となる」年月は、千代、八千代と云ふ様な数字では表現出来ない多くの年代——無限と云ふ語に近い數量的感じ——を要すると信じてゐたのである。 ○苔のむす 苔が生ずる。この一語で「さゞれ石の巖となりて」と云ふ抽象的な觀念が隨る現實性を帯びて

来る、全體に生氣を與へる一首。

【大意】 わが君は千代に榮えてゐらしやいませ。いや、小石が巖になつて、それに苔が生えるまで榮えてゐらつしやいませ。

【餘言】 元永本と流布本とでは第二句が四字違つてゐる。歌としては「千代にましませ」と云ふ方が感じがまとまつてゐる。

○ しほの山さしでの磯にすむ千鳥きみがみ代をば八千代とぞなく

【語釋】 ○しほの山 越中の志保山とも云ひ、又能登國にあるとも云ひ、或は甲斐國にあるとも云ふ。 ○さしでの磯 甲斐であるとか、越中であらうとか色々説がある。 ○八千代とぞなく 千鳥が「ちよ」と云つて鳴くの「や」をそへたのである。 ○讀人しらすの歌。

【大意】 しほの山、さしでの磯に住んでゐる千鳥は、君の御代が八千代まで榮える様にと云つて、やちよ／＼と鳴してゐる。

○ わが齡なほきみがやそぢにとりそへてとゞめおきてばおもひでにせよ

【語釋】 ○わが齡 自分が今後生るべき年。 ○きみがやそぢ 「やそぢ」の「ぢ」は年齢の數につける接尾語。一つ二つのつがらに轉訛して、そのちが連聲で濁音ぢに成つたもの。流布本には「君が八千代」とある。 ○こどもおきてば とどめておくから。 ○讀人しらずの歌。

【大意】 私が生きて居るべき年を、君に譲つて、八十までも生きて居られる君の長命に加へておくから、君が非常に長生をせられた後に、君のその長命は私が譲つたものである事を、思ひ出の種にして頂きたい。

○

遍照僧正に七十賀せさせたまふとて

仁和帝

かくしつゝにもかくにも長らへて君が八十ぢにあふよしもがな

【語釋】 ○遍照僧正に云々 流布本には詞書が「仁和の御時、僧正遍照に七十の賀たまひける時の御歌」とある。仁和帝は光孝天皇。 ○かくしつゝ 此の様にして、現在の如き状態で。 ○こにもかくにも長らへて どうでもかうでもして命長らへて。外の欲望は云はない。たゞ命だけ長らへて。 ○君が八十ぢにあふ 君は遍照を指す。「八十ぢ」が流布本には「やちよ」になつてゐる。此場合八千代では誇張が甚しすぎる。七十の賀に、もう十年後の八十の賀まで、と云はれるのは、頗る穩當であるから、意味から云ふと「八十ぢ」の方がいゝやうである。「八十ぢにあふ」は君の八十の賀に自分が會ふ。

【大意】 君の七十の賀に會へたのは誠しいが、現在の様な状態で、兎も角命長らへて、君の八十の賀に會ひ度いものだ。

○

仁和帝の、親王におはしましける時、おばの八十の御賀に、しろがねの御杖せさせたまひけるに、おばにかはりて

僧正遍照

千早ぶる神やきりけむつくからに千年のさかも越えぬべらなり

【語釋】 ○おば 流布本には「御をば」とある。終りの方の「おばにかはりて」も「御をば」とある。この「をば」は贈皇太后藤原深子——光孝天皇の御母、贈太政大臣藤原總繼の女——の御姉妹である。 ○しろがねの御杖せさせたまひける 「しろがね」は銀。「せきす」は爲すの敬語。銀の杖をお作りになつた。流布本には「しろがねを杖につくれりけるをみて」とある。 ○千早ぶる 神の枕詞。前出。 ○きりけむ 杖は竹や木を伐つて作るので、杖を「作る」のを「きる」と云ふ。「けむ」は推量の助動詞。 ○つくからに 杖をつくに依つて。 ○千年のさかも越えぬべらなり 「千年のさか」の坂は、道路が坂に依つて區切られる様に、年齢上、或る割す可き年代を坂に譬へて云ふ。四十の坂、五十の坂等。殊にこの歌では、杖をつくさ云ふ事があるのだから、その縁で「坂」と云つたのである。「べら」はべきの意。千年の坂も越えるとは、千年以上も生きるの意。

【大意】 光孝天皇がまだ親王で在らせられた頃、をば君の八十歳の御祝に、親王が銀の杖をお作りになつたので、杖を作つて、賜つたので、をばに代つて（御禮の心を詠んだ歌）——（御下賜になつた此の銀の杖は）神が作られたものであらうか（非常に結構なものだ）。この杖をつく事に依つて、千年の坂も越える事が出来さうです。

貞辰親王の、おばのよそぢの賀、大井にてしける日

きのこれをか

龜の尾のやまの岩ねをとめておつる瀧のしら玉千代のかずかも

【語釋】 ○貞辰親王 清和天皇の第七の皇子。 ○おば 流布本には「をば」とある。貞辰親王の御母は藤原基經の女佳珠子。

「をば」は佳珠子の御姉親子を指すのであらう。 ○よそぢの賀 四十歳の祝。 ○大井 山城國嵯峨の大堰の里。 ○龜の尾のやま 今龜山と云つて居る所。 ○岩ね 「ね」は接尾語。 ○とめて 求めて。尋ねて。 ○瀧のしら玉千代のかずかも 瀧の無数の飛沫は、君が榮えられるべき千代八千代の年の數であらう。飛沫の無数を、年の無限に比したるもの。 ○作者 これをか。傳記未詳。名は惟岳、又は維照と書く。氏は紀氏とも云ひ、菅原氏とも云ふ。

【大意】 龜の尾の山の岩を目ざして落ちてくる瀧の無数の飛沫は、君が千代にも榮えられる年の數であらう。一本調子なのがよい。

本康の親王の七十の賀の歌、うしろの屏風にかきける

貫之

春くれば宿にまづ咲く梅のはなきみがちとせのかざしとぞ見る

【語釋】 ○本康の親王 仁明天皇の皇子。一品式部卿。八條宮と申上げた方。 ●うしろの屏風にかきける 寶篋に親王の御座

の後に立てた屏風。流布本には「うしろの屏風によみてかきける」とある。(よみて)は作歌して。同じ意味 ○やど。自分の家○きみがちとせのかざし 「かざし」は髪挿の義。今の髪はこれから出来た語。

【大意】 春になると、家に第一に咲く梅の花を、君が千年まで榮えられて、頭におさしになる御簪と思つて見ます。

いにしへにありきあらずは知らねども千年のためし君に始めむ

素性

【語釋】 ○ありきあらず 「ありき、あざざりき」の意。有つたか無かつたか。 ○ためし 手本、例證の意。

【大意】 千年も生きた人が、昔あつたか無かつたかは、私は知らないけれども、——無かつたかも知れないけれど——まづ君に、實際に千年も生きる例を開いてもらひませう。

秋 ○

すみの江の松に秋風吹くからにこゑうちそうるおきつしらなみ

【語釋】 ○秋 この歌は、「内侍のかみの七十賀、子の右大將藤原朝臣の四十の賀し侍る時、四季の繪かきたるうしろの屏風の歌」と詞書があつて、春二首、夏一首、秋三首、冬一首ある中の秋の第一首である。「内侍のかみ」は贈太政大臣藤原高藤の女満子のこと。「右大將藤原朝臣」は大納言藤原定國で、高藤の三男で満子の兄になる。そこで詞書の「内侍のかみの七十賀、子の右大將云々」と云ふ事が説明し難い。流布本には「内侍のかみの、右大將藤原云々」とあつて、「七十賀 子の」の五字がない。流布本によれば、満子が定國の爲に賀筵を張つたと云ふだけで別に問題はない。○すみの江 攝津の名所。今の住吉。○松に 流布本には「松を」とある。「松を」と云ふと、秋風が松を吹いて、通り過ぎる感である。「松に」と云ふと、秋風の到達地點が松にある如き感じである。○おきつ白浪 沖の白浪。沖は、海で、岸から遠くはなれた所。○作者 元永本では凡河内躬恒。流布本には作者の名がない。

【大意】 すみの江の松に秋風が吹き當るにつけて、沖ではその松風の音に、聲をそへて白浪が立つてゐる。

東宮の生れたまへるに、参りてよめる

典侍因香

峯たかきかすがの山にいづる日はくもる時なくてはすべらなり

【語釋】 ○東宮 皇太子。こゝは醍醐天皇の第二皇子、保明親王をさす。(この皇太子は即位せられず病の爲に薨せられた)。御母は藤原基經の女孺子。○峰たかき 春日山の序詞。春日山は實際は高い山ではないが、こゝは、ほめて峰たかきと云つた

のである。その「たかき」に藤原氏の家柄の尊い事を寓してゐる。○かすがの山 奈良市の東北にある。こゝに藤原氏の祖先と稱する春日神社がある。こゝの春日の山は、藤原氏の意味を有たせてある。○日 皇太子の意を有たせてある。○べらなり 前出。べきなり。云々すべき管だ。大抵云々するだらう。○作者 前出。

【大意】 皇太子が誕生せられたので、参上して、お祝申上げた歌——峯のたかい春日山から出た太陽は、曇る時なく世を照らすであらう。(と云ふのが表面の意味で、裏は、)尊い家柄の藤原氏から出られたこの皇太子は、曇りなき御仁徳で天下の御政治を遊ばすだらう。譬喩頗る巧みである。調子も高い。

古今和歌集卷第八

離別

在原行平朝臣

立ちわかれないなばの山のみねにおふるまつとし聞かば今かへりこむ

【語釋】 ○離別 わかれ。この巻の名。○いなばの山 立ち別れて、いぬ(往く)と「いなばの山」をかけてある。○みねにおふる 峯に生えてゐる。○まつとし 松と待つを掛けてある。「し」は意味を強める辭。○今かへりこむ 今は、すぐにの意。「こむ」は未來の助動詞。歸つて来よう。○作者 行平は阿保親王の子で、業平の足。因幡の守であつたから、任地へ赴く時の作であらう。○この歌は掛け詞や縁語が多いので厭味に陥つてゐる。

【大意】 自分は今君に別れて、行つても(因幡國へ)、君が待つてゐると聞いたならば、すぐにかへつて来ませう。

(百人一首に入つてゐる)。

すがるなくあきの萩原朝立ちてたびゆくひとをいつとか待たむ

○ 読人しらす

【語釋】 ○すがる 蜂の一種。漢字では蠶蠶と書く。 ○萩原 萩の生えてゐる野原。

【大意】 すがるが鳴くこの淋びしい秋の萩原を、朝早く旅立たれるあなたを、何時歸つて來られると思つて待たうか。佗びしいことよ。眞率な感じがよく出てゐる。

○ 小野千古が、みちのくにの介にてまかりける時、母のよみける
たらちねの親のまもりとあひそふる心ばかりはせきなとよめそ

【語釋】 ○介 次官。(長官は守)。 ○たらちねの 親の枕詞。「たらち」は垂乳、「ね」は接尾語で、古くは母の枕詞に用ゐたのであるが、後に親の枕詞にも用ゐる様になつた。 ○親のまもりと 親がまもりとして。「まもり」は守護する者。 ○あひそふる。「あひ」は接頭語をへる。 ○せき 關。當時は名所に關所があつて、怪しい者は通行させなかつた。

【大意】 一處に行く事は許されなくても、親である自分が、お前の「まもり」として添へてやる自分の心だけは、關

は堰き止めないで、通してくれ。(身體は一處に行けなくても、心は常に影の如く、お前と一處に居るだらう)

○ こしへまかりける人に、よみてつかはしける
かへる山ありとはきけどはるがすみたちわかればこひしかるべし
○ 同人

【語釋】 ○こし 越。北陸のこと。越前、越中、越後等の總稱。 ○同人 この前の歌が紀利貞の作。この歌も同。利貞は貞守の子。元慶五年卒。従五位下。 ○かへる山 越前國敦賀郡にある。山の名に「返る」を掛けてある。 ○はるがすみ 「立ち」の枕詞。春阪は立つものであるから。

【大意】 かへる山があるを聞いてゐるから、やがて都へ御返になるだらうとは思ふけれども、別れて行かれたならば、戀しく思はれるだらう。(と云ふのに、行先の越の地名「かへる山」を読み込んだもの。)

○ 友だちの人の國へまかりけるとき
わかれてはほどを隔つとおもへばやかつ見ながらにかねて戀しき
○ 在原 滋 養

【語釋】 ○人の國 他國。 ○ほどを隔つ 間をへだてる。 ○かつ見ながらに 「見ながらかつ」の意。「かつ」は一方では、かたはらから。かうして會つてゐるのに、一方。 ○かねて 前以つて。 ○作者の傳前出。

【大意】 お別れすると、程が遠くなつて、長く會へないと思ふからであらうか。かうして現在會つて居りながら、いまから別れた後に起るべき戀しい感じがする。

みまさかのすけの門出しける所にて、わかるとて

讀人しらす

からごろもたつとは聞かじ白露の置きてし行ば消ぬべきものを

或人のいはく、この歌、つかさにまはりて、新しき女につきて、年経てすみける女をすて、たゞ明日なむ立つ、といひたりければ、よみてつかはしけるとなむ

【語釋】 ○みまさかのすけ云々 流布本には「題しらす」とある。○からごろも 「立つ」の枕詞。「からごろも」の「から」は、「からくれなる」「からにしき」の「から」と同じく、韓の意。ころも(衣)は裁つものであるから、「立つ」の枕詞になる。○聞かじ 聞くまい。——聞く必要もない。○白露の 流布本には「朝露の」とある。共に「おく」の枕詞。○消ぬべきものを 露の縁で消えると云つた。消えてしまふ筈なのだから。死んでしまふだらうから。○つかさたまはりて 「つかさ」は官。役目。役目を頂いて。役人になつて。○新しき女につきて 新しく出来た妻と一處になつて。○年経てすみける女 年來結婚生活をしてゐた女。平安朝には、男が女の所へ通つて、夫婦關係を結ぶのを「住む」と云つた。

【大意】 美作の國司の廳の介になつた男が、任地へ赴かうとして、門を出た所で、男と別れようとして、贈つた歌

——出發する等と云ふ事は聞きますまいよ。頼みにして居るあなたに、置き去りにせられれば、私は死んでしまふのでしやうから。愛せられて歸りを待つ身なら、何日出發するかと云ふ事が氣にかゝるけれど。——或人の云ふには、この歌は、ある男が役目を拜して任地へ赴く時、新しく出来た女に心を寄せて、(その女を伴ふて出發する事にし)、年來夫婦關係を結んで居た女を捨て、その女には、たゞ明日出發するとだけ云つた處、女が詠んで男にやつた歌であるといふ。さうすれば「行かば」と假定によむのがよい。「行は」では、「行けば」か、「行かば」か不明である。

○

常陸へまかりける時、藤原の公利によみて



遣はしける

籠

朝なけに見べき君としたのまねば思ひたちにしくさまくらなり

【語釋】 ○朝なけに云々 毎日。毎日合へる君とは思はれないから。「君とし」に相手の名の公利を隠してある。「たのまねば」頼みに思はないから。○思ひたち 「常陸」が入れてある。○くさまくら 普通は旅の枕詞で、あるが此處は「くさまくら」だけで旅の意。こゝに「内藏」がかくしてある。○作者 明でない。字の讀方も、契沖は「此名は音にいふべし」と云つてゐる。或は籠は内藏の寫誤であらうと云ふ。後説の方がよい。

【大意】 都に居たからとて、毎日會へる君とも思はれないから、(あきらめて)思ひ立つた常陸への今度の旅なので

紀の宗貞が、東へまかりける時、人の家に宿りて、曉に出で
たつとて、罷申しける、あるじの女のみみて出しける
えぞしらぬいまこゝろみよ命あらばわれや忘るゝ人やとはぬと

【語釋】 ○えぞしらぬ 「ぞ」は意味を強める辭。「えしらぬ」は知り得ぬ。分らないの意。 ○いまこゝろみよ 「いま」(今)はさ
あと云ふ程の意。さあ試験をして御覽なさい。下句「われや忘るる人やさはぬと」に係る。 ○命あらば 若し生きてゐたなら
ば。 ○人やとはぬ 人は相手の人、紀宗貞をさす。「とふ」は助れる事。こゝは音信すること。

【大意】 紀の宗貞が東國へ行つた時、(自分の家から出發せず)、人の家に宿つて、翌早朝に出發すると云つて、
人の家へ行つた時に、その家の女主人が詠んで宗貞の前へ出した歌——あなたと私と何方が深く愛して居るかは、
今は分らないが、さあこれから試験をして御覽なさい。私はもし生きて居たならば、私が先にあなたを忘れてしま
ふか、それとも、あなたが先に私を忘れて音信もせない様になるか、何方であるかを試して御覽なさい。(さうし
たら何方が深く愛してゐるか分るから。多分あなたは私を忘れる事せう。

友のあづまへまかる時

良岑秀岡

白雲のこなたかなたにたちわかれこゝろを幣とくやくよひかな

【語釋】 ○白雲の 「こなたかなたにたちわかれ」の「たち」の枕詞 ○こゝろを幣とくやく 心を幣の如く切りくやく。幣は神に
捧げるもので、古くは布帛を長いまゝで捧げたが、平安朝になつてから、五色の布帛を小さく切つたものを神前にまき散らして
捧げた。 ○旅かな 君の旅立ちよの意。

【大意】 彼方と此方に別れる(君は東國へ、私は都に)君の旅立に、私は心を幣の如く千々に碎く今宵である。作意
が著しいので、秀詠とも思はれない。

藤原の後蔭が、唐物の使に、長月の晦に罷りけ
るに、うへのをのこども、酒たうべけるついでに
よめる

藤原兼茂

もろともに啼きてとよめよきりぎりす秋の別は惜しくやはあらぬ

【語釋】 ○唐物の使 平安朝に、外國の商船が筑紫へ着いた時に、貿易品を検査する役人。 ○長月の晦 九月下旬。晦は月隠
の意で、月が隠れる頃。近世では「つごもり」と「みそか」(三十日)を同じ意に用ゐてゐるが、「つごもり」三十日の意ではない。二
十日後を「つごもり」と云ふ。 ○うへのをのこ 殿上人のこと。 ○酒たうべ 「たうべ」は賜ひ。 ○もろともに 自分等と共

に ○秋の別 去り行く秋に別れるのと、後蔭に別れるのをかけてある。○惜しくやはあらぬ 「惜しくあらぬやは」の意。「や」は疑問詞。「は」は感嘆詞。惜しくないだらうか、惜しい事だ。○作者兼茂は利基の三男で、兼輔の兄。延長二十三年に参謀になつた人。

【大意】 自分等と一處に泣いて、旅行を止めて呉れ、きりぎりすよ、去りゆく秋に別れるだけでさへも惜しいのに、親しい人と、時も時、この秋に、別れる事が惜しくないだらうか。惜しい事だ。

(附言) 多忙のため豫定通りに運ばなかつたことを遺憾に思ふが、之が續稿は「續國文學講座」の方でなるべく完璧を期したいと思ふ。

古今和歌集選釋 (續講)

卷第八つゞき

友 則

秋霧のともにたち出てわかれば晴れぬおもひにもえやわたらむ

【語釋】 ○秋霧のともに 秋霧とともに立ち出 ○晴れぬおもひ すつきりさしない心。物思ひに閉された心。「晴れぬ」は上の秋霧の縁語として用ゐた。○もえやわたらむ 思ひ焦れて月日を過す事だらう。「もえ」は、上の「おもひ」の「ひ」を火に掛け、その縁語で、燃えと云つたもの。

【大意】 秋霧と共に出發して別れて行つたならば、霧が立ち籠めて居る様に、悲しさに心が閉ぢこめられて、思ひ焦れてゐる事であらうよ。

源實みことのきねが筑紫の湯にまかりける時、山崎にてわかれ惜しみけるに

白しろ 女め

いのちだに心にかなふものならばなにかわかれの悲しからまし

【語釋】 ○源實 右近衛少將になつた人。 ○筑紫の湯に 流布本には「つくしへゆあみむとて」とある。「ゆあみむ」は湯浴を動詞に用ゐた語。 ○山崎 山城と攝津との境、淀川の北岸にある町。 ○心にかなふ 思ひのまゝになる。 ○作者「白女」は遊女である。

【大意】 命だけでも思ふ様になるものなら、今別れる事が何の悲しい事があらう、悲しくはないのだ、けれども命は自分の思ふ様には成らぬものだから、あなたが歸られるまで生きて居れるか否か分らない。今の別れが今生の別になるかも知れぬと思ふと、悲しさに堪へられない。

山崎よりかみなびの森まで、おくりに入々まかりて、かへりがてに、わかれ惜しみければ

實

人やりのみちならなくに大方はいきうしといひていざかへりなむ

【語釋】 ○かみなびの森 前に記した神南備森とは違つて、山崎より少しく西南にある森。 ○かへりがてに 「がて」は、難きの意で、降り難い様子にの意。 ○人やりのみち 人に遣られ道。他から強制されて行く道。 ○ならなくに ならぬに。 ○大方は 大抵は。 ○いきうし 「いき」は行き。「うし」は憂し。行くのがつらい。

【大意】 山崎から、かみなびの森まで人々が見送りに来て、人々が別れて降り難い様に、別れを惜しんだから。他人に強制せられて行く旅(嫌でも行かねばならぬ旅)と云ふのもないのだから、大抵は行くのがつらいからと云つて、さあ私も歸らうよ。

大江千古が、隱岐へまかりける時、馬のはなむけによめる

中納言兼輔

君がゆくこしの白山しらねどもゆきのまにまにあとはたづねむ

【語釋】 ○大江千古 參議大江音人の子。位は從四位上までなつた人。 ○隱岐 流布本には「こし」とある。こしは前記の如く北陸の事である。歌の意味から云ふと、「こし」でなければ成らない。誤寫であらう。 ○馬のはなむけ 餞別。 ○こしの白山 北陸の白山。白山は石川縣加賀國の東南部、飛騨との國境にある有名な高山。こゝは次の「しらねども」の床詞。 ○ゆきのまにまに。「ゆき」は「こしの白山の縁で雪と云ひ、それを「行き」に掛けてある。「まにまに」はまゝに。「行きのまにまに」は君の行つた通りの道を踏んだ。 ○伴者兼輔は、藤原氏、利基の子。延長、承平の頃の人。邸宅が鴨川の堤にあつたので、堤中納言と云はれた人。

【大意】 君が行く北陸の道は知らないけれど、君が雪踏み分けて行つた道をそのまま通つて、お訪ねしようよ。

幽仙

ことならば君とまるべく句はなむ歸すは花のうきにやはあらぬ

【語釋】 ○ことならば かくの如くならば。この様に咲いて居るのなら。 ○句はなむ 「なむ」は希望の助動詞。句ふてくれ。「句ふ」は美しく咲くこと。 ○花のうきにやはあらぬ。「や」は疑問詞。「は」は感嘆詞。此一句は反語になる。「花のうき」は花の

爲に憂き。花の爲に不面目なことではないか、不面目なことだ。

【大意】 花よ、この様に咲いてゐる事ならば、もう一と息。あの方が花の美しさに心引かれて止まる様に咲き匂ふてくれ。あの方をこのまゝ歸すのは、花よ、お前の爲に不面目な事ではないか。

○

かきくらししことは降らなむ春雨にぬれ衣着せてきみをとどめむ

【語釋】 ○かきくらし。「かき」は接頭語。「くらし」は暗らし。空を曇らせて。○ことは降らなむ。「こと」は前の歌の「ことならば」の「こと」に同じ。かくの如くならば。雨が降るのなら、もつとひどく降つてくれ。○ぬれ衣着せて。「ぬれ衣」は無實の罪。無實の罪を負はせて。○題不知 讀人しらすの歌。

【大意】 この様に春雨が降ることなら、一層のこと、空をかき曇らせてひどく降つてほしい。さうしたら、春雨に無實の責を負はせて、あなたの歸るのを止めようものを。

古今和歌集 卷第九

旅 心

もろこしへ、安部の仲丸を、物ならはしにつかはしたりけるを、あまた年を経て、かへりまうで來ざりければ、これからまた使まかりけるにたぐひて、まうで來な

むとて出てたちけるに、明州と云海のほとりにて、かの國人も、馬のはなむけし
たりけり、夜になりて、月いとあかく出たるを見て

仲 丸

天の原ふりさけみればかすがなる三笠のやまにいでしつきかも

【語釋】 ○旅心 流布本には羈旅歌とある。この一卷の題である。○もろこしへ云々 流布本には詞書は「もろこしにて月をみてよみける」とあつて、本書の長い詞書は左註になつてゐる。○これから 日本から。○たぐひて 具して。○天の原 大空。○ふりさけ 「ふり」は接頭語。「さけ」は離、放の意。遠くを見やる貌。○かすがなる 春日にある。春日は大和の春日野。○仲丸は 元正天皇の靈龜二年十六で留學生になつて唐へ渡つた。三十八年を経て唐の玄宗の大寶十二年（我が孝謙天皇の天平勝寶五年）遣唐大使藤原濟行と共に歸朝の途についたが、颶風に遇うて、安南に漂着し、再び唐へ歸つて、代宗の大曆五年、（我が光仁天皇の寶龜元年）に唐で卒した。○この歌は百人一首に出でゐる。

【大意】 安部仲麿を留學生として唐土へ遣はしたが、多くの年を経ても歸朝しなかつたので、日本から又遣唐使が行つたが、その遣唐使に伴つて歸朝しようとして出發したが、明州と云ふ海岸で、唐の人が送別の宴を張つた。夜になつて月が大變明かに出たのを見て、——大空を遠くふり仰ぐと、明かな月が出てゐるが、あの月は嘗つて故郷の春日の三笠山に出た月であるか懐しい事だ。

○

隱岐の國に流されける時、舟にのりていでたちけるに、

京なる人に、よみて遣しける

篋

和^わ田^たの原^{はら}八十^{やそ}島^{しま}かけて漕^こぎ出^でてぬと人^{ひと}には告^つげよあまのつり舟

【語釋】 ○舟にのりていでたちけるに 流布本には「舟にのりて出て立つ」とある。 ○和田の原 「和田」は音を借りたもの

「わた」は海。原は廣い意。天の原の「原」も同じ。 ○八十島かけて 八十島は多くの島。「かけて」は此方から向ふへかけて。向

けてと云ふ程の意。 ○あまのつり舟 釣をする海士の舟。 ○作者 小野篋は孝守の子。承和元年に遣唐副使に任ぜられたが

大使と争つた爲に、官位を停められて隠岐へ流された。後に許されて歸京した。 ○この歌 百人一首に入つて居る。

【大意】 隠岐へ流された時、舟に乗つて出發したが、(流布本によれば、出發しようとして)京に在る人に詠んで與へた歌。——はてしもない大海へ、多くの島々の方へ向つて漕ぎ出でたと、京の人に告げてくれ、海士の釣舟よ。

題しらす

讀人しらす

都出で、今日みかの原いづみ河かはかぜさむみころもかせ山

【語釋】 ○今日みかの原 今日で三日になると云ふのに、麩^むの原を掛けた。麩の原は山城國相樂郡にある。木津町の東一里程の

處。聖武天皇は一時皇居を此處に移された事がある。恭仁宮^{きんみや}これである。 ○いづみ河 みかの原を流れる川。——新古今戀一

に、中納言兼輔の歌で、「みかの原わきて流るゝいづみ川」と云ふのがある。 ○河風さむみ 河風が寒いから。流布本には「さ

むし」とある。 ○ころもかせ山 「衣を借せ」に鹿背山をかけた。鹿背山は麩の原西南、木津町の東北にある小さい山。 ○麩

の原、泉川、鹿背山いづれも相近い。三つの地名を詠み込んだ處に此の歌の技巧がある。

【大意】 都を出で、今日は三日目、麩の原へ来たが、泉河の川風が寒いから、衣を借してくれ、あの鹿背山よ。

東國に、友とする人、二人いざなわて行きけり。三河の國八橋と

いふところに到れりけるに、この川の邊に、かきつばたのおもしろ

く咲けるを見て、木のかげにありわて、かきつばたといふ五文字を、

句のかみにすゑて、旅の心をよまむとて

業平

から衣着つ、馴れにし妻しあればはるばる來ぬるたびをしぞ思ふ

【語釋】 ○いざなわて 流布本には「いざなひて」とある。ひの方が假名遣は正しい。が元永頃には、かやうに書いたのである。

誘ひて。 ○木のかげにありわて 木の蔭に馬から降りて居て。 ○から衣着つ、「馴れにし」の序詞。「から衣」は唐衣で、から

衣は「着つ」の枕詞。衣は着馴れるものであるから、「から衣着つ」を「馴れ」の序詞にしたのである。 ○妻しあれば。「し」

は意を強める辭。(妻は衣の褙に寄せた)。 ○たびをしぞ思ふ。元永本には「ことをしぞ思ふ」とあるのであるが、第五句の初か

「こ」では「かきつばたといふ五文字を句のかみにそへて」と云ふ訓書と一致しないから、今は流布本に従つて「たび」としてお

いた。 ○から衣、著、馴れる、つまは縁語。

【大意】 (都から)東國へ友人を一人二人誘ふて行つた。三河國八橋に云ふ處に到着したが、この川岸に、かきつばたが美しく咲いてゐるのを見て、木の蔭へ馬から降りて、「かきつばた」と云ふ五文字を、歌の各句の初に置いて、旅の心の歌を詠まふとして、詠んだ歌。——都には住みなれた妻がある故、はるばる來た旅の佗びしさ

がしみくゝ感ぜられる。

【餘言】 この歌、伊勢物語に出てゐる。即ち「昔、男ありけり。その男、身をやうなきものに思ひなして、京にはをらじ。すむべきところもとめむとて、往きけり。信濃國、淺間の嶽に煙のたつを見て云々。もとより友とする人、一人二人して諸共にいきけり。道知れる人もなくて惑ひ行きけり。三河國八橋といふ所に至りぬ。そこを八橋といふことは、水の蜘蛛くも手に流れわかれて、木八つ渡せるによりてなむ八橋とはいへる。その澤の木蔭におり居て、餉かたひけり。その澤に燕子花つばきいと面白く咲きたり。それを見て、ある人の曰く、「かきつばたといふ五文字を句の上うへにすゑて、旅の心を詠め」といひければ、よめる。

唐衣たういきつゝ馴れにしましあればはるゝ來ぬる旅をしぞ思ふ

と詠めりければ、みな人、餉の上に涙落してほとびにけり」さある。

○

おなじ人、武藏、下つ總の中にあるすみだ川のほとりにいたりて、都のかた戀ひしくおぼえければ、しばし、川のほとりにおりゐて、限りなく遠くも來にけるかな、と思ひわびてながめ居るに、渡守、はや舟に乗れ、はや日暮れぬといひければ、乗りて渡らむとするに、皆人もの悲しくて、京に思ふ人なきにしもあらずに、白き鳥のはし赤きが川の邊に遊びけるを、京には見えぬ鳥なれば、皆人見知らず、

彼れや何鳥と渡守に問へば、都鳥と云ふを聞きて、

なにしおはゞいざ言とはむ都鳥わがおもふ人はありやなしやと

【語釋】 ○おなじ人 前と同人。榮平。 ○ながめ居るに ぼんやりとして居ると。 ○はや日暮れぬ もう日が暮れてしまふ。流布本には「はや」が無い。 ○白き鳥のはし赤き 「はし」は嘴。流布本には「はし」と足と赤きとある。 ○なにしおはゞ

「し」は意味を強める辭 名を持つて居るのなら。 ○言とはむ ものを云はう。口を利かう。 ○ありやなしや 無事であるか否か。 ○作者 榮平。

【大意】 前の歌の作者と同じ人が、武藏と下總との間を流れる隅田川の岸に至つて、都の方が戀しく思つたので、少時、川岸に馬から下りて、甚だ遠くまでも來たものだわいと心怱びしくなつて、悲しんでゐると、渡守が、早く舟に乗れ、もう日が暮れてしまふ、と云つたので、舟に乗つて川を渡らうとするにつけて、一處に來た人が、皆、もの悲しい氣持になつて、京には愛する人が無いのにもないのに、此の様に遠く來てしまつて、と思つてゐると、身は白く嘴の赤い鳥が川邊に遊んでゐたのを見て、京都には居らない鳥だから、同行の人が誰も知らない。あれは何と云ふ鳥だと渡守に問ふと、都鳥と答へた。そこで。——都鳥と云ふ名を持つてゐるお前なら、さぞかし都の事も知つて居るだらうから、さあ言葉をかけよう、都に居る私の思ふ人は無事であるか否か。

【餘言】 この詞書並に歌は、伊勢物語に、前の「から衣」の歌の次に出てゐる。文は古今集のと殆んど同じである。

○

朱雀院の帝の、奈良へおはしましける時、御ともに

つかうまつりて、手向の山にて

菅原朝臣

このたびはぬさも取りあへず手向やまもみぢのにしき神のまにまに

【語釋】 ○朱雀院 宇多上皇。 ○手向山 奈良にある小山。奈良坂。 ○このたびは 此度は、此旅は。 ○ぬさも取りあへず 「ぬさ」は前出。「取りあへず」は、取ることも出来ず。こゝはとり揃へる間もなく。 ○まにまに まに。隨意。 ○作者は菅原道真。この歌は百人一首に入つてゐる。

【大意】 此度の旅は、急いだ爲に、ぬさを用意する事も出来ずに参りました。手向山の神よ、この山の錦の如き紅葉を、ぬさと思召して、御心のまゝに御納受下さい。

古今和歌集 卷第十

物名

○

鶯

鶯

敏行

心から花のしづくにそぼちつゝうくひずとのみとりのなくらむ

【語釋】 物名(モノノナ)。平安朝末期からは隠題歌と云つて居る。これに二種あつて、一つは、物の名を題にして、その物の名を歌の中へ詠み込み、且つそのものゝ心を詠むもの。右に掲げた「心から」の歌の如きは即ちこれである。第二は物の名を詠み

込む事は同じであるが、歌の内容が題とは關係の無いもの。——後に注釋するが、「かにはざくら」と云ふ題で、「かづけごもなみのなかにはざくら」で風ふくごとくにうきしづむ玉」の如きものである。 ○心から 自分の心から、自由意志で、勝手に。

○そぼつ 濡れる。 ○うくひず 憂く干す。つらい事には濡れたのが干せない。と云ふのに題の鶯を隠してある。

【大意】 自分勝手に花の露に濡れながら、人が濡らしたかの様に、あの鶯は、心憂くも濡れたのが干かぬと云つて、うらみ顔に、あの様に何故鳴くのだらう。

かにはざくら

貫之

かづけごもなみのなかにはざくられて風ふくごとくにうきしづむ玉

【語釋】 ○かにはざくら 榊櫻のこと。普通の櫻よりも遅く咲く。樹皮は白い。 ○かづけごも 潜けども。水を潜るけれども。 ○なみのなかにはざくら 浪の中には探し求める事が出来なくて、と云ふのに榊櫻を隠してある。 ○うきしづむ 玉 浮いたり沈んだりする玉。波の動搖に依つて生ずる水泡を玉と見たのである。

【大意】 波の中に見える美しい玉を求めようとして、水に潜るけれども、波の中には求めることが出来なくて、然も玉は風の吹く度に(波の起る度に)浮いたり沈んだりする事よ。と云ふのに榊櫻を隠してある。

○

たちばな

小野滋蔭

あしびきの山たちはなれゆく雲のやどりさだめぬよにこそありけれ

【語釋】 ○あしびきの 山の枕詞。 ○山たちはなれ 「たち」は接頭語。山を離れ。に、「たちばな」が隠してある。 ○やどり さだめぬ。宿をさだめぬ。定住する所のない。行く末の定まらない。

【大意】 (あしびき)の山を離れて、空を流れて行く雲の様に、人の世は、一向行く末の定まらないものである。

をかたまの木

友則

みよしの、吉野の瀧にうかびいづるあわを杜かまのきゆと見ゆらむ

【語釋】 ○をかたまの木 古今集の秘傳三木の中の一つであるが、柏の木事であらうと云ふ事になつてゐる。(補であらうと云ふ説もある) ○みよしの 「み」は美稱。接頭語。吉野のこと。「みよしの、よしの」と同じ意の語を二つ重ねたのは語調を整へる爲。 ○あわをかたまのきゆ云々。あわをか「か」は感嘆詞。水の泡をサ、玉が消えると見るであらうよ。と云ふのに「をかたまのき」を隠してある。

【大意】 吉野の瀧に浮び出でる水の泡をサ、あまり美しいから人は玉と見るであらうよ。と云ふのに「をかたまの木」を隠してある。

女メ郎ロウ花ハナ

友則

しら露を玉にぬくとやさまがにの花にも葉にもいとをみなへし

【語釋】 ○さまがに。蜘蛛の枕詞であるが、こゝは直に蜘蛛の意に用ゐてある。 ○いとをみなへし。糸を皆繰して、それに題の女郎花を隠してある。

【大意】 白露を、玉の様に糸に貫かうとしてまあ、あの蜘蛛が花にも葉にも皆糸を引掛けた事よ。と云ふのに「をみなへし」を隠してある。

朱雀院のをみなへしあはせの時に、をみなへしといふ五文字を句のかしらに置きてよめる

貫之

をぐらやまみねたちならしなく鹿のへにけむ秋をしる人ぞなき

【語釋】 ○をぐらやま 京都市外嵯峨の小倉山。 ○みねたちならし 「たち」は接頭語。峯をならし。「ならし」は馴しの意。鹿の屢々歩きまはる貌を形容した語で。 ○へにけむ 今までに經たであらう處の。

【大意】 小倉山の峯を踏み歩いて鳴くあの鹿が、幾度秋を送り迎へたのかを知る人はない。——各句の初に「をみなへし」の五文字を置いてある。この技巧は、前に記した業平の「かきつばた」(から衣云々)の歌と同じである。

二條后ニジョウゴの、まだみやすどころと申しける時、かめにけづり

古今和歌集選釋

花をさせるをよませたまひければ

又の身
木の身

康

秀

一五二

花の木にあらざらめどもさきにけりふりにしこのみなるよしもがな

【語釋】

○まだみやすところを申しはる時。后には成られないで、まだ御息所を申上げてゐた時。「みやすどころ」は貴人の妾。正妻に對す。こゝは女御と云ふ程の意。二條后は陽成天皇の御母。流布本には「二條后の、春宮のみやす所と申しける時云々」とある。「春宮のみやす所」は、皇太子をお生になつた女御の意。○かめにけり花を云々。「かめ」は壺。「けり花」は削り花。造花のこと。流布本には「のどにけり花云々」とある。「めど」は馬道とする説と著とする説とがあるが、著の方がいゝ。著は著萩であらう。その「めど」の壺に造花をつけて、壺にさすのである。「めど」は古今傳授は例の如く一向當にならない。○花の木にあらざらめども。花の咲くべき木では無さうだけれども。さ云ふのに「めど」を隠してある。○ふりにしこのみ。「ふりにしは年經てしまつた」、「このみ」は木の實さ此の身がかけてある。

【大意】

二條の後を、まだ御息所と申し上げて居た時、壺に造花をさしたのを、詠めと仰せられたから——花の咲く筈でない木に、花が咲いた。されば年經て老いてしまつた木にも實がなつてほしいもの。——だと云ふのに、老朽の自分も何とかして出世がし度いものだと言ふ意を含ませ、「めど」を隠してある。

か ち は き

よみ人知らず

うつせみのからはきごとにとゞむれど魂のゆくゑを見ぬぞ悲しき

【語釋】

○からはき 唐萩とも云ひ、唐萩とも云ひ、枯萩とも云ふ。枯萩がいゝと思ふ。枯萩と云ふ説もある。○うつせみの

からはきことに「うつせみ」。翠蟬。蟬のぬけがら。轉じて蟬のことをも云ふ。こゝは蟬のこと。(現身の意、又は命、世、人等の枕詞に用ゐる)「うつせみ」は別の語。蟬のからは木毎に留めてゐるけれど、と云ふのに「からはき」が隠してある。○魂こゝは本體、正身と云ふ程の意。「から」に對して云ふ語。

【大意】

蟬はぬけがらを木毎に留めてゐるけれど、正身は何處かへ飛んで行つたのか、行つた方向も分らないのは悲しいことだ。と云ふのに「からはき」が隠してある。

か は な ぐ さ

深養父

むばたまの夢になにかはなぐさまむうつゝにだにもおかぬ心を

【語釋】

○かはなぐさ 古今傳授の三木一草傳の一章とはこの「かはなぐさ」である。傳授では「かはな草は河骨なり」と云ふが、水苔の事である。○うばたまの 夢の枕詞。○夢になにかはなぐさまむ。夢くらゐでどうして慰められよう。慰められない、と云ふのに「かはなぐさ」が隠してある。○うつゝ。現實。

【大意】

君に逢ひ度いと思ふ心は、夢に見たくらゐでは、どうして慰められよう、慰められない。實際に逢うてさへも、満足し切らない切實な戀心であるのに。と云ふのに「かはなぐさ」が隠してある。

さゝ 松 枇杷 ばせを

紀乳母

いさゝめのときまつまにぞひは經ぬる心ばせをばひとに見えつゝ

古今和歌集選釋

一五三

【語釋】 ○いさよめ 一寸の間。かりそめに。それに「篋」が隠してある。 ○ときまつ 時を待つ、に「松」が隠してある。 ○ひは経ぬる 日は経てしまった、と云ふのに枇杷が隠してある。 ○心ばせをば云々 「心ばせ」は心の動き向ふこと。心の意。それに芭蕉はせが隠してある。 ○作者 紀乳母は源澄の妻で、名は全子。陽成天皇の乳母。

【大意】 一寸の間と逢ふ時を待つて居る間に、思ひの外に日が経つてしまつたよ。(すぐ逢へると思つたのに逢へなくて)。此方の心をすつかり見られてしまつた。と云ふのに、篋、松、枇杷、芭蕉が隠してある。

○ かみやがは 貫之

むばたまのわがくろかみや變るらむ鏡のかけに降れるしら雪

【語釋】 ○むばたまの 前出。こゝは、くろかみの「くろ」の枕詞。 ○くろかみやかはるらむ 黒髪が變つたのであらうか、と云ふのに「かみやかは」が隠してある。紙屋川は今の京都市の平野神社と北野神社の間に流れる川。こゝに紙屋かみや場があつたので此の名がある云ふ。 ○鏡のかけ。鏡に映つた影。

【大意】 自分の黒髪がまゝ變つたのだらうか、鏡に映つた影を見ると髪が眞白になつてゐる。——と云ふのに紙屋川が隠してある。

○ はをはじめ、るをはてにて、ながめをかけて、ときの歌よめと、人のいひければ、

遍照

はなのなかめにあくやとてわけゆけばこゝろぞともちりぬべらなる

【語釋】 ○はをはじめ るをはてにて。「はて」は終り。春を「は」と「る」に分け、一首の初に「は」を、終を「る」にして云々。 ○ながめをかけて 「ながめ」の三字を詠み込んで。「ながめ」は長雨の約。 ○ときの哥 季節の歌。 ○はなのながめにあくやとて 花の咲いて居る中を、目に見飽くかと思つて、と云ふのに、「ながめ」を隠し、「は」を最初に置いてある。 ○こゝろぞともちりぬべらなる。心が花と一處に散つてしまひさうだ。客観と主観が合一してしまつた、花が散ると心も一處に散つて行く様な感じがする。「る」を注文通り最後に置いてある。一首で櫻の季節の歌になつてゐる。

【大意】 花の咲いてゐる中を、十分に見たら目に見飽きるかと思つて、花の中を分けて行くと、見飽きないで、却つて心が花と一つになつてしまつて、花の散るのこゝろに心が散つてしまひさうだわい。

古今集 卷 第 上

元永三年七月廿四日

元永本が元永本と云はれる理由は、卷十の卷末にある右の奥書によるのである。「卷第上」の「第」は衍字である。古今集二十卷を上下に分け、初の十卷を卷上としたのである。

古今和歌集 卷 第 十一

戀 一

題 不 知

讀 人 不 知

ほととぎすなくや五月のあやめ草あやめもしらぬ戀もするかな

【語釋】 ○戀一 流布本には「戀歌一」とある。戀の歌は五卷ある、その第一である。歌集に「戀」の一類を立てたのは古今集が最初である。萬葉集では相聞と云ふ一類があるが、相聞歌は應答の歌で、親子、兄弟、朋友等の間の贈答の歌が入つて居る。勿論戀の歌は其大部分を占めて居るが、古今集の戀の部は、萬葉集の相聞歌の部分と獨立せしめたものである。○ほととぎすなくや「や」は感嘆詞。○あやめ草 萬葉のこと。上の「五月の」を承けて、下の「あやめもしらぬ」にかゝる語。(因に元水本にはこの句「郭公」とあるが、それでは工合が悪い。流布本に従つて、あやめ草として置く)。○あやめもしらぬ わけも分らぬすぢみちも立たない。「あやめ」は衣の文目あやめの意。

【大意】 「ほととぎすなくや五月のあやめ草」は次の「あやめもしらぬ」の「あやめ」にかゝる序詞で、歌の意は「あやめもしらぬ戀もするかな」の二句にある。自分ながら理解の出来ない、前後の分別も出来ない戀をまゐする事よ。

素性法師

音にのみきくの白露夜はおきてひるはおもひにあへず消ぬべし

【語釋】 ○音にのみきく 噂にだけ聞く、と云ふのに菊をかけ、菊の縁で「白露」と云ひ、露の縁で「夜はおきて」「ひるはおもひにあへず消ぬべし」と云つた。○白露夜はおきて 夜は菊に白露が置いてと。云ふのに夜は眠る事が出来なくて起きて居るの

意をかけてある。○ひるはおもひにあへず消ぬべし 「おもひ」は思ひ、その「思ひ」の「ひ」を「日」にかけてある。「あへず」は堪へきれず。夜、菊に置いた白露は晝になると、日光に堪へる事が出来なくて消えてしまふだらう、と云ふのに、自分は夜もすがら戀ひ明し、晝になると、戀ひさに堪へかねて、死んでしまひさうだの意をかけてある。

【大意】 噂にだけ聞いて居るあなたを、戀ひ戀うて、夜は夜もすがら、まどろむ事も出来ず、晝は戀ひさに堪へられなくて、命も絶えてしまひさうです。

夕さればくものはたてにものぞおもふ天つ空なる人こふる身は

【語釋】 夕されば 夕方になると。流布本には「ゆふぐれは」とある。調子は「夕されば」の方がいい。○くものはたてに。「はたて」は果の意。○人こふる身は 流布本には「人をこふとて」とある。「人をこふとて」と云ふと説明的な感がある。歌としては「人こふる身は」の方がいい。○説人しらずの歌。

【大意】 (晝はひねもす思ひつゞけて居るのであるが、殊に)夕方になると、あの空の雲の果を思つゝひたすらに戀ひ慕はれる。自分よりも遙に身分の高い人を戀ひしてゐる自分は、思ひをかなへる手段もなく、徒に思ひこがれてゐる。

つれもなき人をやねく白露のおくとはなげきぬとはしのばむ

【語釋】 ○つれもなき人 「も」は軽い感嘆詞。まああのつれない人。無情な人。○人をや 「や」は疑問詞で、以下の句は反語

になる。○白露の「おく」の枕詞。露が置くの「おく」を「起く」にかけたのである。○ぬ 寝るの終止形。(下二段に活用する語)。

○讀人しらずの歌
【大意】 まああの情知らぬ人を戀ひ慕うて、口惜しくも、起きては嘆き寝ては慕ひ思はうや。あんな無情な人は、もう決して思ひ出すまい。——思ふまいと云ふ口の下から思はずには居られない切な思ひが表はれてゐる。

○
人しれず思へばくるしくれなるの末つむ花のいろにいでなむ

【語釋】 ○くれなるの末つむ花 末つむ花は紅花のこと。紅花は古くは吳藍、紅藍、紅藍花等とも書き、クレノアキと讀む。春に種を蒔き、夏の中頃には三四尺に生長し、枝の末毎に紅黄の花が咲く、花は薔に似てゐる。この花の瓣を摘んで紅を製す。それで紅花と云ひ、又末の花を摘むので、末摘花とも云ふ。「くれなるの」末摘花の形容詞である。○讀人しらずの歌。

【大意】 自分一人の胸に秘めて、人を戀ひ慕うてゐると、苦しいから、いつそこの事、紅の末摘花が外に色を現はす様に、自分は表にあらはさう。

○
いでわれを人などがめそ大舟のゆたのたゆたに物おもふころを

【語釋】 ○いで 發端の語、まあ、さあ。○大舟の「ゆたのたゆた」の枕詞。○ゆたのたゆた ゆるやかに揺れる貌。○物おもふころを は頃なるものをの意か。流布本には「物思ふころぞ」とある。この方が確かにきこえる。○讀人しらずの歌。
【大意】 まあ自分をとがめないでくれ。自分は物思ひのために、どうしても心を定めることが出来なくて、ゆら

くしてゐるんだから。

○
よなよなに枕さだめむかたしらずいかにねし夜か夢に見えけむ

【語釋】 ○よなよな 毎夜々々、流布本には「よひよひ」とある。同じ意。○枕さだめむかたしらず。枕をどういふ風にして寝たら眠られるのか分らない。あちらを向いて寝ても此方を向いて寝ても眠られない。流布本には「枕さだむかたもなし」とある。○讀人しらずの歌。

【大意】 あの戀しい人を夢に見たのは、どういふ風にして寝たのであつたらう。もう一度夢に見度いと夜毎々々思ひ焦れるけれど、どういふ風に枕をしたらいいのかしら。

○
こひすれば我身はかげとなりにけりさりとして人にそはぬもの故

【語釋】 ○かげとなる はかなく瘦せ衰へて、細くなるのを、影となると云つた。地にうつる細長い影から云ふのである。○さりとして 然ありとして、影になつたからと云つて。○そはぬもの故。添はないのだから。影は人に添ふものであるが、自分は影になつたけれど、戀しい人には添はないのだから、離れてゐるのだから。○讀人しらずの歌。

【大意】 苦しい戀をしてゐると、自分は瘦せ衰へて影の様になつてしまつた。影は人の身に添ふものであるが、自分の身は影の様になつたからと云つて、戀しい人には添はないのだから、なさけない。

夏虫の身をいたづらになす事もひとつおもひによりてなりけり

【語釋】 ○夏虫 火取虫のこと。○身をいたづらになす。身をむだにする。役にも立たぬ事に一命を捨てる。○ひとつおもひ。同じ思ひ。思ひ「ひ」の火をかけてある。○讀人しらすの歌。

【大意】 夏虫が火を得やうとして火に飛び込んで一命を空しくする事も、自分があなたを戀ひ焦れる「思ひ」に前後の分別もなくなつて身をいたづらにする事も、同じ事だ。

【餘言】 心地觀經第六離世間品の偈に、「譬如飛蟻見火光、以愛レ火故、而競入不レ知ニ烟炷燒燃力、天ニ命火中ニ甘自焚、世間凡夫亦如是。貪ニ愛好色、而追求不レ知ニ色欲染著、人、還被ニ火燒ニ成ニ衆苦」とある。この譬喩を歌にしたものであらう。

ひとめもるわれかはあやな花薄なごかほにて、こひをせざらむ

【語釋】 ○ひとめもる 人目を憚る。躊躇して人の目付をうかぶ。○あやな あやなし、つまらぬの意。○花薄 「なごかほにて」の「ほ」の枕詞。○ほにて、表面に現はして。○こひをせざらむ 戀せず居らうか、戀をしよう。流布本には「戀ひすもあらむ」とある。同じ意味であるが、流布本の方が遙に意味が強い。第一句から調子を考へると、歌としては、結局を流布本に従つた方がいゝ。○讀人しらすの歌。

【大意】 人目を憚る様な自分だらうか、憚る必要もないのに、押しかくしてばかり居るのはつまらぬ。如何して表に現はして戀せず居らうか、憚る必要もないのだ。表に現はして戀しよう。

古今和歌集 卷第十二

戀 二

題 不 知

小野小町

思ひつゝぬればや人の見えつらむ夢としりせばさめざらましを

【語釋】 ○ぬればや 「ぬれ」は寝の已然形、「ば」は動詞、形容詞、助動詞等の已然形又は將然形を受ける助詞。「や」は感嘆詞。

【大意】 戀しい人の事を思ひながら、眠つたから、それであの人の夢を見たのであらうか。其が夢だと知つて居たら、醒めるのでは無かつたのに、うつかり目が醒めてしまつて、残念な事をした。

○ 下つ出雲寺に、人のわざしけるに、眞靜法師を導師にて侍りけるに、

いひけることばを歌によみて、小野小町がもとにつかはしける。

安部清行

つゝめども袖にたまらぬしら玉は人をみぬ目のなみだなりけり

【語釋】 ○下つ出雲寺 山城國愛宕郡出雲にあつた寺。○導師 法會等の時、一座の僧侶の首座の人で、儀式の先導をする人。但し此處では右の様な儀式上の專用語として解せず、單に導く人の意にし、漠然と、眞靜法師を招待して法會を營んだこと云ふ意に解しておいた方がいゝと思ふ。○人のわざ 故人の爲の法事。○いひけることば 眞靜法師の説教の言葉。○つゝめども云々 法華經の五百弟子品の無價寶珠——金錢では換算の出来ない、即ち値段を超越した立派な珠——の喩を土台にし

て誦んだ歌。無價寶珠の譬喩とは、「譬、如^ハ有^レ人、至^リ親友家、醉^テ酒而臥。是時親友、官事番^テ行、以^テ無價寶珠、擊^テ其衣裡、與^レ之而去。其人醉臥、都^テ不^レ覺知。起^キ已遊行、到^リ於他國。爲^ニ衣食^一故、勤力求索、甚^シ艱難^シ苦、少^ク有^ニ所得^一、便^チ以^テ爲^レ足、於^レ後親友、會^シ遇^テ見^レ之、作^ク如^キ是言^ハ、唯^ニ哉^一丈夫、何^ニ爲^ニ衣食^一、乃至^レ如^キ是^ノ。咸^シ昔^シ然^ル令^テ汝^ニ得^ニ安樂^一。五^ニ欲^一自^ラ恣^ニ、於^ニ某年月日^一、以^テ無價寶珠、擊^テ汝衣裡^ニ云々」とある。人ば皆貴は佛性を具へて居るけれど、其を自覺しない爲に迷ひ苦しんで居る事の譬喩である。○作者 清行は安仁の子、昌泰三年に年七十六で卒した人。位は從四位上。

【大意】 下の出雲寺で故人の法事を行った時に、眞靜法師を招待したが、その時眞靜法師の言つた言葉（衣裡の無價寶珠）を歌によんで小野小町の處へ送つた。（眞靜の説教には衣裡に「ん」であつても他人も本人も知らぬと説いたが、私の袖に落ちて内に止まつて居らずに表面へ流れ出る白玉を何かと思へば、あなたに會ふ事の出来ないわびしさの爲に出る涙であつた。

かへし

小町

おろかなる涙ぞ袖にたまはなす我はせきあへずたぎつせなければ

【語釋】 ○かへし 前の安部清行への返歌。 ○おろかなる おろそかな。淺い心。 ○せきあへず 堰き止められない。 ○たぎつせ 「たぎつ」は沸きあがる。逆巻く。「せ」は瀬。水が淺くて流れの早い所。「たぎつせ」で奔流の意。

【大意】 あなたの思ひが淺いから、涙が袖に玉をなすのです。私の涙は、堰き止めようとしても堰き止められない。逆巻いて流れる早瀬の様に流れるのですから。——私の思は、あなたとは比較にならない程深い。（清行が衣裡の無價寶珠から「人を見ぬめのなみだなりけり」と、恨みがましく云つたのに對して、その涙は「おろかなる涙」と眞正面から攻撃したのである。）

住吉の岸によるなみよるさへやゆめのかよひぢひとめよくらむ

【語釋】 ○住吉の岸によるなみ この二句は第三句「よるさへや」の「よる」の序詞。「よる」は夜。「岸によるなみよるさへや」と同音の語を重ねて行つたのである。「住吉の」は流布本には「住の江の」とある。その方が語は古い。いづれも今の攝津の住吉。○ゆめのよひぢ。夢路と云つても同じ。夢に見ること。○よく 避ける。○作者。藤原敏行。この歌の前に、「こひわびてうちぬる中にゆき通ふ夢のたぢはうつ、ならなむ」と云ふのがあつて、「寛平御時后宮歌合歌」と詞書がある。○この歌百人一首に入つてゐる。但し初句は「住の江の」。

【大意】 （晝、現實に、思ふ人の所へ行くのなら、人目を避けるのも道理だけれど、）何故、夜、夢で思ふ人に會ふのにまで人目を憚るのだらう。さてもつらい事かな。

しぬる命生きもやすると心みに玉の緒ばかりあはむといはなむ

【語釋】 ○いきもやすると 生きるかもしれないと。○心み。試み。○玉の緒ばかり ほんの少しの間だけ。○いはなむ 「なむ」は願望の助動詞。○作者 藤原興風。

【大意】 焦れ死に死ぬこの命が、ひよつとすると生き延びるかも知れないから、試みに、ほんの少しの間だけ、一

と目だけ) 會はうと云つてほしい。

深養父

こひ死なばたが名はたゞじ世の中に常なきものといひはなすとも

【語釋】 ○たが名はたゞし「たが」誰の。誰の名が立つのではない。あなたの無情といふ名が立つ。○常なきもの 無常なもの。人間の命は、いつ死ぬか分らない。老少不定だ。

【大意】 私が戀ひ焦れて、焦れ死に死んだならば、誰の名が立つのではない、あなたの無情云ふ評判が立つのです。あなたは人の壽命は無常なもので、若くて死んでも敢て不思議はないと云ひはなされても、私が死ねばやはりあなたの無情と云ふ噂は立つのですよ。

友則

ことにいでゝいはぬ許ぞみなせ川したにかよひてこひしきものを

【語釋】 ○ことにいでゝ 言葉に出して。○みなせ川 「したにかよひて」の枕詞。「みなせ川」と云ふのは、必ずしも、攝津國鳥下郡の水無瀬川の意に解しなくてもいい。表面に水がなくて、砂の下を水が流れてゐるのが「みなせ川」である。依つて「下にかよふ」の枕詞にしたのである。○下にかよひて 心の中で。(表に現はれずに)

【大意】 戀しいと言葉に出して云はないだけで、心の中では戀しいと思つてゐるのに。——それを、言葉に現はさ

ないからと云つて、戀してゐないかの如く君は思つてゐる。

忠岑

命にもまさりてをしくあるものはみはてぬ夢のさむるなりけり

【語釋】 ○みはてぬ夢 すっかり見てしまはない夢——惜しい所で、途中で醒めてしまふ夢。

【大意】 命よりも惜しいと思はれるのは、戀しい人と會つてゐる夢が、途中で醒めてしまふ事である。

躬恆

わが戀はゆくへもしらずはてもなしあふを限とおもふばかりぞ

【語釋】 ○ゆくへもしらず 「ゆくへ」は行方。何方に進む可きか方向も分らない。○はてもなし 際限もない。最後の目的と云ふものもない。○あふを限とおもふ 會ふ事を、唯一の最後の願としてゐる。

【大意】 自分の戀は、方向もわからず、終もない。唯會ふと云ふこと、それだけを願としてゐるのみである。——生命を提した絶望的な狂的な戀を詠んでゐる。

深養父

今ははやこひ死なましをあひ見むとたのめしことぞ命なりける

【語釋】 ○あひ見む。「あひ」は接頭語。「見る」は逢ふの意。 ○たのめし たのませた。自分にたよりに思はせた。 ○こと言葉。

【大意】 もはや焦れ死に死んでしまふであらうものを、かうして生きて居るのは、(前に)あの人から會はうと云つて、自分を頼みに思はせた、あの言葉の故に生き永らへてゐるのだつた。

古今和歌集卷第十六

哀 傷

妹の身まかりけるによめる

小野篁朝臣

なく涙あめと降らなむわたりがは水まさりなばかへりくるがに

【語釋】 ○哀傷。流布本には「哀傷歌」とある。人の死を悲しみ傷む歌である。萬葉集の挽歌と云ふのに當る。 ○身まかりけるに。流布本には「身まかりける時によめる」とある。「身まかる」は死ぬこと。 ○雨と降らなむ。雨の如く降つてほしい。「なむ」は希望を現はす助動詞。 ○わたりがは。所謂三途の河のこと。三途は地獄、餓鬼、畜生の三つの悪い世界のこと、生前に悪を積むと死後此等の惡道へ生れて、容易に悟りの世界に生れ得ない事を、河に溺れて、彼岸に到り難いのに譬へたのである(金光明經等)が、譬喩の方が一般に流布して、三途の河と云ふ河が死んだ後に行く道に實際あつて、死者はこの河を渡るものゝ如くに信ぜられてゐる。こゝの「わたり河」も本來の意義では無く、實在する河として詠んでゐる。——一體に佛教では願る巧な

譬喩を用ゐるが、餘りに巧である爲に、一般人は其が譬喩である事を忘れてしまつてゐる場合が多い、死出の山、六道の辻、無常の風等皆單なる譬喩であるが、實在のものゝ如く取扱はれてゐる場合が多い。——○かへりくるがに。歸つて来る様に。「がに」は助辭で、「爲に」「緣に」の意。 ○作者の傳前出。(一四四)

【大意】 悲しみ泣く涙が雨の様に降つてほしい。(雨が降つたら、わたり河も水が増すであらう。)あのわたり河の水が増したならば、逝つた妹は河を渡ることが出来なくて、再び此方へ歸つてくるであらうから。

堀川の大政大臣の、身まかりにける時、深草の山にをさめける後によみける

僧正遍照

うつせみはからを見つゝもなぐさめつ深草の山けぶりだに立て

【語釋】 ○堀川の大政大臣、藤原基經。 ○深草。今の京都市の南、深草村。 ○をさめける。「をさめ」は葬ること。流布本には「をさめてける」とある。「と」は過去の助動詞「つ」の連用形。 ○作者。元永本、清輔本には僧正遍照とあるが、流布本には「僧都勝延」とある。が此歌は遍照の集にはその作として出てゐる。 ○うつせみ。漢字では空蟬の字を宛てる。蟬の脱殻のこと。但し本來は顯身(ウツシミ)の意で、世に現にある身の意。こゝは蟬の脱殻の意。

【大意】 蟬は正身は脱け出てしまつても、脱殻が残つて居るから其を見て、せめてものなぐさめにした。が人は(基經卿は)その魂の去つた骸までも葬つてしまつたのだ。深草の山よ、せめて(火葬の)煙だけでも立てよ、卿の形見と思つて眺めようものを。

上野岑雄

ふかくさの山の櫻もこゝろあらば今年ばかりはすみぞめに咲け

【語釋】 ○山の櫻も。流布本には「野べのさくらし」とある。「し」は意味を強める辭。○すみぞめ。喪服の色。薄曇色。鼠色

【大意】 (この歌、前の歌と同じく、基經の薨去を悼んだもの。基經は寛平三月の正月に薨じた)。基經卿を葬つた深草山の櫻も、情を解するならば、今年だけは、平年の様な花やかな色でなく、喪服の色の鼠色に咲けよ。

姉の身まかりける時に讀める

瀬をせげ淵となりてもよどみけり別をとむるしがらみぞなき

【語釋】 ○瀬。川などで水が淺くて流れの比較的早い處。○せく、まへぎる、閉ぢふさいで通さぬ。○淵。水がよごんで深い處。○しがらみ。流を止める爲に、杖を打つて、横に竹などを編みつけたもの。○作者。壬生忠岑

【大意】 流れ去る川の水でも、柵で堰き止めれば、淵になつて澱むのであつたのに、死んで別れ行く、人を止める柵は無いのだ。

【餘言】 この歌忠岑の歌にも入つて居るが、歌集では詞書が、人と別れる時に詠んだとなつてゐる。別離を惜しんだ歌としても解釋出来る歌である。

紀のともりが身まかりにける時によめる

貫之

明日しらぬ我身とおもへど暮れぬまの今日は人こそかなしかりけれ

【語釋】 紀のともりの。友則は貫之と親類で、貫之等と共に古今集撰進の勅命を蒙つて、事に従つて居たのであるが、早く卒した。○明日しらぬ、明日は生きて居るか否か分らない。○暮れぬまの。今日と云ふ事を強く云ふ爲に用ゐた語。

【大意】 明日は死ぬかも知れない自分だとは思ふけど、今日、現在生きてゐる身には、死んで行つた人のことが悲しく思はれる。

【餘言】 河内の天野山金剛寺所藏の寶篋印陀羅尼經の下地に書かれた、嘉應二年と云ふ日附を有する今様の中に、次の一首がある。

昨日見し人今日はなし、今日見る人も明日はあらし。

明日とも知らぬ我なれど、今日は人こそ悲しけれ。

これは右の貫之の歌を今様に作りなほしたのである。貫之の歌は、歌として中々勝れたものである、殊に「暮れぬまの」の一句がよくきいて居るが、今様の方は、昨日、今日、明日と對照して、具體的に人生の無常を強く歌つて居るこれもおもしろい。

深草の帝の御國忌に讀める

文屋康秀

草ふかきかすみの谷に影かくして日暮れし今日にはあらずや

【語釋】

○深草の帝。仁明天皇。山城國深草の陵に葬り奉つたから深草の帝と申上げる。○御國忌(ミヨキ)。天皇崩御の御忌日。仁明天皇は嘉祥三年三月二十一日崩御、寶算四十一。この御國忌は仰一週忌のことと思はれる。○草ふかきかすみの谷。深草の霞のこめてる谷の意。「草ふかき」は地名の「深草」を字の意味から云つたのである。「かすみの谷」は谷の名では無い。

○今日にはあらずや、流布本には「今日にやはあらぬ」とある。疑問詞の「や」が途中にあるのと、終りにあるのとの相違で意味は同じが趣が異なる。「すもぬも」も打消の助動詞。

○今日にはあらずや、流布本には「今日にやはあらぬ」とある。疑問詞の「や」が途中にあるのと、終りにあるのとの相違で意味は同じが趣が異なる。「すもぬも」も打消の助動詞。

○今日にはあらずや、流布本には「今日にやはあらぬ」とある。疑問詞の「や」が途中にあるのと、終りにあるのとの相違で意味は同じが趣が異なる。「すもぬも」も打消の助動詞。

【大意】 空に照りかゞやく日の如くあらせられた天皇が、おかくれになつて、あの深草の御陵に葬り奉つたのは丁

度去年の今日ではないか、今日なのだ。はやく一年の過ぎ去つた事だ。

○

深草帝の御時に、藏人頭にて夜晝馴れつかうまつりけるを、諒闇になりければ、さらに世にも交はらずして、比叡の山にのぼりて、かしらおろしてけり、その又の年、みな人御服脱ぎ

て、あるはかうぶり給はりよろこびけるを聞きて

みな人は花のころもになりぬなり苔のたもとよ乾きだにせよ

僧正遍照

みな人は花のころもになりぬなり苔のたもとよ乾きだにせよ

【語釋】

○藏人頭。藏人の長官。藏人は天皇の御側近く仕へて。陛下の御衣、御食事等、御起居の事及び傳宣、進奏等の事を掌

る役人。○かしらおろす。剃髪すること。出家すること。○あるは。或は。○かうぶり給はり。位階を賜はり。○花の衣。花やかな衣。(こゝは喪服に對して普通の衣を云ふ)。○苔のたもと。僧衣の袂。

【大意】——仁明天皇御在世の時、(自分は)藏人の頭で、(陛下の御側近く奉仕して)夜晝御親しく御仕へしてゐたの

であるが、(崩御遊ばされて、諒闇になつたから、(自分は)一切、世間との交際を断つて、比叡山に登つて、出家し

てしまつた。その翌年諒闇が明けると、他の人は皆喪服を脱いで(花やかなになり)或は位階を賜はつて喜んで居たの

を聞いて詠んだ歌——他の人は皆喪服を花やかな衣に着換へてしまつたのだ、が自分だけは以前と同じ墨染の衣を

着てゐる。せめて、自分の涙に濡れた法衣の袖が乾いてよもくれればいい。(袖に、せめて乾いてくれ、と命令し

ながら、其言葉の下から、盡きせぬ涙が溢れ出てゐる姿が見える歌である。)

○

櫻を植えたりけるに、やう／＼花咲きぬべき時に、かの植えたりける人、身まかりければ、そ

の花を見てよめる

紀茂行

花よりも人こそあだになりにけれいづれを先にこひむとか見し

【語釋】

○櫻を植えたりけるに。流布本には「さくらをうゑてありけるに」とある。「て」は過去の助動詞「つ」の連用形、○あだ

に。はかなく。むなしく。○見し。思ひしの意。花の縁で「見し」と云つたのである。○作者の名は流布本には、紀望行、又は

【大意】——(庭に)櫻を植えて置いたが、その櫻が、やうやく花が咲かうとしてゐる時に、その櫻を植えた人が死んだから、その花を見て詠んだ歌——花はすぐに散るものだが、その花よりも先に花を植えた人が死んでしまった。自分、花と人と、何方が先に空しくなつて其を戀ひ慕ふことだらうと思つて居たか。——勿論花が先に散つて花を戀ひ慕ふだらうと思つて居たのに。

○
惟喬親王これたかのみかの、父侍りける時に、よみけむ歌どもとこひければ、かきておくりける奥によみてかけりける

友 則

ことならば言の葉さへもきえな、むみれば涙のたぎまさりけり

【語釋】 ○惟喬親王。小野の宮と申上げた方で、文徳天皇の第一皇子。○父侍りける時によみけむ歌ども。流布本には「父の侍りけむ時によめりけむらたごも」さある。友則の父は有友と云ひ、貫之の叔父で、その歌古今集にも二首入つてゐる。○ことならば。かくとならば。かくの如くならば。○きえなむ。「きえな」の「な」は過去の助動詞「ぬ」の將然形。「なむ」は希望の助動詞、消えてしまつてほしい。○たぎまさりけり。「たぎ」たぎり上る。あふれ出ると云ふ程の意。

【大意】——惟喬親王が、(私の)父が生前に詠んだ歌を見せてくれと仰せられたので、父の遺詠を書いて贈つた、その終に自分が詠んで書いた歌。——こんなに悲しく思はれる事ならば、むしろ、父の歌も父と一處になくなつてほしい。父の遺詠を見ると、一入悲しくなつていよ／＼涙があふれ出る事だ。

○
題 し ら ず

読 人 知 ら ず

なき人のやどにかよは、時鳥かけてねにのみなくとつげなむ

【語釋】 ○なき人のやど云々。死に去つた人の居所。時鳥は冥土の鳥と云ふから、時鳥に、死んだ人の居るあの世へ行つたならば……と詠んだのである。○かけて。心にかけて。○つげなむ。「なむ」は希望の助動詞。

【大意】 時鳥よ、亡き人の所へ行つたならば、私がいつもあなたの事を思ふて、聲を出して泣いてばかり居るを告げてくれ。

○
式部卿親王しよぶけうのうぢの、閑院いんゐんの五親王ごしんおうにすみ侍りけるに、いくばくもあらで、女親王むすめの身まかりにける時に、かのみこのすみける帳かたびらのをに、ふみをゆひつたりけるを、とりてみれば、昔の手にて、この歌をなむかきつたりける

かづくに我を忘れぬ物ならばやまのかすみをあはれとは見よ

【語釋】 ○式部卿親王。宇多天皇の皇子で教皇親王と申上げる方。○閑院の五親王。閑院宮の第五女。傳不詳。○すみ侍りける。「すみ」は男が夜になると女の家へ通つて行つて、夫婦關係を結ぶこと。流布本には「すみわたりける」とある。「わたる」は動作の繼續する意である。○帳かたびらのを。流布本には、「帳のかたびらのひも」とある。ある方がいゝ。帳は御帳臺。「かたびら」は御帳臺にかけ一重の布帛。「を」は緒で、紐と同じ。○昔の手。「手」は筆跡。故人の筆跡。○かずかずに。深

【大意】 式部卿親王が、閑院の宮の第五の姫宮と契を結んで居られたが、間もなく姫宮が薨せられた時に、姫宮の居られた所の几帳のかたびらの紐に、手紙がくもりつけてあつたのを、開いて見ると、亡くなられた姫宮の御手蹟で、この歌が書いてあつた。(即ち)——深く私を思つて、お忘れにならないのでしたら、あの山の霞は、私の火葬された煙ですからそれを私とも思つて、あはれんで下さいませ。

○ をとこの、人の國にまかけるまに、女にはかに病をして、いと弱くなりける時に、よみおきて身まかりける

よみ人知らず

こゑをだにきかて別るゝ魂よりもなきとこに寝む君ぞかなしき

【語釋】 ○人の國。他國。 ○魂。自分の魂。

【大意】——男が他國へ行つて居る間に、故郷に残つて居た女が、急に病氣をして、甚しく衰弱してしまつた(回復の見込が無くなつた)時に、女はこの歌を詠み遣して死んだ、即ち——あなたの聲を聞くことさへも出来ずに死に別れて行く佗しい私自身の魂よりも、やがて歸つて來られて、妻のない床に獨り寝られるであらうあなたが、一層いとしく思はれます。

○

病してよわくなりける時よめる

業平朝臣

遂にゆく道とはききしものなれど昨日今日とは思はざりしを

【語釋】 ○遂にゆく道。結局は行くべき死の道。 ○ききしものなれど。聞いて居たのではあるけれど、流布本には「かねてきゝしかど」(前から聞いては居たが)とある。

【大意】 死は、何人もが結局は行く道であるとは、聞いて居ただけけれど、こんなにも早く、昨日や今日に、自分が死の道を行かねば成らないとは思つて居なかつたのに。まあ意外にも早く來たものよ。

古今和歌集卷第十七

雜部上

題しらす

讀人しらす

わがうへに露ぞおくなる天の川とわたるふねのかいのしづくか

【語釋】 ○雜部上。流布本には「雜部上」とある。序に「春夏秋冬にも入らぬくさくの歌云々」とある其「くさくの歌」で、先に上げた四季、戀、賀、別離、禊旅、哀傷等の部に入れ難いものを此處に集めてある。 ○天の川とわたるふね。「と」は瀬門。兩岸が近寄つて川はゞの狭くなつてゐる所。

【大意】 私の身體の上に、まあ露が置いた。これは天の川の瀬内を渡る舟の櫂の雫が落ちて來たのかしら。

色 錦 唐錦

おもふどちまとみせる夜は唐錦たまくをしき物にぞありける

【語釋】 ○おもふどち。氣の合ふた者同志。「男どち」女どち「若きどち」等と云ふ。○まとむ。團圓の意。○唐錦。「たつ」の枕詞。「たつ」は「裁つ」と立つにかけてある。○題知らず讀人不知の歌。

【大意】 氣の合ふた者どもが、集つて楽しく語り合つて居る夜は、座を立つのが惜しいものである。

東京都五中 紫のひととゆゑにむさし野のくさはみなからあはれとぞみる

【語釋】 ○紫のひととゆゑに。一本の紫がある故に。紫は草の名で、その根から紫の染料をとるので此名がある。莖の高き二尺程、葉は細長くて互生する。夏に白い花が咲く。古今集戀の三に「戀しくばしたにを思へむらさきのねずりの衣色に出づなゆめ」と云ふがある。○みなながら。皆ながら。全部。○題知らず、讀人しらすの歌。

【大意】 わが愛する紫の一本がある故に、その縁にひかれて、紫の生えてゐるあの武藏野の草は悉く親しく思はれる。

【餘言】 寓意の歌であらう。裏の意は、我が愛する一人の人の故に、その一族に對しては悉く親しく思ふ、と云ふのであらう。猶この歌から紫の「ゆかりの色」と云ふ。「紫のゆかり」と云ふ語も此の歌から出た語である。

めのおとよのもとに侍りける人の表衣おくる時よめる

業平朝臣

紫のいろこきときはめもはるに野なる草木ぞわかれざりける

【語釋】 ○めのおとよのもとに侍りける人。「め」は妻。「おとよ」は、こゝは妹の意。妻の妹の所に居て妹と夫婦關係を結んでゐる男。流布本には、「めのおとよ」とをもて侍りける人」とある。自分の妻の妹を妻に持つてゐる男の意で同じこと。妻の妹婿のこと。○表衣。袍のこと。○紫のいろこき云々。前の「紫のひととゆゑに云々」の歌を土臺にして詠んでゐる。自分の妻を愛する時はの意。○めもはるに。見る目も遙に。○野なる草木もわかれざりける。野の草木もわけへだてがない。紫のゆかりで、同じ様に親しく思はれる。

【大意】 妻の妹婿に袍を贈る時に詠んだ歌——(表面の意は)我が愛する紫が美しく咲く時は、見る目遙に、見ゆる限りの野の草木も、紫のゆかりに依つて、わけへだてなく可愛ゆく思はれる。(と云ふので、裏面の意は)妻を可愛ゆく思ふ時には、妻の縁類の人は、皆隔てなく親しく思はれる。

【餘言】 この歌は伊勢物語に出てゐる。この方では嘗つて二人の姉妹があつたが、一人は身分の底い貧しい男の妻になり、一人は位も高く有福な男の妻になつてゐた。さて貧しい男の妻になつた女は、十二月の末に、夫の袍を洗濯して糊張りしたが、此様な賤しい仕事に馴れてゐなかつた爲に誤つて袍の肩の所を裂いてしまつた。女は爲んかたなく、唯泣いてゐるが、其事を一方の有福な男が聞いて、可愛さうに思つて新しい袍を贈る時に、この歌を詠んだとしてゐる。

二條の後の、まだ東宮の御息所と申しける時に、大原野に詣でたまふ日よめる

業平朝臣

大原やをしほの山も今日こそは神代のことをおもひしるらめ

【語釋】 ○二條の後。清和天皇の皇后で陽成天皇の御母、藤原高子と申す方。○東宮の御息所。皇太子を生み奉った御息所。御息所は貴人の妾の意。こゝは女御と云ふ程の意。○大原野。山城國乙訓郡にある。今大原と云ふ。京都から三里程の所。○をしほの山。をしほの山の神の意。大原の小盞山には、藤原氏の祖神天兒屋根命(春日明神)が祀つてある。○神代のこと云々。藤原氏の祖神天兒屋根命は、天孫降臨の時に補佐の重任を帯びて天降つた神であるから、今自分の子孫の藤原氏から出た御息所が參詣せられると、殊に神代の古、自分が補佐の任を負うて居た事を思ひ出すであらう。○おもひしるらめ。過去の事を思ひ出して合點する意。流布本には「思ひづらめ」とある。

【大意】大原の小盞神(春日明神)も、今日、御子孫の藤原氏所出の東宮の御息所が參詣せられたのにつけて、神代の昔に、自分が天孫補佐の大任を負うてゐた事を思ひ出しなまつて、子孫が今も宮室を補佐し奉つて居る事に満足せられるであらう。

【餘言】 この歌、伊勢物語に入つて居て、「神代のことと思ひ出づらめ」と云ふのは、御息所が未だ天皇にお仕へしない前に、業平と契を結んで居られたので、業平がその頃の事を思ひ出られるでしやうと御息所に申上げたのであると記されてゐる。

○

良岑宗貞

五節の舞姫をみてよめる

あまつ風くものかよひちふきとちよ少女の姿しばしとどめむ

【釋語】 ○五節の舞姫。五節は毎年十一月中の丑の日に、宮中で行はれる儀式。その式に常寧殿で舞ふ少女を五節の舞姫と云ふ。この翌日は豊明節會を行はれる。この節會は近古以來天皇の御一代に一度、大嘗祭の行はれる年に行はれる事になつたが、(昨年十一月京都で行はれた。)平安朝には毎年行はれた。而して五節の舞姫は、傳説に依れば、天武天皇の御代に初まつたので、天皇が吉野へ幸せられて、琴を弾して居られると、空から五人の天女が降つて舞うた。以來五節の舞が初まつたのだと云ふ。(政治要略。三善清行の意見封事參照)。この歌も此の傳説を背景に持つて居る。○天つ風。天の風。空を吹く風。○雲のかよひち。天つ少女が通る雲の道。○作者良岑宗貞は僧正暹(暹)が出家しない前の名。○百人一首には、此歌が僧正暹照の名で入つてゐる。

【大意】 空を吹く風よ、天つ少女が歸つて行くべき雲の中の路を吹き閉ぢてくれ、(吹き閉ぢて歸れない様にしてくれ)あの美しい天つ少女の姿を、せめてもう少時地上に止めたい、と思ふから。

○

方違に人の家にまかりける時に、あるじのきぬをきせたりけるを、あしたにかへすとて

紀友則

蟬のはのよるのころもは薄けれごうつり香こくも匂ひぬる哉

【語釋】 ○方違。平安朝以來、天を遊行する星の一種の天一神及大白神の居る方向へ行くといふ事があると信ぜられ、これらの星

の居る方角を「方ふさがり」と云ひ、其方向へ行く事を避けた。而して如何しても其方向へ行かねばならぬ時には、先づ「方ふさがり」の方向と違ふ方向へ行つて、其處に宿り、其處から再び目的の方向へ行くのである。この目的の方向とは違ふ方向へ行くのを、「方違」と云ふ。因に天一神（金神とも大將軍神とも云ふ。）は巳酉の日から壬辰の日まで四十四日で天を一周し、癸巳の日から戊申の日まで十六日間は天の中央に居る。（十六日間は四方とも方ふさがりは無い。他の四十四日は東西南北四維の内何方か一方はふさがつてゐる。）太白神は此とは違つて、一日から八日まで東西南北四維の八方を一夜毎に移つて、天を一周し、九、十の二日は天の中央に居る。十一日から十八日まで又回つて歩くのである。この二つの星の居る方向へ行く事は必ず避けたいのである。○あした。翌朝。○蟬のはの云々。蟬の翅の様に薄い。次の「こくも」と對照させてある。○うつり香こくも。「うつり香」は主人のうつり香、即ちたきしめた香の匂ひ、の意であるが、裏に主人の深切を對する意を含んでゐる。

【大意】

方違に人の家に宿つた時に、その家の主人の衣を着せてくれたのを、翌朝返す時に詠んで贈つた歌。――

お貸し下さつた衣は蟬の翅の様に薄いけれど、あなたの移り香は濃くも匂つた事よ、（御深切は誠に辱く思はれた）――此の歌を詠んだ時は夏であつたのであらう。

○

わが心なぐさめかねつさらしなやをばすてやまにてる月を見て

【語釋】

○さらしなやをばすてやま。「さらしなや」の「や」は軽い感嘆詞。信濃國更科郡にある娵捨山。

【大意】

我が心は、何處となく物さびしさがあつて、慰め兼ねた。今夜この更科の娵捨山に照る月を見てみると、何となく慰められないものがある。

【餘言】

大和物語に、更科に住んで居た男が、從來親の様に仕へて居た一人の伯母を、山に捨て、歸つたが、明く照る月を見て前記の「わが心云々」の歌を詠み、又山へ行つて伯母をつれて來た。それから其れを娵捨山と云ふ様に成つたと記されてあるが、固より娵捨山と云ふ地名から作り上げた説話に過ぎない。

○

業平朝臣

大方は月をもめてじこれぞこのつもれば人の老となるもの

【語釋】 ○大方は。大抵ならば。大概のことなら。○めでじ。賞めまい。○月。天上の月と時間の月とをかけてある。

【大意】 月はいゝものではあるが、大抵は、賞めないでおかう。この月を賞めることが、度重なると、（月が重なる）とそれが人に老を齎すのだから。

【餘言】

この歌も伊勢物語に出てゐる。「昔いと若きにはあらぬ、かれこれ友だちども、集りて月を見て、それがなかにひとり」の人が此の歌を詠んだとある。

○

月おもしろしとて、躬恒がまうできたりければよめる

貫之

かつみれど疎くもあるか月かげのいたらぬさともあらじとおもへば

【語釋】 ○かつみれど。一方では月を面白いとは見るけれど。「かつ」は片方、一方の意。 ○月かけ。月の光。

【大意】 明るく照る月光を面白いとは見るけれど、又一方では疎ましくも思はれる。あの月光が自分の所へだけ照るのではなくて、何處へでも照つて居るのだと思ふと、疎ましくも思はれる。

【餘言】 古今集卷三に「ほととぎすな(汝)が啼く里のあまたあればなほうとまれぬ思ふものから」と云ふのがある。今の歌と比較すると、時鳥と月とが異つてゐるのみで、材料の取扱方は全く同じである。

○
惟喬親王の狩にまかりけるともにまかりて、やどりにかへりて、夜ひと夜酒をのみ、物語しけるに、十日あまり一日の月かくれなむとしけるに、親王をひてうちへいりなむとしければ、よみける

業平朝臣

あかなくにまだきも月の隠るゝか山の端にげていれずもあらなむ

【語釋】 ○かりにまかりけるともにまかりて。流布本には「かりしける」ともにまかりて」とある。意味は同じ。鷹狩の同伴をして。 ○夜ひと夜。一晚、 ○あかなくに。飽かぬに。十分でないのに。 ○まだきも。早くもの意。「まだき」は時期よりも早いこと。 ○月。十一日の月を指してゐるのであるが、裏面は親王に譬へてゐる。 ○あらなむ。あつてほしい。「なむ」は希望の助動詞。

【大意】 惟喬親王が狩に行かれた時、その伴をして行つて、(狩が終つて)宿に入つて、一晚中酒を飲み物語をした

が、折柄出てゐた十一日の月が、もう山に隠れようとしてゐた時に(夜明け近くに)親王は酒に酔つて、席をはづさうとなされたので、詠んだ歌。――あの月はまだ見飽きないのに(もつと)見て居り度いのに(早くも山に隠れようとするのか。あの月が隠れる山が他へ逃げて行つて、月を入れずに(隠さずに)おいてほしいものだ。(月を親王に譬へて、酒宴は酣であるのに、親王が早くも席をはづされるのは餘波惜しいと云ふ意を含めてゐる。)

【餘言】 この歌。伊勢物語に出てゐる。即ち惟喬親王が水無瀬の別荘へ、毎年櫻の頃に行つて居られたが、或年河内の交野へ狩に行かれ、天河を経て水無瀬へ歸られて、酒宴があつた。その時馬頭であつた人(その人は狩業にはいつも御伴をする人であつた)がこの歌を詠んで親王に奉つた處、紀有常が親王に代つて、おしなべて峯もたひらになりなむ山の端なくば月も隠れじ返歌したと記してある。

○
小竹の葉にふりつむ雪のうれを重みもとへだちゆくわがさかりかも

【語釋】 ○うれを重み。「うれ」は末。さきの方が重いので(雪の爲に)。 ○もとへだちゆく。「へ」は「く」の誤寫であらう。流布本に「くだちゆく」とある。「くだち」は「くだり」(降り)の古言。傾くの意。 幹が傾いてゆく。 ○わがさかりかも。「さかり」は「男ざかり」の「さかり」壯年期の意。流布本には「わがさかりはも」とある。「かも」も「はも」も感嘆詞。 ○題しらす酒人しらすの歌。

【大意】 笹の葉に降り積む雪に葉末が重いので、段々に幹が傾いてゆく笹の如く、衰へてゆく我が壯年期よ。――漸く壯年期を過ぎて、初老の境に入らうとする人の述懐。初句から四句までは、「もとくだちゆくわがさかりかも

業平朝臣、はゞのみこ長岡にすみはべりける時に、業平宮仕すとて、時々もえまきこぶらはず侍りければ、しはす許に、母の親王のもとより、とみの事とて、ふみをもてまうできたりければ、あけて見れば、ことばなうてありける歌

おいぬればさらぬ別もありといへばいよく見まくほしき君哉

【語釋】 ○はゞのみこ。業平の母、桓武天皇の皇女伊登内親王。 ○長岡。山城國乙訓郡京都市の西南三里程の所。桓武天皇の御代、都が京都へ遷る前に、一時都があつた所。 ○時々もえまかりとぶらはず。「時々」は折々。「えまかりとぶらはず」は罷り訪らひ得ず、訪問する事が出来ない。 ○とみの事。「とみ」は頼の音便。至急の事、急の用事。 ○ふみをもてまうできたりければ。流布本には「ふみをもてきたり」とあつて「ければ」が無い。「ければ」は無くても意味は通ずる。文章としては、次に「あけて見れば」と云ふ語が来るのだから、「ければ」の無い方がいゝ。 ○ことばなうてありける歌。普通の手紙の文はなくて、歌だけが書つてあつた、その歌の意。流布本には「ことばはなうて」とは「字が入つてゐる。「は」が入つて入る方が文章としては普通である。○さらぬ別。去らぬ別。何人も逃れる事の出来ない別。即ち死別。

【大意】 業平の母親王が、長岡に住んで居た時に、業平は宮庭へ仕へる爲に京都に居て、折々も母を訪問する事が出来ないで居た處が、十二月頃に、母の親王の處から使の者が、急の用事と云つて、手紙をもつて來たので、開いて見ると、普通の手紙の文は無く、歌だけが書いてあつた。その歌。——自分の様に年を取ると、あの何人も避け

難い死別もあるといふから、(さうでなくてさへ會ひ度いと思ふのに)いよく益々其許に會ひ度いと思ふ事である。

返歌

業平朝臣

○よの中にさらぬわかれのなくもがな千代とも祈る人の子のため

【語釋】 ○返歌。流布本には「返し」とある。前の母親王への返歌である。○なくもがな。なくてほしい。○千代ともと祈る。母が千代も生きて居てほしいと祈る。流布本には「千代もまなげく」とある。「なげく」は嘆願の意。元永本の「いのる」の方が穩當である。

【大意】 人生に、何人も避けられない死別と云ふ事が無ければいゝ、千代までも親は生きて居る様にと祈る人の子の爲に。(下句と上句を逆にして見ると意味はよく通ずる)

【餘言】 業平とその母親王の應答の歌は伊勢物語に出てゐる。参考の爲に、その詞書を左に挙げる。「昔、男ありけり、身はいやしなから、母なむ親王なりける。その母長岡といふ所に住み給ひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばく得まうです。ひとり子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さる程に、十二月ばかりに、とみの事とて、御文あり。驚きて見れば、ことくはなくて「考いぬれば……」となむありける。これを見て、馬にも乗りあへず、参るまで、いととうち泣きて道すがら思ひける。「世の中に……」。

題しらす

讀人しらす

ちはやぶる宇治のはしもりなれをしぞかなしとはおもふ年のへぬれば

【語釋】 ○ちはやぶる宇治のはしもり。「ちはやぶる」は枕詞であるが、「宇治」にかゝる。○はしもり。清輔本に「はしひめ」とあるのは誤寫であらう。○なれをしぞ。「なれ」は汝。「しもぞ」も意味を強める辭、○かなしとは思ふ。「かなし」は「悲し」ではなく、親愛の意を表はす。流布本には「あはれとは思ふ」とある。

【大意】 宇治の橋守よ。私はお前を特に親しく思ふ。年を取つてゐるから。

藤原興風

誰をかもしる人にせむたかさごのまつもむかしの友ならなくに

【語釋】 ○誰をかも。「か」は疑問詞。「も」は感嘆詞。誰をまあ……か。○しる人。知己。昔からの本當の友。○たかさごのまつ。高砂は播磨の加古郡高砂。こゝには古い松があるので有名。古今集の序文にも「高砂、住の江の松も云々」とある。○むかしの友ならなくに。「昔からの友ではないのに」。○この歌百人一首に入つてゐる。

【大意】 (まあ、自分は、ひどく年を取つてしまつて、以前からの友達は何死んでしまつたが)誰をまあ友としようかしら。あの古いといふ高砂の松でさへも、昔からの友達ではないのに(松の方が自分より年が若いのだから)。さても寂しい事だ。

讀人しらす

わたつみの沖の汐合にうかぶ泡のきえぬものからよる方もなし

【語釋】 ○わたつみの。沖の枕詞。(海の意に用ゐる事もある。もとは海神の意)。○沖の汐合。流布本には「おきつ。鹽あひ」とある。この方がいゝ。汐合は潮の満ち合ふ所。○ものから。ものながら。ものであるけれども。○よる方。寄邊。たよりにする所

【大意】 (初句から三句までは、序詞)沖の潮合に浮ぶ泡の様に、自分は、命は消え失せずにあるけれど、たよりにする所(人)もない。(老人の述懐の歌)。

わたつみのかざしにさせるしろたへの浪もてゆへる淡路しまやま

【語釋】 ○わたつみ。こゝは海神の意。「わた」は海、「つ」は「の」。「み」は神の略である。○かざし。簪。○しろたへの。「白き」の意。(しろたへは、もとは、白きたへの意で、たへは袴、たくとも云ふ。袴の皮で織つた織物のこと)○浪もてゆへる。「ゆへる」は結べるの意。帯で腰を結ぶ如く、浪を以つて淡路島を取り巻いてゐるのを云ふ。

【大意】 神の簪に挿してゐる花と云ふ白浪を以つて、取りめぐらしてゐる、あの淡路の島山面白い眺である。

三月の朔ついでごろに、しのびに人にもいひてのち、雨そほ降りければ、よみてつかはしける

業平朝臣

おきもせずねもせずよるをあかしては春の物とてながめくらしつ

【語釋】 ○三月の朔ごろ。流布本には「やよひついたちより」とある。意味から云ふと「朔ついでごろ」の方がいい。○しのびにも
のいひてのち。流布本には「しのびに人に物らいひてのちに」とある。「物ら」は「物を」の誤であらうか。但し元永本は前
記の如く「ら」も「を」もない。こつそり女と戀を語つて後の意。○雨そほ降る。細い雨がそほくと降る。○春の物とて
ながめくらしつ。「春の物とて」春の季節のものとして。次の「ながめ」に係る。「ながめ」は「長雨」と「眺め」にかけてある。
「眺め」はぼんやり物思ひをしてゐること。

【大意】 あなたの事を思ひつゞけて、夜中、起きても居らぬが、眠りもせずに夜を明かし、晝になつては、「春の
季節特有の長雨が降るが」私は眺めて一日を暮してしまつたよ。

【餘言】 この歌は、伊勢物語の初の方にある。即ち

「昔男ありけり。奈良の京みやこははなれ、この京みやこは人の家まださだまらざりける時に、西の京に女ありけり。その女世
の人には勝れりけり。かたちよりは心なむまさりたりける。獨りのみにもあらざりけらし。それをかのみめ男うち
物がたらひて、歸り來て、いかと思ひけむ、時は三月のついでたち、雨そほふるにやりける。」

おきもせず寝もせて夜をあかしては春のものとして眺めくらしつ
とある。

小野小町

みるめなき我身をうらとしらねばやかれなで海人の足たゆく來る

【語釋】 ○みるめ。「見る目」に海松布をかけてある。見る目は見る機會。海松布は海草。○我身をうらと。「うら」は「憂し」の
意に「浦」をかけてある。○かれなで「離れずに」即ち一夜も缺かさずに。○海人 海松布を狩る海人に、自分の處へ通つて
來る男の意を隠してある。○足たゆく「たゆく」は口語のだるく、疲れた貌。足がたゆくになる程來る。○この歌は縁語が澤
山用ゐられてゐる。即ち、みるめ——うら——海人。

【大意】 何度來ても會はない、自分と知らないからからか、一夜も缺かさずに、足を疲らせて、あの人は來る事
よ。どうせ會へないのに。

○

忠 岑

有明のつれなく見えしわかれよりあかつきばかりうき物はなし

【語釋】 ○有明の「有明の月の」と云ふのを「月の」を省略したのである。月が空にあるのに夜があけること。十六夜以後はかう

いふ様になる。○つれなく つれなしは氣強いこと。情知らぬ顔に、此方の要求を受け入れてくれぬこと。

【大意】△つれない女の家から、曉に、わびしい心を抱いて歸つて來た時に、あの有明の月が、よそくしげに見えた、あの時以來曉ほど心憂いものはない。この歌百人一首に入つてゐる。

在原元方

あふ事のなごさにしよる波なればうらみてのみぞたち歸るべき

【語釋】○あふ事のなごさ 逢ふ事の無きと云ふのに清をかけてある。渚は波打際。渚の縁で「よる波」「うら」「たちかへる」等の語を用ゐた。○うらみて 恨みて、に、浦見をにかけてある。○たち歸るべき。「たち」は接頭語。自分が歸ると云ふのに岸に寄せた波が歸ると云ふのをかけてある。流布本には「立歸りける」とある。意味から云つても文法上から云つても「たち歸るべき」の方がいい。

【大意】 逢ふ事も出來ない自分だから、たゞあなたを恨んで歸ることであらう。詫しい事だ。(波に自身を譬へてゐる技巧的な歌である。)

御春有輔

あやなくてまだきなき名の立田川ねたらでやまむものならなくに

【語釋】○あやなく 道理なく。「なき名」に係る語。○まだき まだきにの意。早くも。○なき名の立田川 事實無根の事

の噂が立つ。「名のたつ」の「たつ」から立田川と云つたので、立田川には別に意味はない。語調を調へる爲に用ゐたのである。が、川の縁で次の「わたる」と云ふ語を引出したのである。○わたらでやまむものならなくに。「わたる」は川の縁で云つたので戀を爲遂げるの意。「やまむ」止まむ。「む」は未來の助動詞。「なく」は打消の助動詞「ぬ」の延音。渡らないで(目的を達せず)に中止するようなものではないのに。○作者有輔は藤原敏行の家人で、延喜十二年に左衛門の權小志になつた人。

【大意】 (まだ事實女に逢つても居ないのに)理なく、早くも浮名が立つた事よ。然し噂が立つたからと云つて中止するやうな戀でもない。男女の逢ふを川を渡るに比したのは前代からある。

昔、五條わたりに、人をあひ知りて通ひけるを忍びたる所なれば、門よりは入らで、築土の崩より入りけるを、たびたびかさなりて、あるじ聞きつけて、その道に人をふせて守らせければ、行きけれど、え逢はで歸りつゝ、よみて遣しける

業平

ひとしれぬ我かよひぢのせきもりは宵々ごとにうちもねななむ

【語釋】○昔五條わたりに 流布本には「ひんがしの五條わたりに」とある。東の五條は、京都五條通で朱雀大路より東の方。「わたり」は邊。附近。○人をあひ知りて 戀人が出來て。「あひ」は接頭語。○築土 土塀。○人をふせて 番人を伏せて。番人を隠しておいて。○ひとしれぬわがよひぢ。人に知られぬやうに、こつそり自分が通つて行く道。○せきもり 關

守。道に居る番人。○宵々ごとに 毎夜々々。宵は夜と同意に用ゐてある。○うちもねななむ。「うち」は接頭語。「ね」は寝。「ねな」の「な」は過去の助動詞「ぬ」の將然形。「なむ」は希望の助動詞。寝てしまつてほしい。

【大意】 昔五條の邊に戀人があつて、夜毎に通つてゐたが、こつそりと行かねば成らない所なので、門からは入らないで、土堀の崩れた所から出入してゐたのが、其が度重なつて、家の主人が、自分が通つて居ることを聞きつけて、自分の通つて行く處(土堀の崩れた所)に番人を隠して女を守らせたから、逢ひに行つたけれども、逢ふことが出来なくて歸つて来て、女に詠んで送つた歌——人に知られずにこつそり通つて行く道の、あの番人は、毎夜々々寝てしまつてほしいものだ。

〔餘言〕 この歌は伊勢物語の初の方に出てゐる。詞書が少し違つてをるから、引用してみる。「昔男ありけり。東の五條わたりにいと忍びていきけり。密なる所なれば、門よりもえ入らで、童の踏みあけたる築地のくづれより通ひけり。人しげくしもあらねど、度重なりければ、あるじ聞きつけて、その通ひ路に、夜毎に人をすゑて守らせければ、彼の男、いけどもえ逢はで歸りけり。さてよめる。人知れぬ……うちも寝ななむ。と詠みけるを聞きて、いといたう(女が家ノ主ヲ)怨じけり。あるじ(二人ガ逢フヲ)許してけり。

○

小野小町

秋の夜は名のみなりけりあひしあへば事ぞともなくあけぬるものを

【語釋】 ○名のみなりけり 長いと云ふ評判だけで、實は一向長くはなかつた。○あひしあへば、「し」は意味を強める辭。違

つて見れば。流布本には「違ふといへば」とある。意味から云ふと、「あひしあへば」の方がいゝ。○事ぞともなく。何と云ふこともなく。違つたと云ふ程のこともなく。十分語らふ暇もなく。

【大意】 長いものと一般に云はれてゐる秋の夜は、云ふだけで、實は一向長くはなかつた。戀しい人に逢つて見れば、何を話し會つたとも思はぬ中に、夜が明けてしまつた。

○

躬恒

長しともおもひぞはてぬ昔よりあふ人がらのあきの夜なれば

【語釋】 ○おもひぞはてぬ 「ぞ」は意味を強める辭。「ぬ」は打消の助動詞。思つてしまはない。さう決めてしまはない。「はてぬ」は終てぬの意。例外なく云々と決めてしまはないの意。○あふ人がらの 違ふ相手次第の。(相手がつれない人なら秋の夜を長く感ずるし、相思の間柄なら、秋の夜も明けやすいのを嘆するのだから)。

【大意】 自分は秋の夜を必ず長いものと思ひ決めては居ない。それは昔から。違ふ相手に依りて秋の夜が長いとも短いとも感ぜられる。貴方によつては短い。

○

藤原國經朝臣

寛平御時中宮の歌合に

あけぬとていまはの心つくからになどいひしらぬ思ひそふらむ

古今和歌集選釋

【語釋】 ○あけぬとて 夜が明けてしまふと云つて。 ○いまはの心つくからに 今は別かれれば成らぬと思ふ心が添ふにつけて。「からに」は、云々に従つて、云々につけての意。 ○などいひしらぬ思ひそふらむ。何故まあ、云ふに云はれぬ情ない氣がするのだらう。因に「思ひそふらむ」の「らむ」は第三句「つくからに」の「からに」を受ける。「など」を受けるのではない。○作者國經は藤原長良の長子で、關白基經の兄。大納言正三位。延喜八年、八十二歳で薨。

【大意】 夜が明けてしまふと云つて、もう別かれなければ成らぬと思ふと、何故まあ、その時になると云ふに云はれぬ情ない氣がするのだらう。(きぬぎぬの悲しさを歌つたもの)

○ あふ事は玉の緒ばかり名のたつは吉野のかはのたぎつせのごと

【語釋】 ○玉の緒ばかり ほんの少し。 ○たぎつせ 「たぎつ」は沸き立つ、逆巻く。「せ」は急流。「たぎつせ」で奔濤する急流。 ○讀人しらずの歌。

【大意】 二人が逢ふのは、玉の緒程の僅かな間であるのに、名は吉野川の奔濤する急流の様に世間へ響き渡る。(まゝならぬ世である)。

伊 勢

○ 知るといへば枕だにせてねしものをきりならぬ名の空にたつらむ

【語釋】 ○知るといへば。枕はどんなに秘してゐる園中の秘事でも知つてゐると云ふから。 ○きりならぬ名の空にたつらむ。「空にたつ」は、ぼつと世間に廣まること。霧ならば空に立つのは當然だが、霧ではない、何故世間に廣まったのだらう。流布本には「ちりならぬ名の」とあるが、枕と云ふ語との讀き工合が考へると「ちり」の方がいゝ。「空」の関係からは「ちり」の方がいゝ。

【大意】 (あんなに秘し隠して、あなたと一處に寝た事が、即ち)枕は園中の秘密を知つてゐると云ふから、枕にさへも知らせまいと思つて、枕もせづに、こつそりあなたと寝た事を、如何して人が知つて、こんなに世間の評判になつたのだらう。

古今和歌集 卷第十四

戀 四

題 不 知

讀人知らず

みちのくのあさかの沼の花かつみかつみる人のこひしきやなぞ

【語釋】 ○戀四 流布本は「戀歌四」とある。 ○みちのくのあさかの沼の花かつみ。この三句は次の「かつみる」の序詞。「みちのく」は奥羽地方。「あさかの沼」は岩代國安積郡にある。「花かつみ」の「かつみ」から次の「かつみる」に係つて行くのである。「花かつみ」は異説があつて、解釋が一定してゐないが、大方あやめの類であらう。 ○かつみる人のこひしきやなぞ 一寸見る人を何故戀しく思ふのだらう。流布本には「かつみる人にこひやわたらむ」とある。